
残り香

高田橋 渡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残り香

【Nコード】

N4147K

【作者名】

高田橋 渡

【あらすじ】

大人の恋愛、少しだけ覗いてみたくはないですか？
様々な事情を背負った2人が出会って始まった恋。
そして家族愛。
さて、その行方は・・・

Episode 1 出会い(前書き)

初めての小説に挑戦です。

つたない文で恐縮ですが、読んでいただけたらうれしいです。

どうぞ最後までお付き合いください。

Episode 1 出会い

忘れられない笑顔の記憶はいつでも頭の隅にある。

父さんとの事業に失敗し、

家も家族も友人も失ったアキラに唯一残された人。

そんな彼女との出会いの瞬間は、

今でもハッキリ覚えている。

出会い

198

すべてを無くすダメな奴には、悪魔君が群がってくる。

そんな時を、そんな人間を待っていたかのように誘いはやってきた。

「簡単に儲かる仕事」

とかいう同業者からの怪しい誘いもその一つ。

「¥8,000で夢が買える仕事」

今のアキラにはその金額も用意できるか怪しいものだった。

ファミレスで食事を御馳走してくれるというので、

「夢が買える仕事」とやらをとりあえず聞きに行くことにした。

けして暇と時間を持って余している訳ではない。

同業者の鈴木との待ち合わせ場所に、約束の時間より少しだけ早く着いた。

1月の夜空には星がなく、今すぐにでも雨が落ちてきそうだ。

しかし暖冬だ、雪になることはないだろう。

雪不足で、スキー場がメインのリゾート地は首筋に冷たい物を感じている頃だろう。

TOYOTA社製のワンボックスがアキラの前に停車した。

車から同業者の鈴木と、いかにも怪しげな男が降りてくるのがみえる。

黒いスーツにオールバックできめているヘアスタイルがとても怪しげな彼にマッチしている。

アキラより10は歳が上なのだろうか。

警戒した方がよさそうだ、アキラは注意深く彼を観察した。

「はじめまして・・・」

いかにも怪しげなその男は、右手を差し出し握手を求めるしぐさをした。

その作り笑顔と右手首に垂れ下がる太い金のブレスレットが、怪しさをさらに際立たせる。

不安な気持ちが湧いてきた。

今すぐにこの場を去りたい。

そんな気持ちを察したのか、

鈴木はアキラを逃がさないつもりなのか、

肩を組んでワンボックスの二列目に乗り込むように即す。

帰るなら今この時しかないと思っではいるのだが、

決断する前にステップに足がかかり車内に乗り込んでいた。

ヤニの匂いが充満する車内が、逃げ出したい気持ちを強めた。

1月の車外と車内の温度差でフロントガラスを曇らせないようDE

Fから吹き出す温かい風が、

匂いをくまなく車内に行き渡らせる役目をしている。

喫煙しないアキラにはかなりキツイ。

その気持ちを無視するかのようには、

怪しげな彼は車に乗り込むと同時にタバコを取り出しライターで火をつけた。

一つ一つの行動が最悪に思える。

怪しげな彼は色々な話をしていたようだったが、殆ど覚えていない。

夢がどうの、高級車がどうのって話だったようにもかすかに記憶し

ている。

そんな話しはどうでもいい。

アキラが頭に思う事はファミレスのメニュー。

「何をご馳走になろう」

ただそのことだけだった。

30分程度は走ったのだろうか。

今も相怪しげな彼は変わらす話を止めない。

よくしゃべる。

ヤニの匂いと、安っぽい車の芳香剤が気分を余計に悪くした。

「あとどれ位？」

とにかく今すぐに車から降りたい。

退屈な話しかから解放されたかった。

そう思いながら鈴木に聞いてみた。

「もうすぐ」

想像どうりの答えが返ってくる。

T字路の交差点の正面やや右に交番が見える。

その脇の細い路地に、3人を乗せた車は右折して入っていった。

一方通行かと思われるほどの細い道で、信号待ちをしている対向車

とすれ違う。

農地でも分譲したと思われる、建て売りの同じような形をした家が

多く立ち並ぶ路地を走り抜け、

現在は廃墟となつている製材所、関東製材と書いてある倉庫が建つ

空き地部分にワンボックスが入っていく。

空いてる場所を探しバックで駐車した。

どうやら到着したようである。

やっと外の空気が吸える。

スライドドアが開くとホツとした。

町中なのに空気が新鮮に感じたのは何かの勘違いなのだろうか。

「帰りたい、今すぐ帰りたい」

興味も無いのに、食事の誘いに惑わされ来たことを後悔した。たかがファミレスごときに。

綺麗な女性の誘いならまだしも、相手は中年のおっさんだ。しかも、あの怪しげな男が一緒となると話しは大きく違ってくる。食事中もあの調子でしゃべり続けられたらと考えると、飯もうまく感じないであろう。

薄暗い路地を歩いていると踏切の遮断機の電子音が聞こえてくる。確かこの辺りを私鉄が走っているはずだ。

一軒の美容室の前にスーツ姿の男性が20名程、それに準じた服装の女性が15名程、

いくつかの群れに分かれ何やら話をしている。

何名かは名刺交換をしているようにもみえる。

”いかにも怪しげ”な男がこちらにやってきた。

脇に抱えた黒塗りのセカンドバッグが妙に絵になる。

そのバッグから何かを取り出した。

耳にした事のある社名が印刷されている名刺を差し出した。

その男の名が谷崎だということを知る。

右手首の太い喜平のブレスレットがやけに目立つ。

それと同時に、にやける顔がそれ以上に気になる。

目が笑っていないその表情が、谷崎を余計に不振な男に思わせた。

相変わらず谷崎はしゃべりを止めない。

口から産まれてきたような男の典型だと思わせた。

美味しい話、うまい話しはもう懲り懲りであったはずなのに。

脇に抱えたセカンドバッグからタバコを取り出し火をつけた。

「そろそろお時間です 中へお入りください」

すこし浅黒い、というより健康的と例えた方がいいのか、

30代前半と思われる女性が、美容室の店内から外へ向かって声をかけた。

外にいた人達が、ゾロゾロと中に入っていく。

10坪程の店内の中央には、小さめのテーブルと独りがけのソファ
ーが置いてある。

それを頂点に放射状に椅子が並べられていた。
百合の花が放つ強い香りが店内に香っている。

花粉が服に着くと厄介だ。

簡単に取れない、近寄らないようにしないといけない。

店内をグルリと見回してみた。

途中退場がし易いように、入り口に近い一番手前の列の後方に席を
とり座ることにする。

谷崎が手招きをし、前方の椅子を勧めているようだ。

アキラは首を振り、お断りをした。

もちろん真剣に聞く気など無い。

席がすべて埋まったことに驚かされた。

入り口にはロールスクリーンが、ガラス戸には二枚のブラインドが
かかっている。

それらがそれぞれ下ろされたことにより、途中退場がしにくくなっ
た。

「いったい何が始まるんだ」

この様な団体行動は最も嫌いな部類だった。

「セミナー中は私語、飲食を控え、携帯電話の電源はOFFにして
ください」

司会者だと思われる女性が協力を求めた。

先ほど店内から声をかけていた、健康的な肌の色をした彼女だ。

その女性は、続けてある人物を紹介する。

「このビジネスで大きな成功を収めた杉本さんです」

その言葉と共に現れた男性は、60歳くらいで白髪まじり、

口ひげをキレイに整えた小柄だが均整のとれたスタイルをしたダン
ディーなおじさまだった。

席を埋めた人達を見回すと満足そうな表情をする。

「寒くないですか？」

前列のご夫人に杉本の渋めの声が掛かる。

彼女の頬が少し赤らんだように見えた。

体系にキツチリ合った仕立ての良いジャケット。

手入れが行き届き、大切に扱っているであろうウイングチップの革靴。

その靴に絶妙な長さで、良い具合に裾がドレイプしているパンツ。

お金のない人はこうはいかない。

ジャケットを脱いで司会者の彼女に手渡す。

少し顔が火照る程に店内は暖房が効いている。

ピンホールのシャツの襟も糊が程よく効いて、プレスもしっかりかかっている。

ネクタイのセンスもいい。

カフスもノット結びのオシャレたものを選んでいる。

そして腕時計は機械式のアンティーク。

身に付けている物には全く隙がないといっている。

常連だと思われるおばさまたちの好奇心な視線が、杉本に注がれていた。

このような人物を本来警戒するべきなのだろうか。

杉本の話し方は、人を引きつけた。

目力、時々見せるはにかんだ表情、絶妙な間。

飽きさせない魅力を心得ている。

話の内容はたいしたことはないのだけれど、展開のさせ方が素晴らしい。

いつしかペースに乗せられ聞き入ってる。

アキラはそんな自分に気がついた。

安っぽい香水を匂わす、隣に座っているおば様の馬鹿笑いにふと我に帰えり救われた。

アキラはつまらない質問を杉本にいくつかしてみた。

話を中断させ、どうでも良いような質問を何度か繰り返す。

狙いは杉本のペースを乱すこと。
それだけでよかった。

どうでも良い質問は、それまで杉本の不思議な話術に引き込まれていた部屋の空気を一変させるのに十分な効果があった。
明らかに店内の雰囲気が変わる。

杉本の声のトーンは下がり、ソファから前方に身を乗り出し、腕を大きさに振り、熱く語っていた杉本の顔から笑顔が消えた。
今は深く腰掛け天井をあおぐ。

杉本は店の奥、パーテーションが見える方に視線を向けた。
と同時に、その奥から二人の男が現れ、
アキラの両腕をそれぞれが抱え、入り口から外へ放り出す。
まるで安いドラマの一場面のようだ。

出される瞬間、左の男がアキラの脇腹に膝を入れてきた。
結構効いた。

よろけるように膝を着く。
外は霧雨が降り始めていた。

「晩飯食い損ねた」
そんなしょうも無いことをつぶやきながら夜空を見上げた。
店内の暖かい室温で火照った顔に当る雨粒が気持ち良く感じる。
立ち上がり、パンツの両膝部分をはたいた。

誰かが傘をそっとさしてくれた。
振り向くと、ボブスタイルが似合う素敵な女性がチーフを差し出して
てくれている。

アキラは両手を広げ手を振りそれを制した。
「いいから使つて」

透き通るようなきれいな肌をした彼女の微笑む顔を、今でもはっきり
り覚えている。
あれから何度かあの店に足を運んだが、彼女の姿を見かけることは
なかった。

、97

携帯電話が鳴った。

「アキラ、元気が」

高校生の頃、アルバイトでお世話になった渡瀬 弘人からだ。アキラが33歳になった現在も付き合いが続いている。

今でも何かと気をかけてくれる。

年齢は一回り程も離れているのだが、なんだか兄貴のように感じる存在だ。

美容学校に通っていた頃、初めて髪を切らせてくれたのも渡瀬だった。

ウィッグ以外の髪を切ったのは、この時が初めての経験だ。

もちろん出来上がりはひどい物であったに違いない。

文句も言わず、それどころかずいぶんと喜んでくれたのを覚えている。

もちろんパーマの練習台も渡瀬夫婦が引き受けてくれた。

「今回の物件の解体に手を貸してくれないか」

そのような内容の電話だった。

この時期の臨時収入はとっても助かる。

もちろん断る理由など何も無い。

「明日6:00に会社で」

用件だけ伝え電話は切れた。

現状は噂で聞いているだろうに、余計なことは一切聞かない、その心遣いがアキラはとってもうれしいと感じた。

美容師の仕事を始めてからは、「指の怪我は致命的」。

そう言っただけ最近の仕事の手伝いを頼まれることが少なくなった。少し寂しさを感じる。

時折殆ど遊びのような、ドライブのような、別荘地に住居を構える裕福な顧客の軽い仕事には誘ってくれた。その程度の事で日当をもらえるなんて申し訳ないと感じたこともある。

渡瀬の愛犬、アフガンハウンドも一緒に連れていくこともあった。幌を外したJeepで仕事に行ったこともあった。

Tシャツ、短パン、ビーチサンダルという格好で、殆ど仕事とはいえない仕事も存在した。

通常現場が遠いこともあり、渡瀬との待ち合わせは6：00頃と少々早い。

夜中に出発する事も何度かあった。

前日の夜更かしは本当にキツイ。

アキラは普段から朝食は採らないでいた。

ぎりぎりまで寝ていて、顔を洗いや着替えて出かけるだけだから、支度にそれ程時間はない。

通勤時間も短くスクーターで15分も走れば会社に着く。

晩秋の早朝は気持ちがいい。

鼻を通る空気が少し冷たく感じる。

冬がもうすぐやってくる。

この時期の西の空はまだまだ暗い。

空気が澄んでいて星の輝きがきれいに観える。

日の出が近づくとぐつと気温が下がる。

今日はよい天気には違いない。

会社は大きな国道の立体交差から県道にそれる測道に面している。

倉庫の中から水銀灯の強烈な光が漏れ、

道路の歩道部分を間接照明のようにつつすら照らしている。

組み立て式の物置が、メーカー別、型番別にきれいに並べられている。棚の前をスクーターを引いて、

以前置いていたのと同じ場所に停めた。

半キャップタイプの白いヘルメットを脱ぎ、ミラーにハーネス部分を掛ける。

涙と鼻水が垂れそうになるのを、首に巻いたタオルで拭う。

いつもアキラを見つけると駆け寄ってくるアフガンハウンド、ケリーの姿が見えない。

大きな体と派手な長い毛は嫌でも目につくのだが、外で用でもたしているのだろうか。

駐車場には、プロパンガスのボンベを運んでいるところを見かけることがある、後ろの部分がパワーゲートになっている、それと同様のタイプのトラックが停められている。

あの車で出かけるとするのなら、ドライブのような軽い仕事ではなさそうだ。

かなり重量の重い物がありそうだ。

「遅いぞ」

渡瀬がこちらに向かって歩いてくる。

「まだ5:40ですよ」

アキラは黒いGショックの文字盤を指差した。

「そうか」

一歩下がった辺りをケリーがついてきていた。

黒く長い艶の良い毛を誇らしげに揺らし、なんだか偉そうに胸を張り、ツンと鼻を上向き加減に歩いてくる。

アキラのことは忘れてしまったのか、今日は駆け寄ってこない。

あごの下から腹に掛けての白色の毛が良いアクセントになっている。頭をなでてやると得意そうにスマした顔をする。

いつもと変わらず少々憎たらしい態度だ。

大分歳をとったのか、なんとなくケリーが一回り小さくなったようにも感じた。

ケリーから見た私の格付けは、友達辺りの扱いなのかもしれない。自分と同等程度にしか思っていないのだろう。

散歩をする時はいつもケリーが主導権を握っていた。

「いつてくるよ、ケリー」

現場には1時間半程度で着いた。途中渋滞も無く順調だった。

交通情報で良く名前を耳にする渋滞箇所は、早めの時間に通過した為影響はない。

運転をしても、助手席にいても、停車している時間はなるべく短い方がいい。

車にも、人間の精神的なことに対してもだ。

以前の会社の車ではFENを良く聴いた。

AMラジオのみしかついていなかったからだ。

当時洋楽を聴くにはそれしか方法がなかった。

今はFMが標準でついているためJ-WAVEを流している。

音楽も良い音できこえてくるし、ニュースも天気予報も、交通情報も結構重宝する。

ここ数年で、トラックの乗り心地も格段に向上したし、装備も充実した。

遠出をしても疲労度もかなり違って感じる。

駅前の再開発で、この地区の古い商店街は取り壊されることが決まった。

時間の経過による老朽化の進んだこのビルも、もうじき解体される。耐震やら防災やらの関係で、貴重な建物も町並みも消えていつてしまふ。

周りの建物は既に、その殆どが姿を消していた。

柵の上部からコンクリートを粉砕する粉塵と、業者の名前が入った重機のアーム部分が見え隠れする。

今回の現場、目的のビルには電気がまだきているようだ。

エレベータは1Fに停まったまま、”1”の部分が薄暗い踊り場にほんのり浮かび上がってみえる。

非常口を表すみどり色の誘導灯は右半分が垂れ下がり、コードだけが頼りだと言いたげに、かろうじて落ちないでいる。もちろん明かりは点いていない。

上を示すボタンを押してみた。右にスライドしながら扉が開いていく。

エレベーター内の蛍光灯が通常よりかなり時間をかけ点灯した。中を見回してから、扉が閉まる直前に乗り込む。

この建物が4階建てだということがエレベーター内のボタンの数でわかる。

”4”を押してみた。

頭上の蛍光灯がチカチカと点滅を繰り返す。

密室のこういう照明は、なぜこんなにも気持ちいを不安にするのだろうか。

ダメになる時はスパッと切れる電球の方が潔くて好きだ。乗ってから、無事にトラブルも無く動くのか不安になった。

想像以上の振動を体に伝えエレベーターが上昇を始めた。

日が当たるせいか、1階のような強烈な湿気の匂いは感じない反面埃は目立つ。

誰かが出入りしているであろうことは、床に敷いた絨毯を思わせるようにつもった塵に足跡が残っていることで想像がつく。

左手に上の階に続く階段がみえる。

屋上に行けるのだろうか。

アキラは昇り階段を一段進んだところで足を止めた。

「上にいるのか」

「今降ります」

階段の手すりから身を乗り出し応えた。

「2階にいる、早く降りてこい」

階段の下方から渡瀬の声がした。

生活感の無い建物の中は声を通る。

2階のテナントには美容室が入っていたようだ。

すでに他の場所に移り新店舗で営業しているらしい。

鏡、カット椅子、シャンプーブースにはマジヨリカタイプのシャンプーボールが残されている。

結構古いタイプではある。

消毒室兼材料をスツトックしていたと思われる部屋にはボイラーまで残っていた。

現在の器具に比べ、作りは重厚感を感じるしっかりした物が以前は多かったように思う。

近頃はライトになり軽々しい。

カラーは豊富になり鮮やかにはなったのだが安っぽさは否めない。

ここにある年代の物達は、手入れをし大切に使うと皮や金属の部分に程よい”あじ”がただよい出す。

埃をはたくとまだまだ十分使えそうな、実に感じの良い質感が顔を出す。

「どうだ使えそうか」

「……」

「アキラ、おまえこういう感じ好きだろ、レトロな感じ」

「結構好きですけど」

渡瀬が私を連れてきた理由が理解できた。

「どうするんです、これを撤去するんですか」

「そろそろ必要だろ」

「オレですか？」

「もう美容室行かないといけないんだが」

渡瀬が伸びた髪をかきあげながら鏡越しに私を見た。

「……」

「物件探してるんだろ」

確かに探してはいる、安くて適当な物件を。

「店を出すならこんなところが良い」

実は結構気に入っている所があるにはある。

ただ、敷金等は何とかなくても肝心の器具がそろわなければ話に

ならなかった。

内外装は渡瀬のところの廃材などを使い、なんとか手を入れることができる。

そんな事を漠然とではあるが考えていたことは確かにあった。

「台車もつてこいや」

ここにある物は処分してしまうにはもつたない良いものばかりだ。「いつもありがとうございます」

渡瀬は無言で鏡に向かい、髪を気にしているそぶりをする。

最近ちらほらもみあげや生え際に白い物が目立ち始めた。

目の前の女性事務員は少々ポツチャリした身に、紺色の制服のベストが苦しそうだ。

ボディースーツでしっかり締め付けているのだろう。

体の線が不自然だ。

いつも大金を扱っているのもあるう手には高価そうな指輪が見える。お札を数える指使いは手慣れたものだ。

形式どりの重要事項の説明を受け、サインをした。

以前所有していた自宅を立ち退く際、

「引越し代よ」

そう言つて妹が手渡してくれたものを敷金等とし、契約を済ませた。いつか返さなければと使わずにとつておいたものなのだ。

普段、妹とはあまり会話を交わすことは無くなっていた。

「兄貴のためじゃない、二人の子供のため」

そうとだけ言つて置いていった。

ありがたく使わせてもらう事にした。

子供のいない彼女は、とつても二人を可愛がつてくれていた。今もなにかと心配してくれる。

家や土地、店までも手放す結果となったある契約を思い出すと、実印の扱いに不安を感じてしまう。

また、取り返しのつかないことになるのでは無いか。

特に不動産関係には十分以上の注意が必要だ。注意をしてもし過ぎということは無い。

「人生の大切な勉強だった」
そのように母さんに言われた。

いくら授業料とはいっても、あまりに大き過ぎだった。

今は冷めてしまった出されたお茶を飲み干し、渡された物件のキーを手に不動産屋を出た。

裏の勝手口から入る。

木造、築30年超。

確かに古い。

しかし、使われている木材の質は申し分無い。

一カ所どうも空気の流れが気になる箇所があるのだが原因は解らない。

「好きに使いなさい」

老夫婦の大家さんは言ってくれた。

借り手がいなくなったら取り壊しを考えていたという。

改装等手を加えることについては特に問わないとのことだ。

人生のやり直しをここから始めようと決めた。

Episode 3 墮ちた日(1)

196

雪質は最高だった。

海拔2000mを超えるゲレンデのトップに樹々は見当たらない。そのためスキー場全体が見渡せる。

圧雪されていない手付かずのバーンは途中で転ぶと大変なことになる。

二度と起き上がれないのではないかと思う程に雪が深い。

体が雪に埋まってしまい身動きが大変だ。

寝返りをうつただけでもかなりの体力を消耗する。

アキラ達スノーボーダーは板から足が外れないからまだ良いが、スキーヤーは大変だ。

ブーツから板が外れ深い雪に埋もれてしまうことがある。

雪崩の遭難者を探す時のようにストックで雪を突いている場面を見ることがある。

ああして板を探しているのだと一緒に来たスキーヤーが言っていた。

パウダーは圧雪されたバーンを滑る時とは少々異なる。

後方に体重を掛けフロント部分を浮かせ、後ろ足を中心にボードを左右に振る感じ。

そう波乗りをしている時の感覚に近い。

圧接したバーンでは考えられない事だが、ボード全体を粉のような雪が覆いメーカーの文字がみえなくなる。

大きなターンをしている時などは本当に波に乗っているかのようだ。スノーサーフィンと呼んでいた時代があったと聞いたが、うなずける。

宿に帰り着きニット帽とウェアを脱ぐ。

ゴーグルは二重のレンズにガスが入ったタイプでないとニセコ辺り

では役に立たない。

体の表面は暖かい室内温度ですぐに火照ってはくるが、芯から温めるには風呂が一番だ。

夕食の前に温まっておきたい。

「アキラさん、風呂が先つすよね」

以前同じ店で働いたこともある後輩、神田だ。

茶髪に軽くキレイにウェーブの掛かったロン毛が自慢だ。

大きすぎる声で話す。

実にチャライ。

坊主頭のオレにはあの長さは到底理解できない。

「メチャ雪最高でしたね」

神田はドレッサーの鏡を見ながら髪を整えながら話す。

「ああ」

「アキラさん ニセコにはよく来るんですか」

神田はまるで鏡の中の自分と会話しているようだ。

「3度目かな」

アキラはまだ下着姿のまま外を眺めている。

温かいコーヒーが欲しい。

「今夜部屋に帰らないかもしれませんが」

相変わらず声がでかい。

「礼子か」

神田は去年の4月に新しく入ってきた新人の子を狙っているようだった。

しつかり者の礼子だ、しかも人を見る目はある。

彼には落とせそうにない気がするのだが。

けして、神田は悪い奴ではない。

見た目もそう悪くはない。

ただ黙っていればの話なのだ。

「がんばれよ」

Episode 3 墮ちた日(2)

大浴場の湯船に浸かり、湯煙に曇る大きなガラスにお湯を掛け外を眺めてみる。

スキー場のナイター照明の明かりにほんのり浮かぶ大きな樹の群れに雪が積もっている景色がいい。

外は静かに音も無く大粒の雪が降り続く。

「飯の後女の子達の部屋で飲むですよ、アキラさんも来ますよね」
神田が仁王立ちでうれしそうに言う。

「ああ」

とだけ応え神田から視線を外に移す。

既に曇りを取り戻しているガラスにもう一度湯を掛けた。

神田はまだ誇らしげにそこに立っている。

そんなに自慢できる代物でもないだろうに。

「あの樹達、もう何年ああして寒い日も暑い日もその場から動かず過ごしてきたのだろう」

外の景色を眺めたまま彼に問いてみた。

「さあ」

笑顔で答えが返ってくる。

聞く相手を間違えた。

キタキツネが足跡を残しながら裏山から歩いてくるのがみえた。

一匹のみで歩いている姿を見ると、なんだか悲しげに感じるものだ。

寒さが余計にそう感じさせるのかもしれない。

帰るところはあるのだろうか。

アキラはめずらしく逆上せてしまうかと思う程長く浸かっていた。
こんなにゆっくりお湯の温かさを楽しめるのは、日々そうはない。

脱衣場を出ようと出口に向かった。

知った顔の者達が数名ドレッサーに向かい、ドライヤーを片手に自

慢の髪をブローしている最中だ。

皆、ヘアメイク関係の仕事をしてる連中だ。

しきりに前髪を気にし、何度も鏡に映る自分のスタイスを決め直す者もいる。

もちろん神田の姿もそこにあつた。

「髪、傷めるぞ」

そんな声など届くはずもない。

数台、同時使用しているドライヤーのノイズに消されてしまうのは当然なのだ。

鏡の前はサロンさながらのスタイリング剤が並んでいる。

メーカーもタイプも様々だ。

ボトルの色も鮮やか。

よくもまあ毎日あやつて髪をいじつてて飽きないものだと感じさせられる。

「髪を弄るのは仕事だけで十分だ」

アキラの素直な気持ちだった。

「ホテルも電気代大変だろうな」

アキラはドライヤーの必要が無い自分の短髪な頭をなでながら大浴場を出た。

Episode 3 墮ちた日(3)

貴重品を預けている金庫の中では携帯電話がブルブル振動していた。

電池切れでそれが停止する。

金庫を開け財布と電話を取り出した。

携帯の画面が消えている。

ボタンを押しても反応がない。

充電器を荷物が多いバッグから取り出す必要があるそうだ。

「面倒だな」

水分を欲するほてった体を潤すためのスポーツドリンクを買い、8階までエレベーターで向かう。

廊下に敷かれた質の良いカーペットのおかげか、スリッパで歩く音は吸収され、廊下には殆ど響かない。

814号室のドアの前に立ちカードを差し込む。

小さな電子音の後にロックが解けた。

部屋はエアコンで快適な温度に保たれている。

乾燥がちなのは仕方無いことだった。

お湯のおかげで足先も、指の先もホカホカに温まった。

体温が気持ちのいい温度に戻る。

歳のせいか末端が冷えるとなかなか温まらないのが悩みの種だ。

血行が良くない証拠に、できたらマッサージでも呼びたい位に体も固くなってる。

アキラはツインベッドの窓側を使用する。

先輩の方に選択権があるにきまつているから、神田には了解を得ること無く勝手に使わせてもらう。

当然眺めが良い方を選ぶ。

神田を見ながらベッドにはいるより、

外の景色を見ながら眠りに落ちたほうが目覚めが良さそうだから。

良い夢も見られそうだし。

ナイターの光が照らすゲレンデは美しい。

冷たい感じのする白銀の雪と、

暖かみを感じる肌色を思わせるライトの色が最高な具合で混じり合う。

音も無く降り続く雪と靄と照明と。

ゲレンデに造り出す樹々の陰とが、大きなガラス窓をカンバスに、セピア色の風景画を描き出しているように思える。

実に美しく幻想的な演出だ。

ボードのパークが見えるが、今の時間は誰も使用している者はいない。

ベッドとベッドの間にあるサイドテーブルに付いているコンセントから、

携帯電話の充電器のコードが伸びている。

どうやら神田の物らしかった。

それを借り、携帯の底にあるジャックに繋ぐ。

バッグから取り出す手間が省けたように一瞬思ったのだが、

これを使っていられるのは神田が帰って来るまでの短い間だけであることは想像がつく。

四六時中携帯を弄っている彼の事である、きっとすぐに必要になるのであるから、

やはり後には自分の物を出す必要があいそうだ。

Episode 3 墮ちた日(4)

長押しをして電源をONにする。

「着信アリか」

履歴を見ると同じ番号が繰り返し十数件。

もちろん見覚えはある。

そんなことを思って画面を見てみると急に電話が震え出した。履歴に残っていたものと同じ番号だ。

「はい」

「なにやってるんだ!!」

「ご免、電池切れで」

思わず耳から電話を遠ざけた程、大きな声を出し興奮している。

「スノボだけど、そんなに怒鳴らなくても・・・」

そう言うてはみたものの怒鳴り声が止むことはない。

もう一度遠ざけた電話から「裁判所・・・強制・・・」
などという言葉が聞き取れた。

耳を近づけると、興奮した父さんの声から母さんに変わっていた。

静かに話すその声で、ようやく事が理解ができた。

「アキラ、悠長に北海道なんかで時間つぶしてる猶予はないよ」

母さんの冷静さがかえって事の重大さを感じさせる。

「ああ、明日には帰るから」

今夜は騒ぐ気になど到底なれそうになかった。

逆に騒いで忘れられるものならそうしたい気持ちは山々だ。

「明日はススキノいっちゃんいますよね」

神田が部屋の隅で叫んでいる。

母さんにもその声はしっかりと届いたことだろう。

彼が部屋に戻ってきたことにはまったく気が付かなかった。

もちろん若い彼は何も話してないし、何も知らない。

ノリノリで鏡を覗き込み、相変わらずヘアスタイルを気にしてる。

「ススキノ、ススキノ」

鼻歌混じりに何度も繰り返している。

その熱意を少しでもよい、お客様に注いだらどうなのだろうかと思う。

外は相変わらず雪が降り続けている。

”うとい”というか”関心がない”というか”無知”と言おうか。いずれにしても”知らない”ということは恐ろしいことだ。

特に法律やら裁判というものは無縁だと思っただけ。

もちろんこの日本で日本人として生きているのだから、

法規というものを無視しているつもりは無い。

ただ、裁判所から書類が送られてくることなど、無縁だと思っただけ。

10代の頃、64キロオーバーで交通違反を犯し、

略式裁判で罰金の決定をうけ、行政処分の経験もある。

しかし、事件No.号、

事件に関する裁判所から強制執行。

そのたぐいの書類が送られてくるなどと想像したことは一度も無い。

ある期日をまでに和解、原告からの取り下げが無い限り、

本物件の競売が執行されるとある。

Episode 3 墮ちた日(5)

今のアキラに和解へ応じられるだけの体力はない。蓄えは底をついた。

幼なじみ、同じ釜の飯を食べ合ったくらいに親しく、仲良しだった者による不動産詐欺まがいにあい、

この件に関わった代償として手持ちの財産や自宅を処分したものを負債にあてた。

色々な法律相談にも出かけていった。

「うーん、いくら幼なじみとはいえ白紙に実印、印鑑証明を渡すのはまずいでしょ」

「人生を受け渡すことと等しい」

単なる世間知らずだと人はいう。

どの弁護士も同じ答えを繰り返した。

「彼の事業が拡大でき、共に大きくなれたらいいな」

ただその思いだけで、何の疑いも抱かずに言うがままだった。

たしかにうますぎる話ではあったのかもしれない。

冷静に考えると、解る話なのかもしれない。

調子のよすぎる事だったのかもしれない。

それが原因で、妻は二人の子供を連れてアキラのもとを去っていった。

それだけでは不十分だともいうのだろうか。

生活基盤でもある美容室までもが今取り上げられようとしている。何かの報いなのか、それとも何か罰を受けなければいけないような事を前世にでもしてきたともいうのか。

人は乗り越えられる壁しか与えられないという。

その壁を乗り越えたとしたならば、いったい何がそこにあるというのか。

「穴の毛まで抜く」というが、まさに本当だ。

稼ぎを生む場所をなくし、どう負債を返済していけと
いうのか。明日からどうやって生きていけと
いうのか。他人様は容赦しないのか。

働く事で色々な事を思い出さ
ないでいられた。疲労で考える暇
がなかったと言った方が正解か
もしれなかった。自宅を手放した
時に言われた言葉。

「騙す方より、騙される方でよ
かった」
そんな母さんの言葉に励まされ
てはきたものの、ここまで失うと
ダメージはそうとうだ。

今回だけはさすがの母も言葉が
出ないでいる。
状況が把握できていないのは両
親だけではなく、アキラも同様、
これからどのようにしていけば良
いのか、正直何も頭が働かない。

起こってしまったことを嘆いても
何の解決にもならない。
生きていく術を考え、行動するこ
とこそが大事。
そう自分に言い聞かせてやって
きた。
ここまでくると、さすがに何も
かも投げ出してしまいたい気分
になる。

もう気力も使い果たした。

「ちょっと出てくる」
車のキー持って実家を出た。

「変なこと考えるんじゃないよ」
母さんのそんな言葉がきこえたよ
うな気がした。

Episode 3 墮ちた日(6)

こんな時は、頭をからっぽにしてドライブするのがいい。
GMCのカーゴヴァンでAC/DCを聴きながら何も考えずにただ走った。

スピードを控えめにただダラダラと走らせた。
この手の車を走らせるのには信号がなるべく少ない方がいい。

こんな気分冴えない時になんとなく行きたくなる場所がある。
今では湖の底に沈んでしまった小さな村がある。

その村の様子を写真で展示している記念館があるところ。
そこへ自然と車が向いてしまう。

リズムカルに大きなRを描くカーブの連続が心地いい。
トンネル内に響く排気音もいい感じだ。

その先にある人造湖を見下ろすことの出来る駐車場に車を停める。
考え事をするのには最高に良い場所だ。

人の目を気にしないで声を出して泣くこともできる。
しかし、今はもう疲れ果てて涙も出ない。

こここのところ悔し涙を流し過ぎ、いつしか泣けなくなってしまったのかも。

街の明かりが届かないこの場所は、
冬の澄んだ夜空に無数の星を見ることが出来る。

月の出ていない夜の眺めは最高だ。
嫌な雑音も聞こえてこない。

母が言った変なこと？それはどんな事なのか考えてみようとした。
そんなことを考える気力も無いから答えも出ない。

「失う物は何も無いのだから」
さて、これからどう生きていこうか？

結局なす術もなく、店を手放す日がやってきた。

何も無い店内の壁のクロスに残る日焼けの跡だけが、営業していたであろう証拠を辛うじて残している。

この場所は少し前まで人々の体温で熱を帯びていたのに、今は何も感じとれない。

アキラの気持ちと同様に空っぽになってしまった。

震えだすことを止められなかった肩にそっと手が触れた。

今までの我慢が無駄だったと思えたのか、枯れたはずの涙がなぜだかこれ落ちてきた。

もう泣けないと思っていたのに止まらない。

「帰ってきなさい」

母さんの声と暖かい手の温もりだけが、

この冷えきった部屋にぼつりと立つアキラが座り込まないでいられる、

唯一の支えだったのかもしれない。

今はもう皺だらけになってしまった、小さなその手が。

「さあ、そろそろ帰りましょう」

どれくらいの間が経ったのだろうか、その声で我に戻る。

「そうだね」

帰り際、ポストから最後の郵便物を取りだした。

その中の一通に見慣れた字で宛名が書いてある封書があった。

妻に送っておいた離婚届が返信されてきたものだ。

そこにはサインと捺印がしてあった。

Episode 4 再会(1)

98

毎年春と秋、幕張メッセで美容関係の展示会、ビューティーショウが行われる。

美容関係者らが扱う商材から、薬液、器具、機材等。新製品とメーカーやディーラーがメインとする商品の見本市だ。

以前取引していたディーラーが今年も出店している。

当時付き合いのあった営業マンに招待状を送ってもらった。それをパスと交換すると無料の入場が可能となる。

数年経過すると、新たに出店するメーカーや出店を見送るメーカー、
会社自体が消滅してしまうところさえある。

ブランド名は同じであっても、親会社が変わりコンセプトの違いから、

製品の質が変わったりすることもある。

リニューアルしたり新たなラインが追加されたり、廃盤になってしまふ物があったり。

素晴らしかった製品、使い勝手の良かった物、

売れ筋だった商材が手に入らなくなったりもする。

買収したのは良いが、顔ともいえる商材を廃盤にしてしまったため
売上げが落ち込み、

部署自体が会社の重荷となりなくなってしまふ部門もある。

メーカーというところのリサーチとは、本当に機能しているのかと
疑問に思うことも少なくない。

その辺りの事情を把握する意味もあり、このショーは重要で欠かせない。

場内の特別に仕切られているイベントブースでは、

講師の先生やメーカーのインストラクターによるデモやセミナーが行われる。

特に人気のある先生のデモや、話題のセミナー等は予約が必要な場合がある。

有料の時さえあつたりもする。

受講料は決して安くは無い。

ためになる講義ばかりなら良いのだが、ハズすことももちろんある。そんな時は最悪だ！

漫才や寄席と勘違いしているのか、冗談ばかりをならべ笑いをとる事を目的としている講師もいる。

転職を勧めた方が良いのかもしれない。

カラー材とそのテク、特にホイルワークには興味がある。

システインのコールド液や、化粧品登録のカーリンググローションにも関心がある。

事前、事後の処理剤も使い易い物を探したい。

シャンプーやコンディショナー、スタイリング剤もチェックが必要だ。

ダメージヘア対策にトリートメントも同様だ。

少々ブランクがあるので、どの講義もデモも欠かさず受けようとは考えている。

スケジュールもしっかりチェックした。

忙しい一日になりそうだ。

Episode 4 再会(2)

国道16号新保土ヶ谷ICを過ぎ、狩り場から首都高速神奈川3号線を走りベイブリッジを経由する。

両脇の横浜港の景色を観ながら走る気分は最高だ。

昼の景色もいいが夜はもつといい。

電灯が発する柔らかなオレンジ色の光に港全体がてらされる。

昼間感じる埋め立て地特有の角のある地形が、

光の演出で曲線的に優しく見えてくるから不思議だ。

路面はスムーズだった。

片側3車線、広くてコーナーが少ないここは、アクセルのON・OFFを殆ど必要としない。

真つすぐな道を走ることが得意なアメ車には快適なコースだ。

その気分を台無しにする箇所がある。

多摩川トンネルを出てすぐのところ。

羽田空港のジェット旅客機が前方の頭上をゆっくりと高速道路の上を横切る姿に気を取られていたりすると、

突然悲劇が訪れる。

まだ多くの年数が経過した訳でもないのに、ひどく路面状態が悪い箇所を通過することとなる。

轍が深いうえにかなりウネリがある。

とってもバンピーだ。

車高の低い車にはかなり危険な箇所である。

ストロークの少ないサスペンションの場合フルバンプする。

せっかくのリズミカルな心地良さを妨げられるのだ。

湾岸線東行きは順調だ。

東京港トンネル手前の大井料金所は少々混雑するが、平日のこの時間にしては交通量が少なめだ。

ほんの数分間だけ我慢すればよい。

料金を支払う列に、左方向から一般道357号が合流する。双方の車が交差するために渋滞が起こると思われる。

船橋には日本が世界に誇る変わった技術の結晶、室内スキー場S A W Sが見えてくる。

”湾岸スキーヤー”現る。

なんて訳の分からないキャッチコピーだったように記憶している。都会になぜスキー場？

スキーは自然が相手だからこそ素晴らしいのに。実にバブリーな遺産である。

幕張の街の変化の度合いは凄まじい。

以前はなかった大きな建物が建ち並び、街の姿を全く違った風景に変えてしまった。

道に迷ってしまいそうだ。

海に向かう直線道路の両脇に大きく育ったフェニックスが植えられ、そこだけ異国の情緒を感じながらの走行が可能だ。

東京湾、ウォーターフロントの開発はとても興味深い。

かつて京浜工業地帯と呼ばれ、大気汚染で喘息患者が多発した。

小学生の頃、都会から離れていたアキラの学校に、体に良いからと言って転校生がやってきたことも多かった。

この場所でもこんなにも綺麗な青空を観ること出来るとなど、当時誰が予想したことだろう。

Episode 4 再会(3)

幕張にはちよつとした思い入れがある。

美容室のお客様で生命保険会社に勤務している方がいた。

ヤクルトスワローズのファンだったアキラは、

保険会社が所有する神宮球場のボックスシートのチケットをよくいただいた。

「ロツテは嫌い？」とある時間かれたことがある。

「なぜです？小坂なんか好きですけど」

小柄だけど守備が巧く、バッティングもそこそこ。

足の速い小坂選手は結構興味深く、気になる選手の一人だった。

「子供連れて行くならマリンスタジアムがお薦めだよ」

「マリンスタジアムか、行ったこと無いな」

「車はスタジアムの駐車場に止められるし、何しろ内野席には観客が少ない」

もちろん外野席の観客もけして多くはない。

ファールボールを走って取りにいける程ガラガラらしい。

拾ったボールはいただける。

「子供喜ぶよ」

息子の禅はサッカーのクラブチームに入っていたが、野球も好きだった。

アキラと禅はメジャーの中継を一緒によく見ていた。

禅は、ヤンキースのデレク・ジーターのファンだった。

アキラはバーニー・ウィリアムズが好きだ。

然が小学校に入る前、店が暇の時は前の道路でキャッチボールをよくやった。

「思い切り打ちたい」

そう言う息子を連れて、営業時間だというのに近くの河原にあるグラウンドに出かけていった。

自転車のカゴにグラブとバット、ボールを入れ、後ろに彼を乗せてトスバッティングを始めるがすぐに迎えが来た。

「お客さんだよ」

母さんが土手から叫んでいる。

「やばい」

自転車を飛ばして店まで帰った。

禅は後ろでケタケタ声を出して笑い、立ち漕ぎをするアキラの尻を叩いた。

「やばい、やばい」

「もつとはやく、はやく」

その感触が尻の片隅にかすかに残っている。

「火曜日のチケットなら、メチャメチャ抑え易いよ」

その時から、我が家はマリーンズファンになった。

対オリックス戦は特にお気に入りの対戦カードだった。

イチローのレーザービームもこの目でしっかり観た。

娘はというと、スタンドで弁当を食べることが何よりの楽しみだ。

アキラと禅とがキャッチボールをする日はもう来ないのだろうか。

未練たらしく今も二つのグラブは大切にとってある。

ボールはというと引っ越しの時にどこかへ無くしてしまったようだ。

Episode 4 再会(4)

幕張メッセの入り口では美しいコンパニオンが出迎えてくれた。奇麗だし、スタイルも抜群なのだが、

171cmの自分より背が高いところがアキラには気に入らない。

その彼女から渡されたアンケート用紙に記入をし、

出来上がって間もない名刺に招待状を添えて受付を済ませます。

同時に渡されたサロンクラブと書いてあるパスケースに名刺を入れ首から下げる。

これで今日の出入りは自由だ。

天井が異常に高い会場に入る。

コンパニオンがサプリメントの試供品を配っているのが多く目につく。

最近、日本人にも不足がちな栄養素をサプリメントで摂取しようとする習慣が一般的になってきているようだ。

それにしても笑顔の大安売りって感じがする。

お断りするのは面倒なのと、さほど断る理由もないのでいただいております。

お目当てのブースは招待状と同封され送られて来た会場案内図で既にチェック済みだ。

場内を歩いていると、時として目のやり場に困ることがある。

ソーシンの器具をメインとするある業者のブースでは、

スタイルの良いお姉様が形の良いお胸を露出し、

ベッドに寝ていたりする。

あまり過剰に意識するのも変だし、

かといってジックリ見入るのもまた変だ。

この様な場面に遭遇するとどう振る舞うか戸惑う。

余計な心配ではあるのだが、あのようなお仕事をされている方のギヤランティはイカ程なのだろうか。

実際にあの機械にお世話になる女性達は、あんなにナイスなバデ
イの持ち主は少ないと思われるの。

そんなしょうも無いことを考えて気を去らしたりしながらその場を
やり過ごす。

これまた余計な労力である。

色々なところに配慮をしたり、気を使ったりしながら会場の案内図
を見て歩く。

少し派手目なメイクをしている女性から、

肩から掛けられるタイプの大きなペーパーバッグを差し出された。

彼女は香水の匂いがキツ過ぎて品がない。

中にはもちろん御社のカタログが入っている。

すでに多くのサンプル、カタログをいただいていたので、

片手には余る量になるうとしていた。

重量も結構ある。

このタイミングはありがたい。

帰ってから必要な物と、そうでない物とを仕分けをする。

この作業も実は結構楽しかったりもする。

もちろん大量のゴミを発生させる可能性は十分にあるのだが。

Episode 4 再会(5)

腕をつかんで呼び止められた。

「ちよつと協力して」

ずいぶん積極的なコンパニオンがいるな。

そう思いながら振り向いた。

全身が凍り付いて身動きができない。

アキラはどのように反応したら良いのか判断できていない。

”夢をつかめる” 怪しいセミナー会場で会ったときと変わりのない笑顔がそこにあつたのだから。

あの時の可愛らしいボブスタイルではなかったが、髪が少し伸びて後ろで一つに結んでいる。

それもまた違った雰囲気で素敵だった。

「やっぱり、あの時に人だ」

彼女は両手でアキラの腕をつかんでそう言った。

アキラは眉間に皺をよせ強ばった顔で彼女を見た。

そこを動けない、言葉も出ない。

彼女の首から下がっている名刺に井上 優子と書いてある。

「そんなに怖い顔しないで、私のこと覚えてませんか」

優子から笑顔が消えた。

もちろん覚えている。忘れられるはずが無い。

というより正直優子の事をよく思い出す。

「あのーハンカチ今日は持ってないですけど」

アキラはその程度のことを言うだけが精一杯だった。

この歳になってもまだ気の利いた言葉を満足に言えない自分が何とも情けない。

「毛が欲しいんですけど」

「はっ？」

訳の分からないことという優子に腕をつかまれ、されるがまま着いて

いく。

「座ってください」

優子は椅子を指差した。

目の前にはレーザー脱毛器が置かれている。

「上着脱いで」

肩にかけていた大きめのペーパーバッグを床におろし、

オリーブ色のRRLのワークジャケットを脱ぐ。

優子が後ろにまわり手を貸してくれた。

彼女に服を脱がされているような良からぬ妄想をし変な気分になる。けして不快だという意味ではなく、むしろうれしい勘違いなのである。

高揚して血圧、心拍数が急激に昇る。

それに伴い顔が変に火照り出す。

勝手な妄想が優子に悟られそうで恥ずかしい。

上着を脱がされただけで飛躍し過ぎる思いに、自分の浅はかさを情けなく感じた。

なにをそんなに舞い上がっているのか不思議に思う。

グレーのヘンリーネックシャツの七分袖から出ている腕を、

このブースを担当する、うすいピンクがかった白衣を身に着けたインストラクターの方に差し出す。

脱毛のレーザーを照射するためのハンドピースをアキラの腕に当てた。

Episode 4 再会(6)

都合が良いことにアキラの腕には少々毛が生えている。

「レーザー光線は黒色の物に反応します 当社の器具は認可を受けた物ですので安全です」

優しい声で説明をする彼女の、程よく盛り上がる胸の少し上に武田と掘られたネームプレートが付けてある。

「痛くないですか？」

アキラは当たり前過ぎることを質問した。

「少しチクツとするだけですよ」

武田インスタクターは笑顔で答えを返した。

「剃ってからでなくて大丈夫ですか？」

優子が不安そうな顔で武田に尋ねた。

「全然大丈夫です、この程度なら問題ありません」

白衣の天使はためらいもせず即答した。

笑顔を絶やさずニッコリと。

二人の女性のナスがままに従っている。

もちろん嫌な感じは全くしてない。

「うーん、今日は来て正解」

心の中でそうつぶやいた。

今は意味も無く頬んでいる。

ニヤケていると言った方が正しいのかもしれない。

武田は各部の名称、簡単な使用方法を一通り説明し終わる。

「では3ショットいきますねー」

甘い声で白衣の天使が囁く。

武田はイエローに着色をしたゴーグルを着ける。

その瞬間なんとなくゴーグル内側の目つきが少しだけ変わったように感じた。

「目を閉じてください」

メインのスイッチオンにし照射した。

「イタツ！」

光った瞬間痛みが走る。

アキラは黙って我慢した。

うん、あと2発。

「イタツ！！」

マジ痛い。

2人の女性の前だ、格好付けて声に出せないでいる。

よせばいいのに相当強がっている。

「大丈夫？」

優子が顔を覗き込んできた。

きれいな顔がすぐ目の前にある。

とにかく近い。

あと1発の辛抱だ。

今では白衣の天使が悪魔に変わった気がした。

容赦なしで3発目を照射する。

「イタツ！！！！」

ついに声が出た。

少々Mツ気があるのだとアキラ自身感じてはいたのだが、さすがに

限界だった。

精神的苦痛ならよし、しかし身体的苦痛にはどうやら向いてないよ

うだ。

”レーザーは黒い物に反応する”ということは先程説明があった。

通常レーザーを脱毛に使用する際、

まずは剃毛を行い皮膚の表面に露出している部分を極力少なくしな

ければならない。

あくまでも毛根部分に反応させることが目的で、

伸びている部分が皮膚に密着していると、その部分に反応してしま

い、

接している皮膚の部分は、

生えている毛の流れに沿って火傷と同等の結果となる。

Episode 4 再会(7)

患部がミミズ腫れのような状態に赤く腫れ上がってくる。
10cm四方に妙な模様の焼き印が押された感じだ。

二人の女性は顔を見合わせた。

慌てている二人を見ているのはいい気がしない。

このような事故現場を多くの人に見せるのは、彼女達にとってはイ
メージダウンにつながる。

席を立ち、とにかくここから去ることを考えた。

ハンガーに掛けてあった上着をとり、

ペーパーバッグを肩に掛けブースを逃げるようにあとにする。

「待って！」

後方から声がした。

振り返る気持ちにはなれない。

優子が私の腕をとり引き止めた。

彼女に触れることが出来るなんて今日まで想像すらしていなかった。

しかもこれで2度めだ。

優子は腕をつかんだまま、アキラを導くように歩き出した。

ブルーノートというエステティックサロン向けディーラーのブー

ス前で足を止めた。

「待ってて」

何やら女性の営業と話をしている。

アキラはその間も彼女を目で追っていた。

ミミズ腫れの赤い部分に水が溜まってきている。

ヒリヒリと痛さも増してきた。

「来て」

優子は腕をつかむとブルーノートのブースの中へ連れて行く。

彼女はこんなふうにごんな男の腕でもつかむのだろうか？

そんなことを考えてしまうほど動揺してしまう。

これで3回目。

こんなことで一喜一憂できる自分がいたなんて、改めて少しビックリした。

また、椅子に座るよう促され素直に従った。

優子は跪きジェル状のものをスパチュラを使って容器から掬い取り、火傷部分にのせる。

患部のヒンヤリ感が心地よい。

それとは対象に、アキラの左手の甲を握る優子の右手はとても温かだ。

左利きの彼女は、人差し指と中指で患部にジェルを優しく塗っている。

「痛い？」下から見上げる表情がたまらなくいい。

その声はいつまでも聞いていたくなるような、優しい響きを持っている。

ゆっくり包み込むようにジェルが浸透するよう掌を密着させてくる。

ヒンヤリしていた患部がすぐに温度を取り戻し、

優子の掌の温度に近づいていく。

アキラは目を閉じ、感覚を彼女の手が触れている部分に集中させ、それを楽しんだ。

もう痛みなんかどうでも良かった。

時間が止まり、この瞬間が永遠に続く事を願わずにはいられない。目的の一つだったセミナー開始時間はとうに過ぎていた。

築30年以上だと言うこの物件、古さは当然感じる。

だが質の良い木材を使用している事は、木の香りでわかる。造りもしっかりしていた。

ドアや引き戸の立て付けの良さからそれらが伝わってくる。

狂いが少なく、動きは今でも完璧と言っている。

腕のいい職人が手がけたものかもしれない。

無垢のフローリング材に無数に着く傷と、黒く光る艶のある色が時間の経過を感じさせる。

そういう部分が残っていることがアキラはうれしかった。

駅から少し距離はあるのだが、自然が程よく残っていて良い環境だ。

けして大きな通りではないが、一応路面店でもある。

店のすぐ脇を遊歩道があり、その横を小さな水路も流れてる。

ここは、駅と奥にある大きな分譲地を結ぶ通り道になっているようだ。

犬の散歩をする人や、ジョギングする人もよく見かける。

店舗として使う部分が9坪、ここには渡瀬と現場から引き上げてきた、

美容室で使う年代物の器具達が運び込まれたままになっていた。

上を見上げると屋根裏部分の太い梁がむき出しになっている。

そこがまたたまらない雰囲気醸し出していた。

「必要なら天井貼るよ」

大家さんは言ってくれたのだが、このまま現状のまま手を加えないようお願いした。

もちろん側面の板の壁にもクロスを貼らないで、そなままの状態を

残しておいてもらった。

それにトイレと風呂、小さなキッチンが備え付けてある。

キッチンは暇をみてタイルを貼ったり、ガスコンロを変えたり、少し手を入れたいと考えている。

料理の出来ないアキラではあったが、外食中心の食生活を改めたいと感じ、

少しずつではあるが自炊に挑戦してみたい気持ちは少なからず持っていた。

もう一つ、1、5坪程の部屋がある。ここを自分の部屋として使うつもりだ。

渡瀬の現場から撤去してきたボイラーは電力を利用するタイプの物で、深夜電力も使用可能ということだ。

これは使えそうだ。

そのボイラー設置場所の件で、渡瀬が来てくれる事になっている。

外に出ると造園屋の同級生宮里が、頼んでおいたコンニファーを3本と、

「開店祝いだ」

と樽へ植えた寄せ植えを持ってやってきていた。

「おい、ちよつと見てくれないか」

宮里が裏で何かを叫んでいる。

「鉄板がある」

何を言ってるのか解らない。

「鉄板？」

アキラにはバーベキューの時に使用する鉄板くらいしか思い浮かばなかった。

Episode 5 地下室(2)

「うちの畑にあったオリーブを植えようと思って穴を掘ってみたんだ」

スコップを地面に刺しながら宮里が繰り返す。

「鉄板が敷いてある」

意味の分からない事を繰り返す。

「何力所か掘ってみたけど、どこを掘ってもあたるんだ」

再びスコップを別の場所で地面に刺してみる。

確かに金属同士があたる鈍い音がする。

「どうした？」

若い職人を2人連れて渡瀬が顔を出した。

「樹を植えようと穴を掘ったら、30cm程で何かに当たるんです。それがどうやら金属のようだと言里はいう。

何力所か掘ってみたのだが、どこも同じ深さのところで金属音がする。

「大家さんに聞いた方がいいな」

すぐに大家へ電話をいれてみた。

10分程経つただろうか、軽トラに乗った大家がやってきた。

荷台には鍬とスコップが載っている。

畑仕事にでも出ていたらしかつた。

「すみませんお呼びして」

穴を掘っていた時の事を宮里が説明する。

「不動産屋の勧めで駐車ができるようにしたんだ」

大家は鍬で土を掘り返しながら話しを続ける。

「先代まで鍛冶屋をやっていて、横を流れている用水路から水を引き込んで使っていたんだ」

今では遊歩道が出来キレイに整備されてる。

「水を使うため、下に掘り込んで作業場を造ったってわけだ」

現在は平屋にしか見えない。

「地下に何かあるってことですか？」

大家はうなずいた。

「下の部分は使えるんですか？」

アキラはなんだか急にワクワクしてきた。

「半年前まではそのまま使えない事もなかったが、今はどうだろう」
帽子を脱ぎ、鍔の部分で頭を掻きながら、大家は続けた。

「外階段と建物の中からは、ら旋階段で降りられるようになっていたよ」

外階段があるだろうと思われ部分と、つづいて一階の建物の方を大家は指差した。

「大家さん下を使ってもいいですか？」

使えたらとうれしいと希望を込めて言ってみた。

「かまわんよ、あんたが出て行く時はここを取り壊すつもりだ、好きに使いなさい」

「助かります」

「お前も本当に好きだな」

渡瀬が苦笑いしながら、ぽつりと言つ。

「敷いてある鉄板は、息子の建設会社が道路工事で使う物らしい、あとで取りにこさせるよ、

上の土だけはどかしておいてくれ」

そう言い残し帰っていった。

小型のダンプに載っていたコンボイを降ろし、

渡瀬と一緒に来たうちの一人の若い兄ちゃんが器用に土をすき取っていく。

Episode 5 地下室(3)

「良い土だ、オレもらつていってもいいか」

植木屋の同級生宮里が、寄せ植えに使う分の土を残し、自分の社名の入ったユニツクの荷台に土を積むよう、コンボアのオペをしているお兄ちゃんに伝えた。

ちよつと普通車一台分より一回り程大きめの鉄板が二枚敷かれているのがみえた。

鉄板の撤去が済まないとボイラーの位置や配線等、設備の段取りが出来ない。

渡瀬には後日出直してもらおう事となった。

「何度もすみません、渡瀬さん」

渡瀬はこちらを振り向かず、右手を高く上げ左右に振る仕草をして帰っていった。

その日のうちに大家の息子が鉄の厚い板を撤去に来てくれた。

「親父に言つたんだ、余計な事するなって、このままでも借りる変わった奴が必ずいるからそのままにしておけてな」

大家の息子が大きな重機のオペに指示を出しながら言う。

「すみません、変わり者で」

「あつ、余計な事言つたかな、わるい、わるい」

真っ黒に日焼けした顔をしわくちやにして大声で笑った。

アキラも声を出して笑った。

「地下を見るのは明日にしとけよ」

帽子を脱ぎ、鏝の部分で頭をかいている。

大家と同じ行動をする息子の姿を見て何となくホツとした。息子さんも人が良さそうだ。

アキラはそう感じた。

「明るい時に見ないとダメだぞ、怪我されても困るからな」
すでに西の山に太陽が沈みかけていた。

「治療費は自分持ちだぞ」
また大声で笑った。

地下が見たくてウズウズする。

色々空想、妄想すると興奮して眠れない。

もちろん良い意味でのたかぶりだった。

ベッドに入ってもあれこれ考えた。

夢だか現実だかわからなくなった頃なんとか眠りについた。

このような時は決まって早い時間に目が覚める。

目覚ましなんか当然必要ない。

コーヒーマーカーのペーパーフィルターに南蛮屋のコロンビア豆を少なめに入れる。

一日に何倍も飲んでしまうので、自分用は薄めがいい。

砂糖、ミルクは不要だ。

コーヒーをおとしている間に着替えを済ませてしまう。

大きめのマグカップにコーヒーを入れ、

それをもって遊歩道に面している裏口から表にでる。

地下の部分は遊歩道から当然見下ろす感じになる。

そこから耐火煉瓦を敷き詰めた階段を降りてみる。

深さは4 m程だろうか。

7坪程の踊り場の足下から壁一面に、

そして地下の室内までもが耐火煉瓦が張られている。

大家聞いた、上へつながらるら旋階段も、錆は出ているもの問題なく使えそうだ。

以前から感じていた気になる空気の流れはこの地下からくるものだった。

Episode 5 地下室(4)

耐火煉瓦の汚れ具合も、ら旋階段の塗装のはがれ具合もいい。階段のレトロな感じを与えるグレーの色もいい。

どれもこれもが、当時のしつかりした造り込みを伝えるものだ。

こだわりの思い入れを込め、造られた物の存在はいつになっても色あせない。

そんな事を教えてくれているようだ。

踊り場中央部分にそそり立つ3本の鋳物の柱の先端が緩やかにRを描き、

シンプルにデザインされた照明が付く。

灯れば地下のエントランスを照らし、きつといい雰囲気を出すに違いない。

配線とソケットを新しい物に変えれば使えるかもしれない。

照明の下には大きめのガーデンパラスと、

それに合うテーブルと椅子も必要だ。

あれこれ考えると本当に楽しい。

ただこの気持ち分かち合う者が居ないというのはやはり残念だが。看板のイメージも湧いてくる。

あまり大きい物はいらぬ、錆の浮いた鉄板にステンシルをするだけが良い。

頭の中でどんどんイメージが膨らんでくる。

大きめの素焼きの鉢にコニファーを植えよう。

そこからアイビーが垂れていたらかわいいかな。

地下の作業場だった室内には古い美容器具がよく似合う。

目を閉じ耳を澄ますと、父さんから高校入学祝いにもらった、

当時の古いオーディオから店内に音楽が流れた。

実家の物置にしまいつぱなしの大きなスピーカーも持ってこよう。

ここの造りなら少々大きな音量でも、近所に迷惑はかかりそうにな

い。

ソウルミュージックなんかが最高だ。

もちろんお客さんがいる時には、大きな音を出す訳にはいかないが、壁には古い町並みを描いた絵があったらいいな。

モノクロの写真なんかもいいだろう。

店内の照明器具も想像がつく。

天井が高いからシーリングファンがいるな。

福生の基地にあって、アンティークの軍の払い下げ家具を見つけにくいところ。

周辺のリサイクル屋を回って探し物をするのも楽しそうだ。

壊してしまうなんてもつたない。

この地下の作業場だった室内を店として使わないなんてもつたない。

Episode 6 指の感触(1)

98

アキラが最近定期的に通っているところがある。それも熱心にだ。

処理が面倒なので、普段は生やしている無精髭をキレイに剃り。鼻毛のチエックも怠り無く、脂取り紙をしつかり持参をして。日頃車で移動する事が多いため、電車には乗り馴れていない。

学生時代も自転車を通える距離の公立高校を選んだ。交通費もかからず、親孝行の息子だったはずである。

そんなアキラが、満員電車で揺られ出かけていく。

異常な混雑の車中で小さく折りたたみ、器用に新聞を読むサラリーマンと思しき方に感心し、MDプレイヤーのイヤホンから漏れてくる不快な高域のノイズに苛立を覚え、

時には若いお姉ちゃんのシャンプーの香りにイケナイ妄想をしたりして。

痴漢と間違われないう手の位置に注意ながら、そんな時間を車内の中刷り広告を見ながらやり過ごす。人の流れを乱す事が無いよう歩く事も覚えた。

新宿駅西口の改札から出て都庁方向へ歩いて向かう。

人の多さに圧倒されながら通勤気分を味わっている。

スターバックスで時間をつぶす事も覚えた。

マイボトルを買うべきかどうかを行くたびに迷うのだが、結果未だに未購入である。

マグでもらう方が美味しいのかもしれないと思ってしまっただった。雑誌ではなく、小説を読むようにもなった。

そんな休日の過ごし方をし、生活が少しずつ変わるつつあることを

感じ始めている。

ビューティーショーでの一件で井上 優子と名刺交換をした。

「傷の事で何かあったら連絡して」

彼女の名刺を大事にとつてある。

火傷の事だが、特に何も問題は無かった。

かさぶたが残っているものの、跡が残る事も無く、

今では注意して見なければ気にならない程度にキレイに治ってきている。

彼女と連絡をとつてみたいと思うのだが、理由をあれこれ探してはみたものの何も浮かばない。

どんな理由でもいい、声が聞きたかった。

それを素直に言ってみようとも考えた。

しかし、アキラの事を何とも思っていないであろう彼女に、

「声が聞きたい」

などという突然の電話は迷惑であり、もしかすると不快に感ずる事さえ考えられる。

そんな時にタイミングよくメイクについて、常連のお客様から質問された事があった。

その件は電話する口実としてとっても都合が良かった。

そう思って、何度も携帯を手にした。

Episode 6 指の感触(2)

初めての電話は、異常なほど緊張する。

ずいぶん前から連絡を取りたいとは思っていたのだが。

携帯の電話帳には当然だがメモリーがされている。

過去に何度か発信を試みた事もあった。

もちろん呼び出し音が聞こえる前に電話をきってしまった。

つながりはしないが、リダイヤルの履歴にも彼女の番号がしっかりと残されている。

覚悟を決め通話ボタンを押した。

番号が点滅し終わると発信音が聞こえ出す。

耳に当てた電話を伝って、心拍数が高まる自身の鼓動が聞こえてくる。

何回コール音がしたかは覚えていない。

結局優子につながる事なく電話を切った。

冷静になった今、電話をした事を後悔した。

「オレに何の用もないはず……」

もう電話をするのは止めよう。

優子の「電話して！」は社交辞令であったことを悟った。

もっと早くに気が付くべきだった。

最終のお客様の会計が終わった。

「ありがとうございます、またお越し下さい」

頭を下げお客様を送り出す。

耐火煉瓦を敷き詰めた階段を昇り終えるのを見届け、

エントランスの大きなガーデンパソルをたたみ店内に入る。

J・WAVEナビゲーターの音が、古いDIATONEの大きなス

ピーカーから店内に響いている。

コーヒーマーカーに残ったものをマグに注ぎ、後片付けを始める前

に少し腰を下ろした。
携帯に着信があり、マナーモードになっているため激しく電話が振動する。

マグから少し冷めてしまっているコーヒーをひと口飲んでから、電話を手を取った。

「はい」

「ごめんね、セミナー中だったから出られなくて」
優子の声が聞こえてくる。

鼓動が電話の音声を通じ、彼女に伝わってしまったかわないかと心配になる程高鳴った。

今一番聞きたいと思っていた声。

もう何日、そう思って過ごしただろうか。

「忙しい時に電話なんかして、かえって申し訳なかった」

「仕事中だという事を考えずに電話してしまった自分はどうかしていた。」

出られなくて当然なのに。

「気にしないで、出られない時は出ないし」

なのに今のアキラは当然のことさえ当然に思えない。

優子の事に対してはそんな状態だった。

頭を冷やさなければ。

Episode 6 指の感触(3)

「あ、腕の具合はどう?」

「たいしたことないよ、もうかさぶたになってるし」
殆ど治っているといいつついい、少し残念には思っけれど。

この腕の傷が消えてしまったら、優子との関係も消えてなくなりそうだ。

終わりを告げる印のような、そんな気がした。

「よかった、心配だったんだ」

嘘でもその言葉はうれしかった。

優子の気持ちの中のほんの一部であってもアキラの記憶が残っていた事が。

「なにか用があつた?」

お客様に聞かれたファンデーションのこと、基礎化粧品のこと、アキラは思い出したようにあれこれと聞いてみた。

少しでも永く声を聞いていたくて。

少しでも永くつながっていたくて。

丁寧に、そして詳しく説明してくれている彼女には失礼だが。

質問に対する答えなどどうでもよく思えた。

ただ優子の事を身近に感じていたくて。

「参考になつたかな」

「あつ、うん とつても・・・」

J・WAVEのナビゲーターが9:00PMを告げた。

既に1時間は話をしている事に気が付く。

「あつ、ごめんこんなに長電話させちゃって、また電話してもいいかな?」

化粧品の事でと、あわてて付け加えた。

「いいよ、いつでも電話して」

とつてもうれしい一言だった。

アキラはその言葉を素直に受け取った。

携帯電話が存在する事に感謝した。

その後何度か化粧品を理由に電話をした。

「携帯代大変じゃない？」

「楽ではないかな」

今の経済状態ではかなりの負担ではある。

「わざわざ化粧品の理由をつくって電話してこなくていいよ」

電話の向こうで優子は笑った。

ばればれだった。

そうでもないとかける理由が存在しない。

それもまた事実だった。

「別に理由なんかなくても電話してきてかまわないわよ」

もっと早く言つて欲しかった。

おかげで、年甲斐も無くドキドキできる日々を過ごせた事はありがたいのだが。

良い気分転換もできたし。

生活に別な刺激が加わり、ある意味では充実していたといつていい。

「お願いがあるんだけど」

突然優子にそう切り出された。

Episode 6 指の感触(4)

「なに？」

「美容室でのセミナーあったじゃない」

彼女と初めて会った場所だ。

「¥8,000で夢が買える仕事ってやつ」

「あそこでフェイシャルマッサージとパックのデモストやるんだけど来てもらえない」

会えるのならば何処へでも行く。

「いいよ、行く」

即答だ。

「お願いというのはね、モデルについてことなんだけど」

「いいよ、はっ、モデル？」

マッサージのモデルである。

「寝てくれるだけでいいから」

「もちろん 全然OK」

触れてもらえるなんて感激、拒否する理由は何一つ無い。

「よかった」

このでの誘いを断る者がいるのだろうか。

怪しい仕事への勧誘かもしれないという考えもなかったわけではない。

それでもいいと思った。

「オレはあの時追い出されたんだ、出入り禁止とかではないのかな」

あの時降っていた冷たい霧雨を思い出した。

「会員になりたいようなふりしてれば、喜んで入れてくれる」

「井上さんは会員なの？」

「わたしは違うわよ、その追い出されたときしゃべってたおじさま
いたでしょ」

「ああ、ダンディーな詐欺師」

アキラはにやけた顔を思い浮かべた。

「あはは」彼女は笑った。

「その詐欺師のおじさまの娘さんがうちのサロンのお客様なの」

「ふーん」

「その子に頼まれてデモやってるの」

「ふーん」

「あそこに来てる会員をモデルにするのもいいんだけど」

「ふーん」

「毎回モデルの希望者が多くて選ぶの面倒だから」

「ふん」

「男性の希望者も多くて」

「オレも男性だけど」

「そうね」

そう言っただけでまた笑った。

「井上さんみたいなきれいな人にだったら誰だってイジツて欲しいよ」

まして男なら間違いなく望むだろう。

「なんだか変な言い方ね」

ちよつとまづい表現だった。

「フェイシャルだから、やっぱり髭じゃまだよね」

「うーん残念だけどね、無精髭嫌いじゃないんだけど」

「あつ うん」

そうなんだ。

「マツサージの時、髭があると指が痛いので、仕事では男性お断りだし」

「わかった、完璧に剃っていく」

「今週木曜日の夜、大丈夫？」

「全然問題ないよ」

「じゃあ、待ってるね」

そう言っただけで電話は切れた。

「無精髭すきなんだー」
自然ににやけてくる。

Episode 6 指の感触(5)

久しぶりに見る彼女はやはり美しかった。

なんだか前よりキレイになった感じさえする。

季節が穏やかになり、少し薄着になったせいか、体のラインがよくわかる。

体系にピッタリと合った真っ白いエステティシヤンの白衣が妙にエロティックだ。

実はこの美容室には数回訪れている。

もちろん目的は優子。

結果は会えずじまいだったのだが・・・

そのことを彼女は知っているのだろうか。

当時より人の数が増している。

顔だとはいえ多くの人の前で体の一部を弄られるのは複雑な気持ちができるものだ。

ましてやベッドの上では、変な事を想像してしまうのはしかたのないことか。

パンツの前が少々膨らむのを感じる。

デモをするエステベッドを囲むように、すでに輪が出来始めている。

ある男性集団の中から、優子を対象とした会話が耳に届く。

「今日はオレが絶対にモデルやってやる」

30代前半と思われる男だ。

「マジッ！オレもお願いしたい」

別の男が言う。

「あー、あの指で弄らりたい」

囁くようにまた別の男が言った。

同感だ。

しかし、お前達のようなエロい奴らの顔を、優子に触れさせるなん

て許せない、絶対に。

「彼女×1らしいぜ」

そんな事まで聞こえてきた。

アロマキャンドルに火が灯され、レモンバームの爽やかな香が室内を包む。

ベッドが整えられ、タオルステイマーの温度が適温になった頃、アキラは優子に呼ばれるはずだ。

「それでは始めます」

優子はアキラの方をみた。

同時に、輪の一番後方から前に出ようとした。

「私お願いするは、遠くからわざわざ来たのよその為に、先生！」
50代位だろうか、大きな体格、立派なウエスト周りと二重になった顎が彼女の栄養状態の良さを表している。

ご夫人は、ベッドの横で懇願している。

「いいでしょ、先生！」そう言って一步前が出る。

優子に相当近い距離でだ。

「ねっ、いいでしょ？」

至近距離で断る余裕と隙を与えない。

かなりの威圧感を与えてる。

「あっ、でも」

何か言いかけて優子はこっちをみた。

アキラは苦笑いをしながらしかたなく頷いた。

彼女も苦笑いで応えた。

「いいです、では靴を脱いでベッドにどうぞ」

「よっこいしょ」

寝転ぶご夫人、簡易ベッドが異音を発して軋む。

優子がアシスタントの女の子の耳元で何かを伝えたようだった。

Episode 6 指の感触(6)

しかたがなかった。

けれど優子のことを少しの間みていることができる。

人の目を気にする事無く、みている事ができる。

それだけでも満足だった。

モデルのご夫人はすでに大きな鼾をかき、気持ち良さそうに寝ている。

もくもくとマッサージをこなす優子と時々目が合ったような、そんな気がした。

「終わりました・・・」

彼女の掛ける声にモデルは目を覚ました。

ご夫人は一瞬自分が何処にいるのか、何をしているのか状況が解らないようでもあった。

突然訪れた邪魔者のデモは終了した。

「はーっ、あら、もう終わっちゃったのね先生」

殆ど寝ていたくせに良く言う。

商品の説明をし終えた優子は軽く頭を下げ、控え室に消えた。

ご夫人は鏡に映した自分の顔をしげしげと覗き込んで、満足に浸っているようだ。

輪を作っていた人たちは店の外へと出て行った。

喫煙する者、自動販売機で飲み物を買って飲んでいる者もいる。

先程、彼女の噂話をしていた男性グループの姿は見当たらない。どうやら帰ったようだ。

アキラは店内に置いてあるヘア・カタログを眺めていたが、百合の香りがキツすぎる事もあり、自分もそろそろ帰ろうと思いい店を出ようとした。

「ごめんね」

優子の申し訳なさそうな声が背後から聞こえた。

「うん」

彼女が悪い訳ではない。

「ちよつと寝て」

ベッドを両腕で示した。

優子は頭に巻くタオルを新しいものと交換している。

アキラは勧められるままにベッドに横たわった。

ベッドには先程まで寝ていたご夫人の体温はもう残っていない。

ビニールレザーの持つヒンヤリとした感じが背中を伝う。

見上げると、数十センチの近さに優子がいる。

アキラは彼女の香りを胸いっぱい吸い込んだ。

「あつ、ごめん、脂取り紙使うの忘れた」

きつとキラキラテカッているに違いない。

優子はクスツと笑っただけで何も言わない。

「あのこと」

アキラが何かを言いかけたが、蒸しタオルで顔全体を覆われ、そのあとの言葉は途中で断られた。

心地のいい温度が顔を包み込んだ。

タオルの上から、顔の要所に指先で圧を掛けていく。

軽く閉じている瞼辺りを軽く押される。

疲れた目に適度な刺激が気持ちよかった。

額、眉毛、上瞼、下瞼、鼻、頬、上唇、口角、あごから首へ。

蒸しタオルが顔全体を順に清拭を行っていく。

余分な皮脂がとれ、スッキリとする。

クレンジンググローションを掌で体温と同じくらいになるよう温め、

顔全体に塗布しマッサージを始めた。

Episode 6 指の感触(7)

絶妙な力加減で的確にツボを押さえ、指が皮膚の上を滑っていく。彼女の指とアキラの皮膚の間には、ローションの幕しか存在しない。唇に指が触れた。

静電気が走ったような感覚がのこる。

軽いフレンチキッスをしたかのような錯覚を覚えた。

それは中学生の頃、

野球部の部室で同級生のマネージャーに突然されたキッスのように。

先程のご夫人は、こんな感覚を感じ取らないで、

ただ寝ていただけだなんてもつたいない。

ああして人生の半分は損をして生きているのではないだろうか。

つまらない事でいい、些細な事でもいい、

考え方を少し変えるだけで、

日々の出来事の中からも喜びを感じるとる事が出来るのに。

不思議なものだ、アキラは色々な物を失った今、どんなに小さな事

でも幸せに思えるようになっていた。

タカラベルモント社製のFT-1000の電源が入れられ、

吸引するためのコンプレッサーからノイズが聞こえた。

ガラス管の独特な感触が、額の中央部分から顛かみに向かって滑る。もしかすると、おびただしい皮脂の汚れがガラス管に吸い上げられてるのではないか。

それを見た優子は自分を嫌いになったりはしないだろうか。

本当は、モデルを頼んだ事を後悔しているのではないだろうか。

そんな後ろ向きな思いはすぐに打ち消された。

毛穴に詰まった汚れを吸引しているベントーゼンが肌に吸着した後、

皮膚から離れるときの”チュツ チュツ”と発する音が、

唇と唇とが触たときの心地よい音を連想させた。

それがいつしか優子の唇が頬を伝う感覚へと、想像がめぐる。勝手な妄想は限りなく広がっていく。

優子への思いがいつそう増していき、

色々な意味で改めて膨らんでいった瞬間だった。

美容師の勉強会があつて出かけるついでに、

予定が合うとフェイシャルのデモが行われる場所へと足をむけた。モデルとして。

本心はというと、モデルをやるついでに勉強会に出かけていったのかもしれなかつたのだが。

今はそんな時間が、優子と話をしている時が、

キツイ生活から現実逃避できる唯一の瞬間だった。

今日も満員電車に揺られて出かけていく。

もう見慣れた車内の光景を見ながらいくつもの駅を経過する。

中央線は複々線化の工事が進められている。

吉祥寺駅北口から会場に向かって歩き出した。

Episode 7 優子(1)

98

フェイスシャルのデモが終わり、スタッフ達がファミレスでお茶を
してるという。

「今何処？」

駅に向かうアキラに優子は電話をした。

「これから用事ある？無ければこっちにこない？」

そんな誘いだった。

もちろん了解する。

「わかった」

お目当てのファミレスはすぐに見つける事が出来た。

こんな感じで数名で食事やお茶をする事はしばしばあったのだが、
二人だけで会ったり、食事をしたりする事は一度もなかった。

しかも、彼女について知ってる事と言ったら、

名前と勤め先と電話番号位なものだ。

営業時間が終わり後片付けを済ませ、

YAMAHA製のプリメインアンプのスイッチをオフにする。
流れていたHip-Hopが途中で途切れ店内が急に静まる。

洗濯機の回る音だけが微かに聞こえた。

今日こそ食事のに誘うんだ、絶対に！

そう決心し携帯のメモリNO、1を押し通話を開始する。

3コール目で彼女はでた。

「ごめん、今料理の途中なの、ちょっと手が離せないんだ」

タイミングが悪い。

電話の向こうは側は随分とにぎやかだ。

「あとで電話するから待ってて」

こちらからは一言も発しないで電話は切れた。
アキラのテンションが急降下する。

新しくコーヒーを入れ、お客さんに差し入れしていただいたチーズケーキを、

冷蔵庫から取り出し、食べる分をホールから切り出し口に入れた。
冷凍されていた物を解凍するために昼頃移しておいた。

店内はいつもと違って静かだ。

休みの日に雑貨屋でみつけた、

古いフォードのピックアップを描いたリトグラフを額に入れ、

飾らないまま置いてあった。

壁を見ながら掛ける場所を考えている。

耐火煉瓦の壁は、石工ボードやベニヤ板のように簡単にフックを付ける事が出来ない。

ただ、かなりの重量の物でもいける。

レンガに印をつけ、ドリルで穴をあけPCプラグを埋めビスをねじ込む。

そんな事を考えながら煉瓦の壁を眺めていた。

店の電話が鳴った。

「アンダーグラウンド」です」

アキラは受話器を取って店の名を名乗る。

「さっきはごめんね」

優子からの電話だった。

携帯は不経済なので、なるべくなら家デンを使うようにしようと決めた。

栗の渋皮煮を作っていたらしかった。

「出来上がったなら、食べさせてあげるね」

楽しそうに言う。

優子22歳、ダンサーになる事を夢としそれを目指す3歳上の恭二と入籍をする。

沖縄出身の恭二は、彫りが深く端正な顔立ちでスタイルもよく、人目を引く存在であった。

そんな彼の周りには、常に女の噂や影が絶えることがなかった。

普段は小心者の彼だが、酒が入ると人が変わったようになってしま

う。

気が大きくなり、大盤振る舞いをする事も少なくない。

恭二が定職につかないため、生活費のほとんどをエステサロンで働く優子の収入でまかっていた。

恭二のダンスは、その業界内ではかなり評価の高いものであった。彼のクリエイトするダンスは、

自身の人間性を感じさせるような、自由に斬新、そしてセクシー。これからの新しいスタイルを予感させるものでもあった。

優子はそんな彼の生き方に共感し夢を託した。

ただ、恭二の才能と性格は時として仇となる。

自由な発想に富んでいる彼に、家庭という狭い世界と、子供を持つ事で生じる制限というものが受け入れがたかったのだ。

まじめに育った優子は、初めて経験した男性との関係を大切に、その相手と結婚するのが当然の成り行きなのだと思った。

そのような考えは、恭二にとってはナンセンスだったのだろうが。長女を妊娠した時も、恭二の子を産む事に何の疑問も、抵抗も感じなかった。

だんだん大きくなるお腹に、母となる喜びも同時に大きくなり満ちていく。

夫の稼ぎが殆ど無いのと、彼の借金返済のために、優子は妊娠を周囲に明かさず、

昼はエステサロン、夜は自分たちの住まいがある建物の一階に店を構える弁当屋で働いた。

その日の残り物がそのまま食卓にのぼることが殆ど毎日続いた。

聞こえてくる女の噂も、このお腹の子が生まれればきっと彼も変わってくれる。

そう信じて日々働く事が支えであった。

お腹が膨らむ分だけ、希望も膨らんでいくのだといきかせて。

生まれたばかりの乳飲み子の莉子をエステサロンに常設の託児所に預け働いた。

駅の近辺でのピラを配り、あまり好きではないキャッチ、

エステメニューの高額コースをクレジットで契約を結ばせる。

そうすることで営業成績を上げ給料を稼いできた。

納得のいかない売り方や、実際には結果のでない化粧品を売る矛盾に、

先輩や同僚達と泣した日々もあった。

そこへ美容部長からのキツイノルマが追い討ちをかける。

Episode 7 優子(3)

早番で帰る日があると、部屋に莉子を一人残し1階に店舗を構える弁当屋で閉店まで働いた。

それでも生活はけして楽にはならない。

恭二が部屋に帰ってこない日がしばしばあった。

そんな日も優子は弁当屋の残り物ではあるが、小さな卓袱台に食事を用意し恭二の帰りを待った。

時にはビールを飲み過ぎ、待ちくたびれてうたた寝をしてしまう事もある。

娘の莉子がトイレに起きる時、寝ている優子を夢から起こすこともそんな時の夢は、優子が唯一楽しみにしているといつていい、年に1度あるサロンの海外旅行であった。

高校生の頃波乗りをしていた事もあり、海がきれいな国が大好きだった。

ダイビングやシュノーケリングをし自然の中に身を置くと、

その大きさに自身の悩みや苦勞の小ささに改めて気づかされる。

その思いを忘れず、気持ちだけは貧しくならないようにしよう、そう誓うのだった。

日々の生活に追われ、いつしか恭二の存在が薄れていくなかにあって、

たまに帰ってきては優子を抱き、その時ばかりは優しい言葉を掛けていく恭二と、

その関係はもはや情だけのつながりでしかないと、優子は感じるようになっていった。

莉子が4歳を過ぎた頃、体調の優れない優子は2人目の子を授かったことを知る。

今の状況での妊娠は、当然だが歓迎されるものではない。

恭二に相談しようと思ったのだが、いつ帰ってくるかも解らなくなってきた最近では、その時間さえ作ることができない。相談せずに中絶することも何度となく考えた。その度に病院の前まで行くのだが、決心が鈍り帰ってくる。どんどん時間だけが経過をし、決断する猶予はなくなっていくばかりだ。

実家に帰り両親に相談してはみた。

「二人目が生まれれば恭二も変わるかもしれない」
そういつて産むことを勧められた。

「おろして離婚し、帰ってきなさい」

優子の本心はその言葉を期待した。

両親の本音もそうであった。

そう言つて我が子を迎え入れてあげたかった。

それを言えないでいたのには理由がある。

いまだ未婚のままにいる優子の実姉、祥子に遠慮してのことであった。

家族、親族の反対を押し切って恭二と一緒にになったことも後を引いている。

その事を理由に気の強い祥子はあからさまに歓迎しない態度を露にした。

この家に帰ってきてても優子には居場所が無い事くらいは想像がつく。希望は限りなくゼロに近いとわかつてはいたが、予想通りの結果に落胆しながら実家をあとにした。

Episode 7 優子(4)

駅へと向かう商店街のアーケードを歩く足取りはいつも重く、切ない。

あの部屋へ帰ると言う事は、いやという程現実をみせつけられる。出来ることなら、永遠とこの道が続けばいいと思う気持ちが歩くテンプを遅くした。

乗り馴れた京浜急行だが、1つずつ下車する駅が近づく程に気持ちが重くなっていく。

大きくなっていくお腹とは裏腹に、希望は限りなく小さくなっていくのを認めないわけにはいかなかった。

そんな気持ちが帰るべき場所へ、わずかではあるが遠回りをさせる。駅から薄暗い帰り道から、部屋の一部が観える。

珍しく部屋の電気が点いている。

消し忘れかと思いつながら、新聞受けの入り口に牛乳屋からの請求書が指してあるのが見えるドアを手前にひいた。

部屋にはすでに恭二が帰っていた。

「優子か」

珍しく機嫌が良い。

鼻歌混じりに優子に駆け寄ると「おかえり」と言って額にキッスをした。

優子は訝しげな目で恭二をみた。

あまりのテンションの高さに嫌悪感さえ覚えたのだった。

「妊娠したの」部屋にもどる彼の背中に向かって呟いた。

靴も脱がず、入り口に立ったまま小さな声でいった。

振り向いた恭二の顔が一瞬青ざめたのを見逃さない。

その後、恭二のとった態度が意外だったのに驚いた。

「そうか、よかったな」

笑顔でそう応えたのだから。

この人も変わってくれるかもしれない。

その思えたのもほんの一時だった。

「オレも二人の父親か」

「しつかり、まじめな仕事に就かないと」

「まあ、あがれよ」

優子の手をとり恭二は靴を脱ぐのをまつた。

小さな卓袱台の前に座るようと両肩に手を置いた。

恭二も横にあぐらをかいて座った。

やはり恭二は何も変わっていないかった。

そこには何か契約書のような書類が置いてある。

「真つ当な親になるには、まず金がある、オレの名前ではもう借り

られないから、お前の名義かしてくれ」

そう笑顔で言う恭二をみて、優子は心を決めた。

この人とは終わりにしよう。

「名義をかすなんて絶対無理」

そう言つて、その時できる精一杯の笑顔でやんわり拒否した。

「大丈夫、迷惑かけないから、オレ良い父親になるから、なあ、い

いだろ」

そういつて抱きついてくる。

「絶対無理」

優子の声に震えが混じる。

泣きたい気持ちを抑え、引きつった笑顔で断った。

「頼むよ」

恭二は土下座をした。

「お願い、頭をあげて」

契約書を彼の目の前に差し出す。

それを目の前に突きつけられた恭二は態度を一変させた。

突然顔色を変え暴力をふるいだす。

「いいから書けよ」

そう言つて殴る蹴るを繰り返しはじめた。

Episode 7 優子(5)

優子はお腹をかばうことしかできなかった。

「おとなしくサインすればいいんだ」

恭二は力づくで用を足させる。

震える手で仕方なく従った。

莉子を実家においてきたことがせめたもの救いだっただ。

こんな場面を見せずに済んだのだから。

そう考え、気を逸らすことでしか正気を保つ方法がみつからない。

こんな事が夢でありますようにと何度となく望んだ。

恭二が優子の社会保険証を持って部屋を出ていつてから、どれ位の時間泣いていたのだろうか。

外はもう日が落ち部屋の中は真つ暗だった。

この場には居たくなくて外へ出た。

何処をどう歩いたかは覚えていない。

気が付くと京浜急行の踏切が目の前にある。

警報音が鳴り、遮断機は降り、二個の赤いランプが交互に点滅している。

「さあ、この踏切から電車で飛び込んでおいで」
警報音が誘っているようにも感じた。

そうしてしまいたいと思っている自分に気づく。

目を閉じると莉子の笑顔がそれを引き止めた。

絵本を見ながら無邪気に微笑む娘を思った。

我がままも言わず、けなげに生きる娘への責任を考えた。

いつの間にか霧雨が落ちてきている。

雨粒の冷たさが現実を知らしめる。

部屋への帰り道、商店街を歩いていくと、煌煌と光が照らし出している美容室の並びに定休日の酒屋がある。

ひっそりとする店先の、降ろされているシャッターに身を寄せると

うに雨をしのいだ。

自然に涙が溢れてくる。

暴力に対する恐怖の震えと、しゃくり上げる体の振動でシャツターが波打ち、音を立てる。

酒屋には誰もいないことを願った。

一瞬でも命を絶とうと考えた事を、優子は自身の腹部を摩り、まだ見ぬ我が子に詫びた。

こんな時に甘えられる家族も、友人も側にいない。

優子は途方に暮れた。

雨は本降りに変わっていた。

異常を感じたのか、通りがかりと思われる男性が透明なビニール傘をさしてくれた。

「すぐ近所ですから、大丈夫です」

下を向いたまま断った。

人の温もり求めている反面、今は構わないで欲しかった。

「安物だし、いいから使って」

そうとだけ言い、走って美容室の店の中へ消えた。

肩にはタオルが掛けてあった。

タオルからほんのり甘い、アップルシナモンのようないい香りがあった。

涙と高い湿度とが、香りを強くしていった。

タオルが涙と嫌な気分をすべて吸収してくれるのではないかと思え、顔を埋めて泣いた。

出産費用として蓄えたものは恭二がキレイに使い果たしてしまっ

た。会社の旅行に使う為に積み立てたものを解約し、費用にあて何とかした。

長男の誠を出産し終えた優子が部屋に帰って見た物は、

見慣れない女物の洋服と優子には不釣り合いな派手な下着であった。

優子に残されたものは、なんの罪の無いかわいい二人の子供と、

恭一が借りた優子名義の借金だけだった。

98

「お店でしょ、今日は静かだね」

いつものJ-WAVEも、好きな音楽も流れていない。

「話したい事があってね、いつもとは違う話を」

「あっ、そうなんだ」

優子の声のトーンも少しさがる。

「もう気が付いてると思うけど」

「.....」

彼女は無言になった。

「井上さんのこと特別に思ってるんだ」

「うん」

「気になるんだ」

アキラは素直に行った。

「うん」

「井上さんの事、もっと知りたいんだ」

「コーヒーを一口飲んでから続ける。」

「気になってどうしようもないんだ キミの事」

「.....」

「許されるなら、そのうち二人でゆっくり話がしたい」

「.....」

「だめだろうか」

しばらく沈黙のあと、優子は話し始めた。

「その気持ち、とってもうれい、でも、わたしはあなたが思っているような女じゃないと思う」

2人はしばらく沈黙する。

「それは断る為の言い訳」

だとしたら、ハッキリ断って欲しいとアキラは思った。

「私もゆっくり話せる時間が欲しかった」

優子はすべてを話しておきたかった。

話をした上で、もう一度よく考えて欲しい。

そう思っていた。

「今は一つだけ伝えさせて」

「なに」

「私×1なの、子供も2人いるの」

「それは何となく聞こえてきてたよ」

世間の勝手な噂で耳に入ってきていた。

「オレも×1だよ、2人いた子供は妻が連れていったけど」

「うん」

彼女もその事は知っていたようだ。

優子の容姿を考えたら、既婚であっても何の不思議もない。

むしろそうでないほうが不自然でさえある。

”既婚であった”という過去形である事実にあキラは感謝した。

一度話をしてみたい、色々知りたい。

それは彼女も同じ気持ちでいてくれたのだとわかった。

ならば焦ることはない。

優子のことをゆっくり知っていけばよい。

アキラ自身のこともしっくり時間を掛けて知ってもらえばいい。

「いつも世話になってる人の会社でバーベキューあるんだけど、

子供達も連れてこないか」

渡瀬には”気になる女性がいる”ということとは告げてあった。

家族をバーベキューに誘えと言ってくれたのも渡瀬だった。

「えー、いいのかな」

「バーベキューいくいく」

後ろで子供達の喜んでる声が聞こえる。

「たのしみだね」

「迎えに行くよ」

日時を伝え電話を切った。

Episode 8 進展(1)

98

蝉の鳴き声がうるさい位耳に入ってくる。

8月下旬、午前中の気温はすでに30 を超えていた。今日も猛暑日の一日に数えられるのである。

待ち合わせ時間より15分も早く彼女の住まいに着いてしまった。マンションの来客用駐車スペースに車を停める。

少し時間が早いので、近くのコンビニでVolvicを買い、雑誌Lightningを立ち読みしていた。

店内からマガジンラック越しに外に目をやると、優子が二人の子供と一緒にこちらに歩いてくるのがみえる。

Tシャツにデニムのハーフパンツ、サンダル。ラフな姿を見るのは初めてだった。

サンバイザーの後ろから、ポニーテールに結んだ後ろ髪がゆれる。夏に似合う、シースルーのバッグを肩から掛けていた。

アキラもHanesのTシャツにデニムのハーフパンツ、それにキヤップ。

同じような格好をしている。

優子は公共料金の支払いと、子供達が冷蔵庫から取り出したスポーツドリンクが2本。

その会計を済ます。

「暑いね」

ハンドタオルで額の汗を押さえた。

「そうだね」

雑誌をラックに戻した。

莉子がこちらに向かって歩いてくるのがみえる。

「お母さんと同じ格好だね」

アキラと彼女とを交互に見上げた。

「同じだね」

優子が笑顔で応えた。

「おなじだ おなじだ」

駆け寄ってきた新も負けずにいう。

アキラは2人に名前を尋ねた。

莉子は元気に、人見知りをする誠は母優子の手をつかみ、その腕をぶらぶら振っている。

「本当に同じだね」

コンビニを出て、歩き始めると優子は言った。

「うん」

アキラは歩きながら横にいる彼女を見た。

「井上さんのラフな格好 初めてだな」

白衣かパンツスーツ姿しか記憶に無い。

「アキラくんはだいたいそんな感じ？」

自然に名前を呼んでくれたことがうれしかった。

優子に会う時はスーツやジャケットを着てるが多かった。

普段はデニムやチノが中心だ。

アキラは古着やワークウェア等を探して歩くのが結構好きだったりする。

マンションの駐車場に向かい歩きながら話をした。

ご近所さんだと思われる人と優子が挨拶を交わす。

アキラも一緒に軽い会釈をする。

「井上さんという呼び方、変えても構わないかな」
立ち止まって聞いてみた。

Episode 8 進展(2)

「わたしも井上さんは嫌かな」

彼女は歩いてきた足を止め振り返った。

「ユウちゃんでもいいかな」

少々照れくさい。

「いいよ」

優子は歩き出した。

夏の日差しがさらに増し、アスファルトを照りつける。

立ち止まっているアキラに、路面の温度がビーチサンダル越しに伝わってきていた。

先を歩く優子に追いつくよう、歩調を少しだけ早めた。

4人は来客用駐車場に止められている車に乗り込んだ。

助手席の優子は、カーゴヴァンの中を見回し、

なんだかニヤケているように見える。

「どうかした？」

「この香り、何の香りなの？」

「えっ、何か臭う？」

アキラは自分の脇に鼻を近づけた。

優子は笑ってアキラの動きを、坊主頭に手をやり制止した。

「なんだかいい香り」

アキラは鼻を鳴らして大きく息を吸い込んだ。

「芳香剤の匂いかな」

この香りはもう10年以上使っている。

「うーん、自分では解らないな」

匂いになれてしまったアキラには何も匂わない。

「ふーん、そうなんだ」

子供達は広い後部座席ではしゃいでいた。

仲の良い姉弟である。

20分も車を走らせれば、渡瀬の会社に着く。

「S A D E 聴くんだ」

C D チェンジャーの3枚目に入っている曲が流れてる。

「好きだよ」

「私も好き」

「よかった」

音楽の趣味が違つと正直つらい。

優子とのドライブはきつと楽しいものになるだろうと想像できた。

8階建ての会社のビルの屋上には、すでに数家族が集まっていた。激しい日差しを避けられるよう、大きめのColemanのタープが3張りみえる。

渡瀬の妻、美保子の姿があつた。

準備をしているようだが、

手を止めてくれた美保子に彼女達親子を紹介した。

「優子さんと莉子ちゃん、新くんです」

「すみません、お言葉に甘え突然お邪魔して」

サンバイザーをとり、優子は軽く頭を下げた。

「話はアキラから色々聞いてるわ」

そう言つて美保子は微笑んだ。

「こんにちは」

莉子は元気に挨拶をする。

新はシャイだ。下を向いてモジモジしている。

Episode 8 進展(3)

「何か手伝う事ないですか？」

優子が美保子に尋ねた。

「野菜切るの手伝ってもらえるかな」

美保子はエプロンを手渡した。

「はい」

優子はうれしそうにそれを受け取る。

「ここには女性が何人かいると思うんだけど使えないから」

美保子は皮肉たつぷりに顔をしかめた。

優子はどうリアクションしていいのか迷った。

きれいな美保子が変な顔をするのを見て、思わず優子はクスッと笑った。

確かに使えそうにないかもしれない。

数名いる女性たちはタバコを吸いながら楽しそうに会話をしている。気づった感じの無い美保子を見て、初対面の優子は緊張が解け変な力が抜けた。

優子はエプロンを着け、野菜を切り始めた。

「助かるわ、普通に包丁使えて」

美保子が微笑んで応える。

優子は普通って言葉に何となくホッと出来た。

渡瀬が3人の姉妹を連れてやってきた。

テーブルがつくる日陰で下ごしらえをしている美保子と優子を見た。

「おまえら 初めてのお客さんに包丁持たせて、なに偉そうにタバコなんか吸ってんだ」

井戸端会議に講じる女性の輪に向かって渡瀬が怒鳴った。

「吸い殻をその辺に捨てんなよ」

彼女達はカゴの中のハツカネズミのようにあたりをうろついている。

莉子と新は、すぐに3姉妹と仲良くなった。

子供達は感情を素直に表せていい。

アキラは2台あるWebberのバーベキューコンロに炭を入れながら、それらの光景を眺めていた。

火の番人と肉を焼く役目はいつもアキラの仕事だ。

並べた炭を起こす方法は簡単。

着火材などは使わずバーナーの強烈な火を直接炭に当てる。

パチパチと派手な音をたて真っ赤になる炭を見て、莉子と新は興奮していた。

水分を含んでいる炭は、激しくはじけ飛ぶ。

飛び散る火の粉が顔や腕につかないよう注意が必要だ。

よそ見をしていると、バーナーを持っている右腕を狙い火の粉が飛んでくる。

レーザー脱毛の火傷した腕とは反対の腕に刺激がはしる。

「アチツ！」

優子の方に目をやると、左手に握った包丁で野菜を切るのを止め、こちらを見ていた。

「熱い刺激に縁があるのね」

とでも言いたげに微笑みを浮かべ、

首を左右に振り、両腕を広げおどけてみせた。

Episode 8 進展(4)

“パチツ”炭が大きく飛び散る。

「アキラ肉取ってこいよ」

近所の精肉店”肉の高幡”に注文済みだ。

「オレの車使え」渡瀬がキーを放ってよこした。

駐車場からアキラの車は出せそうにない。

動かす事は不可能だった。

ピタリと誰かの車が囲むように停めてある。

駐車場には目一杯車が置いてあった。

出入り口の一番近いところに置いてある渡瀬の車しか使えない状態だった。

肉の量が多すぎて、会社の冷蔵庫には入りきらない。

“肉の高幡”の大きな業務用冷蔵庫に置いてある物を取りに行く。

数種類の部位、合計5キロ程だと思われる。

保冷剤を多めに入れたLOGOSのクラボックスを、

駐車場の端に設置してある物置から取り出し、Jeepの後部、荷台部分に乗せる。

RECARO のセミバケットシートに身を沈め、シリンダーにキ―を刺す。

優子が助手席に乗り込んできた。

美保子が「一緒に取りに行つて」といつたらしい。

なんだか優子が不機嫌にみえる。

駐車場から会社に沿って脇道を抜け県道に出た。

「美保子さんきれいな人ね」

「なに？」と叫ぶ。

Jeepの幌は外してあり、今はオープンだ。

走り出すと、エンジン音と風を切るノイズに会話はかき消され、大声を出さないと聞き取れない。

「美保子さんキレイねー」

今度は大きな声で優子は叫んだ。

「彼女は同級生なんだ」

優子の方を向きアキラが叫び返す。

小中高と同じ学校へ通っていた。

美保子には色々世話になた。

テストがあるたびに、ノートを移させてもらい。

喧嘩の傷の手当をしてもらい。

部活が終わると一緒に帰り。

風をひくと見舞いに来た。

2人は程よい距離で、良い関係が続いた。

「おっちゃん元気」

新鮮な肉が並んでいるショーケースの向こうに高幡のおっちゃんがいる。

「いらつしゃいアキラちゃん」

「肉取りに来た」

「アキラちゃんこそ元気だった？」

「おっちゃんの耳にも色々届いてるだろ」

おっちゃんは聞こえない振りをした。

店の奥にあるメッキで光る大きな冷蔵庫から肉を運び出す。

「5キロつてこんなにかつたかな」

いっぱいになったクーラーボックスを担ぐ。

「7キロだよ」

急に肩への重さが増した気がした。

「久しぶりにアキラちゃんが来るといっからサービスだ」

ありがたい。

「そこにいるべっぴんさんの分もだよ」

奥からおばちゃんの声が聞こえてきた。

Episode 8 進展(5)

バーベキューは焼き始めが忙しい。

まずはお腹を空かせた子供達の胃袋を満たしてあげる。

育ち盛りの子供達が多いので大変だ。

滞らせることなく、また焼き過ぎることのないよう。

噛むのがあまり上手なく、飲み込むのが下手な子供もいる。

そういつた意味では、大人に食べさせる物以上に気を使う。

もちろんピーマン、タマネギ、椎茸、南瓜などの野菜も忘れてはいけない。

普段食が細い莉子も、今日はたくさん食べているようだ。

渡瀬家の3姉妹に負けない位頑張った。

お腹が満たされた莉子は、アキラの隣にきて焼くのを手伝った。

コンロに乗せた肉を、トングを使ってヒックリ返す役目を果たす。

莉子はピタリとアキラに寄り添い側を離れないでいる。

そんな莉子は、時間が経つにつれさらにベツタリになった。

やはり子供はかわいい。

優子といたら美保子にアキラの学生時代の事をあれこれと聞いているようだった。

時々アキラに意味ありげな視線を向ける。

聞かれて困るような事は、何も無いはずなのだが。

優子は久しぶりにのんびりとした時間を過ごした。

何のしがらみも無い人々と、気を使う事も無く会話やお酒を楽しめたことに感謝した。

接客を業としているわりに、人付き合いはあまり得意ではない。

他人と関わる事にどこか臆病になっていたのかもしれない。

こういう時を過ごすのも悪くないと感じた。

「食べてる？」

優子がビールを片手にこちらにきた。

アキラからトングを取り上げると、

その手に自分が持っていたビールを握らせた。

ほんのりピンク色の肌が優子をさらに美しく見せた。

優子はアキラの右側にたった。

莉子がいるのとは反対側だ。

「莉子、アキラくんを独り占めはダメよ」

子供は気持ちをストレートにだせていい。

莉子の絡めた腕により力がある。

莉子が他人に懐くのは珍しい。

まして男性にはあまり近づかない。

アキラからは特別何かを感じるようだ。

「運転だから飲めないよね、残念」

「ああ、残念だ」

優子は牛タンを焼き始めた。

頃合いをみて、アキラの口にはこんでいる。

「熱いから気をつけてね」

絶妙な焼き具合である。

「おいしい」

優子が悪戯っぽく微笑む。

「ああ、最高だ」

腹の具合も、そして気持ちも満たされていく。

Episode 8 進展(6)

焼きそばでバーベキューは締めを迎える。

その出来を左右するのに重要な鍵を握る物がある。

始めの一步がすべてを決してしまおうといっても良いかもしれない。

鉄板に敷く脂にポイントがある。

以前住んでいたご近所に、創業100有余年の割烹がある。

その板長から秘伝の焼きそばレシピを伝授いただいた。

高級な松坂牛の牛脂を、熱した鉄板にまんべんなく塗る。

これだけである。

スーパード3玉1000円程度の焼きそばが上品な料理に変身する。

仕上げは一般的な方法の、ビールを掛けて蒸す。

付属のたれをまんべんなく混ぜ合わせ、これで完成。

「美味しい！」

女性には特に評価が高い一品。

炭の熱がだんだんと冷めていく。

家族サービスの時間が終わりを迎える時間だ。

後片付けが済めば、普段の生活に戻る準備をする。

渡瀬の家族が駐車場を出る我々を見送りにきた。

「ゆうこちゃん良い子だね」

美保子が運転席のドア越しにアキラにつぶやいた。

「またきてね」

「またくるね」

3姉妹に送られ帰路につく。

新は手を振り続ける彼女達とのお別れが寂しそうだ。

「またこれる」

「ああ」

新は小さくなる3姉妹を車内から見続けている。

「帰りたくない」

莉子がぐずり始めた。

そろそろ小学生が起きていて良い時間ではなくなる。

新は後ろのシートで寝息をたてていた。

遊び疲れてぐったりだ。

「帰りたくない」

「我がまま言わないの」

優子が困った顔でアキラをみる。

「りこちゃん、髪切ろうか」

無造作に伸びた髪が気になっていた。

「りこ髪切る、いいでしょお母さん」

アキラは莉子の髪をなでた。

「こんな時間から迷惑じゃない？」

優子は申し訳なさそうな顔をした。

「よし、決まり」

莉子は車の中だというのに飛び跳ねて喜んだ。

「ごめんね、せっかくの休みなのに仕事までさせて」

「ユウちゃんにも、店見て欲しいし」

「本当！見てみたかったんだ、アキラくんのお店」

「美味しいコーヒーも入れるし」

「うれしい、コーヒー大好き」

なんだかそんな感じがしてた。

新を抱き車から降ろす。

すぐに莉子がアキラの空いてる右手につながる。

小さくてかわいらしい手が、一生懸命アキラの手を握る。

地下に続く煉瓦を敷き詰めた階段を、4人はゆっくり降りる。

抱いた新を落とさないよう注意して。

Episode 8 進展(7)

「素敵な造りね」

エントランスの明かりはつけたままにしている。

その明かりがやんわりと店内に光を差す。

店の入り口の鍵を開け扉を手前に引き、

中に入り店内の照明を点灯させた。

電球が店内を明るくする。

新はその光に反応し、眩しいからなのか顔をアキラの胸に強く押し付けた。

明るさに目が慣れた頃、いい感じに黒光りした皮のソファーに新を横にする。

「すぐくアキラくんらしいお店」

地下室が思わぬ”掘り出し物”であった経緯を話して聞かせた。

「結構好きだな」

あまり広くはない店内を2人同時に見回す。

「いいお店だね」

「気に入ってくれた？」

「うん、とつても」

優子らは旋階段何段か昇り、途中で腰をおろした。

「この上はどうなってるの？」

上方の扉がある方を見上げてる。

「そこは内緒だ」

その扉の奥はもっと仲良しになったら案内できるかも。

その時の為に部屋をキレイに片付ける仕事が残っている。

莉子はとつくに椅子に座りこちらを見て、

”まだ”といたげな仕草で膨れっ面をしてる。

早速、肩甲骨辺りまで伸びた、莉子の髪に鋏を入れる。

活発な彼女らしく、肩にかからない位の長さにし、さらに軽くもし

た。

良く似合っている。

それを見た優子は、莉子に似合う似合わないという事よりも、自分より先にカットをした莉子にジェラシーを感じた。

途中コツクリコツクリし始めた莉子は、

出来上がりを見る事もなく眠りに落ちた。

よく遊んだし、無理はない。

かなり頑張つて起きていたのだろう。

こうして2人の可愛い姿を見ていると刹那くなる。

元の妻が連れて行った2人の子供の事を思い出さずにはいられないから。

この子達に愛情を注いでいったら、忘れられるのだろうか。

莉子と新はこのままわたしを受け入れてくれるのだろうか。

予想もしていなかった感情がムクムクと湧いてくる。

アキラが落としたてのコーヒーを自分用のマグと来客用のマグに入れる。

「美保子さん”アキラ”って呼び捨てしてた」

優子はムツとした表情をする。

莉子ちゃんの膨れっ面を思い出した。

やっぱり親子だ、良く似てる。

「特別な関係だったの？」

「何にもなかったよ」

アキラは素直に答えた。

Episode 8 進展(8)

2つのマグを片手で持ち、店の外へ出る。

アキラの後について優子も外に出てくる。

マグをエントランスのテーブルに置き、向かい合って椅子に腰掛ける。

「他の女性に呼び捨てされるのをみるのはけしていい気持ちがいわ」

また膨れっ面に戻っている。

立ち上がってアキラの方に顔を近づけ、目をジッと見つめた。

ドキドキするが、ここで視線を外し疑いを持たれる訳にはいかない。アキラは自身が映る大きくて奇麗な優子の瞳をしっかりと見つめ返す。

「本当に何も無かったよ」

優子の膨れた頬の左側を人差し指で軽く押してみる。

優子はそれを避けるどころか、反対に自分の頬をアキラの指に強く押し付けてきた。

そのまま悪戯っぽく変な顔をしてみせ、舌をぺろつと出してみせた。アキラは可愛らしい仕草をする彼女を抱きしめたい衝動に駆られたが、理性がそれに勝った。

テーブルの中央から出ている大きなガーデンパラスルは、今は閉じている。

その先端辺りに月がキレイに輝いて見える。

自分のマグを手前に引き、来客用のマグを優子の方に差し出した。

優子はアキラから視線をマグカップに移し、

少し間を置き、取手部分を左手で握り持ち上げ、右の掌をカップに添えた。

「良い香り」

目を閉じ、マグから立ち上がる湯気に鼻を近づけ、

香りを楽しんでから優子は一口含んだ。

少し上向き加減の時に見える首の部分、特に飲み込むときの喉の周りがセクシーだ。

マグの淵がら離れた唇がコーヒーで濡れ、テーブルを照らす月明かりがさらに艶っぽく光らせた。

何ともいえない色気を感じさせる一瞬であった。

「喉が渴くの」

その時すでに優子には笑顔が戻っていた。

焼き肉とアルコールで乾いた喉を、カフェインが潤す。

優子は食道を温かい液体が通る感覚を気持良いと感じた。

「美味しい」

コーヒーの香ばしさを味わいながら、

アキラはその一部始終を向かい合う席の正面から無言で見つめている。

「ゆうこの専用マグ、置いてくれないかな」

わたしは無言で頷いた。

もちろんそのつもりだ。

「もう一杯どう」

優子も無言で頷いた。

優子の存在だけが今のアキラにとって、ビタミン剤であり、栄養であり、やる気の源でもある。

正直、店の経営状態は決して良いとはいえなかった。

半場逃げるように店を閉め、慣れた土地を離れ店を出したのまではいいが。

勝手な噂話が一人歩きし、有る事無い事、色々な事が耳に入ってくる。

女に貢いで家、土地を失った、とか。

薬に手を出し、暴力団に家、店を乗っ取られたらしい、とか。

驚かされる話が、おもしろ可笑しく聞こえてきた。

デマではあるが、影響がゼロとはいえないのであろう。

そんな状態で常連さんに案内状を書ける訳も無く、

かといって、新しいお客様を呼ぶのは容易な事ではない。

信用を失うのは簡単なこと。

しかし、それを取り戻すのは並ではない。

そんなことは誰もが承知だが、実際現実に直面してみると聞く以上に大変だ。

現実には相当に厳しい。

技術を理解してもらえればきつとりピートにつながる。

人間性に共感してもらえれば、必ず勝機はある。

続けていれば常連さんも戻ってきてくれるはず。

そう信じるしか無い。

カットの料金を通常より大幅に割引した”オシャレ体感チケット

”なるものを造り、

ご近所にポスティングしてまわった。

結果来客数は多いが、単価が安いいため体はキツイし利益も少ない。値段が目当てで、通常料金になると見向きもしない。

このままでは負債の返済が滞る。

真夏でも地下の店は意外と涼しい。

開店前に、植物達に水やりをする。

宮里が寄せ植えしたコニファーやアイビーも元気の育っている。

9月に入っても気温の高い日が続いていた。

ホースをリールから伸ばし、蛇口をひねる。

天気が続き鉢の土が乾いている。

水をよほど欲していたのだろう、勢いよく吸収していく。

CLOSEDの札をOPENに変える。

10:00の開店と同時に店の電話が鳴った。

「アンダーグラウンドです」

「お忙しところ……」

営業の電話だ。

フリーペーパーの”チョット・ペッパー”だという。

渋谷辺りで配っているところをよく見かける情報誌だ。

この地区でも近く創刊するのだという。

「プレゼンだけでもさせてくださいませんか」

時間はある。

「話だけならいくらでも聞くよ」

このでの電話が最近多くかかってくるようになった。

現実、集客について何か手を考えないといけない。

Episode 9 悪戦苦闘(2)

福生の基地で、感じの良いメイプルのローボードを手に入れた。使わなくなり倉庫の隅にしまつてあつたものを安く譲ってもらつた。汚れはあるものの、元来造りが丈夫なため簡単に壊れはしない。レモンオイルで丹念に磨きをかければキレイに蘇る。最近では組み立て式の簡単な家具が人気のようにだが、永く使えて、飽きのこない物は家具に限らずいいものだ。

階段を降りてくる女性の姿がみえた。予約制を取っているので、飛び込みのお客さんとは考えにくい。店内の壁掛け時計を見ると、

朝一番で営業の電話をかけてきた女性との約束の時間だ。

「こんにちは」
女性は軽く頭をさげた。

アキラは手が荒れないようカラーをする時に使うプラの手袋をしている。

それを手から脱がす。

「ごめんごめん、もうそんな時間なんだ」

彼女はアキラが店主だとは思っていないようだ。

店の奥を覗き、同対応したら良いのか思案しているようだ。

「どうぞ」

店内へ招き入れる。

顔を洗いタオルで拭き終わると、挨拶を交わす。

リメイク中の家具とアキラと店内を交互に見ながら不安そうにする。

「坊主頭だけど、オレ美容師だから、一応」
無精髭は生やしっぱなしだし、おおよそ美容師とは思えないアキラを、

何処か怪しげに感じているのだろう。

店内にはもちろんお客さんはいない。

今日は朝からツナギを着て作業をしている。

そんな姿も原因なのかもしれない。

店主だとは思われなくても仕方ない事だ。

「アンダーグラウンド」代表です」

名刺を差し出す。

「チヨット・ペツパーの村上です」

名刺交換を済ませる。

ようやく彼女はホッとした表情をみせた。

「椅子は1台だけなんです」

彼女はそう広くはない店内を見回した。

「スタッフもいないし、一台で用は足りる」

想像とは違っていたのか、契約は採れそうにないと思ったのか。

カメラで何枚かの写真を撮ってはいたが、

たいしたプレゼンはせずに帰っていった。

わざわざ作業の手を止める程のことでもなかったのかも。

ついでだから遅い昼飯にでもしようと思いついた。部屋にあがった。

昼といっても、沸かしたお湯をカップ麺に注ぐ。

ただそれだけ。

こんな食事がいつまで続くのだろうか。

Episode 9 悪戦苦闘(3)

「おはようございます」

モップと入り口のマットを交換に、業者がやってきた。

昨日、手持ちのお金を材料代に払ってしまった為、財布の中身は小銭しか残っていない。

たしか、十数円だったと思う。

レジスターの中に釣り銭はもちらんない。

今日来るとは予想していなかった。

朝1番のお客様に料金をいただかないと、支払えない。

「申し訳ない、妻が銀行へ支払いにいつてる、店の釣り銭とオレの財布が入ったバツクを持っていつてしまつて手持ちが無い」

存在するはずの無い妻と、あるはずの無い金の作り話をし、午後に出直してもらえようお願いした。

この手口は何度が使用している。

いい加減、変だとは気が付いているのかもしれないが。

「わたし、先に料金払いましょうか」

そのやり取りを聞いていたお客様がそう申し出てくれた。

「大丈夫ですよ」

ケープを着けたまま、こちらを向いているお客様に答える。

そんな気を使わせる自分が情けなかった。

この歳で、この日本で、まさか1円単位で困るとは思いもしなかった。

こんな状態でのやりくりは非常に疲れる。

とはいっても、現状何とか乗り切るしかなかったのだが。

「こんにちは」

ヘアメイクが仕上がった後ろ姿を、合わせ鏡でドレッサーに映し出している時だった。

入り口の方に目をやると”チョット・ペッパー”の営業、村上が立

っている。

黒のパンツスーツがスタイルの良い彼女に良く似合っている。裾に向かってキレイにテーパードするパンツから覗く細い足首を、少し高めのハイヒールを履く事で、さらにキレイさを際立たせて見せている。

彼女はお客様の会計に邪魔にならない位置に立つ。

少し移動する際に無垢の床材を歩く時、動いた歩数だけヒールの音が響いた。

「ありがとうございました」

扉を開け、頭を下げる。

「ありがとうございます」

同時に村上も深々と頭を下げた。

「どうしたの」

村上は頭をあげた。

「すみません、アポもとらず」

申し訳なさそうな顔をした。

「別に構わんよ、この後5：00まで予約は入ってないから」

古い壁掛け時計は2：00を少し回ったところを刺していた。

「まともにプレゼンしないで帰ったから興味が無いのかと思った」

村上はブリーフケースから書類を取り出した。

前回の訪問からちょうど1週間が過ぎた。

「実はこの様なお店を想像してなくて」

わたしの顔をみている。

「オレみたいな美容師も想像していなかっただろ？」

「あっはい、いえそんなこと・・・」

すこし顔が赤らんだ気がした。

Episode 9 悪戦苦闘(4)

「すごく興味があるんです、このお店」

お世辞を言うのも大変だ。

「先程、勝手に写真を数枚撮らせていただきました」

村上はカメラをテーブルの上に置いた。

アキラはソファーに座るよう薦めた。

「困るな勝手に撮影されては」

ソファーに腰をおろそうとした村上は、それを途中で止めた。

中腰の状態で腰を浮かせたまま、アキラを見上げた。

「冗談だよ」

村上は安心したのか、力が抜けたように腰をおろした。

「いじわる言わないでください」

安堵の表情をしながら、資料をテーブルの上に広げる。

「村上さんだっけ」

彼女は手を止めた。

「名前覚えてくれたんですね」

村上は数秒前とは違う表情をする。

「コーヒー飲むか、ホットしか無いけど」

今日も残暑が厳しい。

「いただきます」

プレゼンの資料にはヒントになることが結構書いてあった。

村上はアキラの求めているコンセプトを、

店の造りから理解してくれたようだ。

伝わる人には伝わるんだ。

少しホツとした。

「写真撮ってもよろしいですか？」

村上は念を押すように確認した。

「勝手な行動は困る」

悪戯っぽく笑うアキラは2杯目のコーヒーをマグに入れた。

彼女は熱心にシャッターを切った。

色々な構図で繰り返し撮った。

アキラは写真に興味があった。

ビデオのように動画を記録する媒体も有るが、

一瞬の瞬間を切り取る事ができ、保存できる静止画の方が好きだ。

そう言った意味では、絵画にも興味ある。

自分で描きたいが、絵心があまり優れていないため、

今のところは手を出さずにいる。

「オーナー1枚撮ります」

村上はアキラにレンズを向けた。

「オレはいいよ」

既に何度かシャッターは切られた後だった。

Episode 9 悪戦苦闘(5)

原稿が出来上がり、FAXで送られて来た。

最終決定は直接伺って決めさせていただきます。と、
追記してあった。

「こんにちは」

アキラは家具のリメイクをしようとサンドペーパーを使い、
下地をキレイに整えていた。

坊主頭から、玉の様な汗を流している。

首から下げたタオルでそれを拭った。

「今日も暑いですね」

村上が冷たいペットボトルのお茶を差し入れてくれた。

「原稿見ていただけました？」

ボトルのキャップを開け、アキラに手渡す。

それを受け取り店の奥に入っていった。

村上也後に続いた。

訪れるたびに少しずつ変わっていくこの店を見るのは村上にとって
楽しみの一つだった。

新しく絵が飾られたり、モノクロ写真のパネルが別の物に変わって
いたり。

最近のサロンの造りはどことなく真っ白で明るすぎるイメージがあ
る。

どことなくどこも代わり映えしない。

美容室とはこうあるべきだ、みたいな感覚が強過ぎるのかもしれない
が。

ここはちがった。

個性的だ。

なぜか気が休まる。

なんとなく、ゆっくり時間が流れている様な感がある。何がそうさせているのかハッキリとは解らないのだけれど。

オーナーの人間性がとても伝わる良い店だと個人的には感じた。

「この冒頭のコピーいいね、気に入ったよ」

短い文で”アンダーグラウンド”を的確に表している。

その原稿に少しだけ手直しをした物を彼女に渡した。

「全体的に良くできてると思うよ」

村上は、渡された原稿に目を通し頷いた。

全体が感じの良い文にまとまった。

彼女は満足そうに微笑んだ。

「ありがとうございます」

発行当日、ガソリンスタンドに置いてある”チョット・ペッパー”をいただいてくる。

14:00を過ぎたが予約の電話は鳴る気配はない。

シャンプーの途中、電話が鳴った。

濡れてる手をタオルで拭いてから受話器をとった。

「アンダーグラウンド”です」

アキラは期待を込め応答した。

「間に合ってます」

マンションを売る営業の電話だった。

切ると同時に電話が鳴った。

「アンダーグラウンド”です」

再度期待込めた。

今度は間違え電話だった。

悪戯や、無言、他の用事で電話をくれるなら少しタイミングを考えてもらいたい。

お客様の居ないときや、せめてシャンプーをしていない時にお願ひしたいものだ。

いつもより余計な労力を使い、精神的には少々辛い一日だった。

閉店間際に電話が鳴った。
カラーの予約をいただいた。
なおも、立て続けに3件。
明くる日も電話は鳴り続けた。
情報誌の効果は絶大だった。

Episode 9 悪戦苦闘(6)

一つ問題が生じた。

最後の手持ちで買ったパーマ液やカラー材の在庫が底をついた。

これでは施術ができない。

電気、水道、電話、ガス。

営業と生活に必要な物の支払いで、現金はなくなった。

どれだけ予約をもらっても、これでは話にならない。

気が進まないが、以前取引のあったディーラーの斉藤 武に電話を入れてみた。

「お元気ですか？」

聞き慣れた懐かしい声が聞こえてきた。

斉藤は、アキラが独立した頃新人として営業にやってきた。

坊主頭の斉藤に親近感を覚えたアキラは、彼をかわいがった。

美容師同様、チャラチャラした印象を与える営業マンが多い中、

学生時代、野球を続けてきた彼は上下関係を重んじ、

挨拶がしっかりできる明るく爽やかな青年だった。

よく飯を食べに出かけたり、酒を飲みにいったりした。

仕事、プライベートなど色々な相談にも乗った。

「タケシ、ご無沙汰したな」

彼には何の連絡もしないで申し訳なく感じていた。

「オレ、店だしたんだ」

「アキラさん宛にビューティーショーのチケットを送ったと会社で

耳にしたので、そろそろかなって思っていました」

斉藤自身、連絡して良いものかずっと迷っていた。

アキラの噂は斉藤にも当然聞こえていた。

そっとしておく事がアキラに対しての礼儀のようにも感じた。

「住所教えてもらえますか？」

新しい住所と新しい店の名”アンダーグラウンド”を告げた。

「明日伺います」

斉藤は、アキラの声が思ったより元気そうなので安心した。

20:00の閉店時間を見計らい、村上 香は”アンダーグラウンド”を訪ねた。

店の様子を耐火煉瓦が敷かれた階段の途中でうかがった。

まだ接客中だったアキラの姿が見える。

エントランスで待つ事にした。

大きなガーデンパラソルの下、テーブルと2つの椅子が置かれている。

そのうちの1つにすわり原稿をチェックしながら、仕事が終わるのを待つことにした。

9月も末、日が沈むと気温が少々下がる。

夜は少し涼しさを感じさせる。

30分程で最終のお客様だと思われる30代の女性が店から出てきた。

村上は椅子から立ち上がり、頭を下げ客を見送った。

「なんだ来てたのか」

明るい店内からエントランスをみても外の景色は見えづらい。

「中で待てば良かったのに」

村上はチェックしていた書類をしまった。

「ここ気持ちいいんですよ、なんだかとってもお気に入りなんです」

アキラは反響、予約状況を報告した。

出だしは好調だ。

これで少しずつではあるが負債を返済できそうだ。

Episode 9 悪戦苦闘(7)

朝晩、体を感じる程涼しさが増した。

ここ数日間、植木への水やりをサボっている。

水分を欲しているに違いない。

晴れの日が続き、緑色がより鮮やかになっていく。

水やりを始めしばらくした頃、外階段を降りてくる斉藤の姿が見えた。

今でも引き締まった180cm超の体系は、

みるからにスポーツで鍛えあげた健康体そのものだ。

いい感じに日焼けした顔や、シャツから覗く腕が、

今でも太陽の下で頻繁に体を動かしている事を表している。

「おはようございます」

階段を降りきったところで足を止めた斉藤は、坊主頭をペコリとさげた。

「元氣そうだな、タケシ」

「アキラさんこそ、元氣そうでよかったです」

アキラの姿を見て斉藤はホツとした。

またこうして店を営業できたのだから、

今更過去のことに触れるのは何の意味も無いと感じた。

「タケシ、相談があるんだ」

「.....」

「材料卸して欲しいんだが」

何の問題も無い。

もちろんそのつもりで来たのだから。

斉藤には断る理由は特に見つからない。

ただ、担当地域ではないので少々厄介ではあるが。

その辺りは、発送の担当者にうまく動いてもらえばいい。

都合のいい事に、その部署の責任者は高校生時代の野球部の先輩だ。

融通は利く。

「少量だ、以前のような数は発注できない」

しかも自転車操業だ、予約をもらってはいるが何の保証もない。

「水臭いじゃないですか、力にならせてください」

「こんな時ばかり申し訳ない」

アキラは頭を深々と下げた。

そんな事をさせる自分の方が申し訳ないと斉藤は思った。

「頭をあげてください、アキラさん」

タケシには迷惑をかけられない。

しかし、今はどうする事もできない。

頼るしか方法がなかった。

「必要な物言ってください、後はこっちでなんとかします」

言葉に甘え、材料をリストアップし彼に渡した。

斉藤は、携帯ですぐに商材を手配した。

翌朝、材料が届いた。

当面の予約はこなせる。

「タケシ、助かるよ」

そう電話を入れた。

「また、たくさん稼いでください」

「ありがとうございます」

最後のお客様が帰られた。

今日も1日よく働いた。

レジにある現金は、明日にはどこかの口座に振り込まれ、消える。

当分こんなペースが続きそうだ。

電話が鳴った。

「アンダーグラウンドです」

優子の声が聞こえてきた。

Episode 10 2人の時間(1)

いつ聞いてもホツとする。

「チヨット・ペツパーみたよ」

情報誌への掲載、活用を後押ししてくれたのも優子だった。

「いい感じだね」

予約も順調に伸びていた。

「ありがとう、何とか手応えは感じてる」

「忙しくなるね」

「だと良いんだけど」

優子自身も予約を入れたかったのだが、遠慮した。

「お願いしてた休みはとれたのかな」

その返事を伝える為に電話をしたのに、情報誌の成果が気になってしょうがない。

けして安いものではない。

結構な額の投資だし。

薦めた自分としては、知らん顔はしてられない。

バーベキューの時、美保子から色々な事もきいた。

大変だったらしい事は少なからず耳に入ってはきていた。

どれも噂の域を出ない話題だったので、気には留めていなかったのだが。

「詳しくは本人に聞いて」

そういつて、美保子詳しくは話してくれなかった。

少しでもアキラの力になりたかった。

「あつ、肝心なこと忘れた」

優子は電話の向こうで舌をだしておどけた。

「火曜日休みとれたよ、来週だけど」

「そう、よかった、食事いこうよ」

「うん、いこう」

これで1週間はがんばれる。

遠足を前にした小学生のようになかなか寝付けない。まだ片付けのできてない部屋のベッドに入ったのはいいが、明日の事を考えると目が冴える。着ていく服を一度は決めた。

しかし、目を閉じてデートを想像するとやはりどこか違和感がある。彼女の当日の服装を想像すると、再び起き上がり、また服を選び直す。何度かそれを繰り返した。

優子も同様であった。

特に顔のお手入れには気を使う。眉をキレイに整え、リフト効果のあるパックをし、たっぷり美容液も使用した。しっかりと保湿も抜かりない。

当然、服はラフなアキラのスタイルに浮かないようデニムを中心に考える。

Tシャツを何枚か選んでは見たが、最後の一枚が決まらない。下着も一応、万が一を考え勝負下着を選ぶ。

もし下着を見せる事があつたとつして、あまり派手すぎて、期待感が満万な印象を与え、変に誤解されても困る。

飢えている女だと思われるのもいやだ。

そんな事を考え始めたら寝る気になれなかった。

寝不足は、肌には良い事とはいえないのに。

「こんなことでは、エステイションだなんていえないわ」
迷いながらもベッドに入った。

約束の10:00何秒も変わらない時間に着いた。
来客用の駐車場から電話をいれてみる。

「着いたよ」

「ごめん、まだ洗濯物干し終わってないんだ」

「大丈夫だよ、ゆっくり干して待ってるから」

優子から思わぬ答えが返ってきた。

「上がってきて、ここで待てて、コーヒー入れてるから」

「お邪魔していいの」

「もちろん、嫌でなければ」

アキラは急に緊張し始めた。

Episode 10 2人の時間(2)

オートロックのボタンの数字、部屋番号703を押した。

「今開けます」

小さなスピーカーから声がした。

入り口の施錠が外れ自動ドアが左にスライドして開く。

エレベーターで7Fまであがる。

建物が口の字構造をしていて、中央部分が1階から屋上まで吹き抜けになっている。

エレベーターを降り、半時計回りに歩き3件目の扉の前に立った。

そこは口の字の右上の角に当る場所。

部屋の向きは東南東だろうか。

呼び鈴を押す。

「開いてるわよ」

インターホンから優子の声が聞こえた。

玄関に入ると、焚いていたお香の香に混じって、コーヒーのいい匂いがした。

ライオンコーヒー、フロステイ・バニラフレーバーだ。

部屋は全体にアジアンテイストでまとめられていた。

バンブーを部分的に配した家具達で統一され、落ち着いた感じを与える。

天井から下がるランプ達も、アンティークでシンプルなものを選んで
いるようだ。

ダイニングにあるテーブルとセットでデザインされた椅子に掛ける
よう勧められる。

「落ち着くね」

優子は返事の代わりに、最高の笑顔で応えた。

サイフォンからアルコールランプを外し、蓋をして火を消す。

ほんの少しアルコール特有の匂いがただよう。

温度が下がると、下段のフラスコへコーヒー色に染まった飲み物が落ちる。

アキラには違和感がある、上品なカップに落としたてのコーヒーを注いだ。

以前言っていた栗の渋皮煮が2個、小鉢に入れて一緒に出される。

「味見してみて」

小さなホークで差し、口に運ぶ。

「おいしい」

栗の味付けは、甘すぎずちょうどいい。

特にコーヒーに良く合った。

「うーん、何個でも食べれそうだ」

「よかった、沢山作ったから今度持つてくね」

「それはうれしい、ありがとう」

優子は洗濯物を干すためにベランダにでる。

その姿をアキラは目で追った。

その視線を感じたのか、パンティーの端を一方を物干の洗濯バサミに挟む途中でこちらを見た。

下を向きながらアキラから見えにくくなるようレースのカーテンを引く。

ベランダから吹き込む心地いい風がカーテンを静かに揺らした。

優子は飲み終わったカップアンドソーサーを、キッチンのシンクで洗う。

そのエプロンを着けてる後ろ姿がたまらない。

抱きしめたい衝動をアキラは必死に抑えた。

優子は、そんな視線を背に感じ、高揚する自分の気持ちを楽しんだ。こんな気持ちになったのは、初めてだった。

洗い物の手を止めアキラの方を振り向いた。

「誤解しないでね、誰でも気軽に家にあげるわけじゃないからね」

「わかってるよ」

Episode 10 2人の時間(3)

人付き合いが下手な事はよくわかっている。

そんな不器用なところも魅力の一つだ。

実際、優子はママ友達ですらあまり家に呼ぶ事はない。

ただらだと世間話や、噂話を好んでするタイプでもない。

そういう時間の使い方は最も苦手な部類だ。

「また来てもいいかな」

「来てくれるの、うれしい」

そういつて、化粧を直しにドレッサーが置いてある別の部屋に消えた。

アキラの着ているものが予想と違わなくてホッとした。

部屋着から用意していた服に着替えを済ます。

靴箱から黄色を基調に、オレンジのナイキのトレードマークが格好いいコルテツツを出した。

アキラもうすい水色に黄色のマークのコルテツツだった。

2人はそんな偶然に驚いた。

どちらの靴も、デニムによく似合った。

玄関から2人が一緒に出て、優子が鍵を掛ける。

こんな場面を何度となく想像をした。

それがたった今、現実となった。

こんなに早く、しかも突然に。

横浜方面への国道16号は、246号と交わる部分が渋滞している。

構造上の問題と、交通量の関係で当然起こりえる仕組みになっているといえた。

交通量の多い大きな国道同士が混じり合ってる。

立体交差にでもしない限り、解消する事はないだろう。

10月のこの時期の日差しは、涼しくなったとはいえガラスを通して車内の温度を上昇させる。

エア・コンディショナーは、そんな車内の環境をも快適な温度に保ってくれる。

しかし、それには頼らずサイドウィンドウを下ろし季節の風を感じて走るのが気持ちいい。

渋滞の排ガスがその感じを半減させてしまっただが。

6連奏のCDチェンジャーが2枚目のCDに入れ変わる。

ドナルド・フエイゲンのThe Nightflyが流れてくる。

湾岸線を走り、13号地で高速道路から一般道へ。

お台場海浜公園の駐車場にへ車を入れ停める。

平日の駐車場はガラガラで、何処に停めても問題ない。

貸し切りと言うのは大げさだが、それくらいに空いている。

海の匂いがかすかにするが、あまり良い香とはお世辞にも言えない。

潮の香りとは言いがたかった。

大きなRを描くように設計された人造の砂浜に沿うように、遊歩道ができています。

歩道を船の科学館の方へ向かって歩き始めた。

「お台場へは良くくるの」

アキラは道を良く知っている。

道に迷う事が殆ど無い。

アルバイトで渡瀬に同乗し色々なところへいった。

一度訪れたところへの道順は、余程の事が無い限り覚えていて。

それはチョットした特技なのかもしれない。

優子はお台場に初めて訪れた。

「こんなにたくさん建物が建つ前には良く来たかな」

「だれと、他の女の子とのデートで？」

「以前も誰かを連れてきたのかと疑う。」

「ははあ」

男ばかり数人で、数台の車を走らせてきた。
長い直線があり、0 - 400mの違法レースをしたり、
公園でスケートボードをしたりした。

Episode 10 2人の時間(4)

フォルクスワーゲン社、ベージュと濃いブラウンのツートンカラーにペイントされた、

タイプ？をカスタムしたおしゃれなホットドック屋”プラット・フォー”の常連でもあった。

チリドッグが実に美味しく、刻んだハラペーニョと少し大きめなピクルスの組み合わせが絶妙なのだ。

オーナーの彼は、店を持つ事が夢だと語っていた。

お互いに将来の独立像や人生観、自分たちの未来についてよく話をしたものだ。

スケートボードで無理をしてバランスを崩し、

アスファルトにヘッドスライディングをして顔半分の皮が剥け、重症だったイケメン良太の話や、

公園でイチャついてるカップルを、黒ずくめの服を着て覗きをしている奴を追いかけ回したり。

そんな過去の思い出を優子に聞かせながら歩いた。

アキラは自身の緊張を和らげようと夢中で話をした。

「歩くの早いよ」

アキラが着ている白い長袖のワッフルTシャツの肘あたりをつまんだ。

「あつ、ごめん」

アキラはしばらく優子の目をみた。

そしてそっと手を握った。

優子が強く握り返してきた。

2人はゆっくりと歩き始めた。

アキラは再会した幕張での出来事を思った。

優子の手の感触を思い出し微笑んだ。

「やっと触れてくれたね」

優子は下を向きながらつぶやいた。

確かによく考えてみると、優子からアキラに触れたことは何度となくあった。

アキラの方から触れたのは、これが2度目。

渡瀬さんのところでしたバーベキューでのツーショット写真。

その時、優子の肩に腕をまわした時だった。

それ以来の事である。

明るいうちから手をつないで歩く事に慣れていないアキラは、少し照れくさかった。

他人の目が気になり、うつむき加減に歩く。

「照れてるの」

いつも偉そうに、幅の広い肩と厚い胸を張って歩くアキラの姿が好きだった優子は、

肩を丸めうつむき加減に歩く彼を見てそう感じた。

「誰も他人の事なんか気にしてないわ」

たしかに、言われてみれば回りにいる人達は2人の世界を楽しんでいる連中ばかりだ。

優子はアキラの坊主頭をなでた。

気持ちのよい髪感触が掌全体に残った。

Episode 10 2人の時間(5)

デックス東京ビーチのウッドデッキから見るレインボウブリッジ周辺の景色は、

まるでそこだけが異国のよう。

しばらく眺めながらデッキを歩く。

携帯電話にカメラ機能が追加され、

景色に携帯のレンズを向ける光景が目立つ。

電話は元来通話をするもの、何でも多機能にすれば良いというものではない。

カメラに興味のあるアキラには、

携帯がなぜカメラを兼ねる必要があるのか理解出来なかった。

シャッタースピードや露出、絞りを駆使して被写体をフィルムに焼き付け、

現像に出し、出来上がりを楽しみに待つ。

それがステイル写真の楽しみであるはずなのに。

とても理解出来ない。

そう言うアキラも、後に優子と一緒に携帯電話の画像に収まる事になるのだが。

建物の中に入り洋服を見てまわる。

彼女のスタイル、イメージ、好きな色等好みを知るのにとっても参考になった。

試着の感想を聞かれても、困る事は特に無い。

アキラのイメージと、優子のイメージとにあまり誤差なく、違和感を感じない。

自分の考えを無理に変え、相手に合わせる事をしなくていい。

好みが違う女性との買物物は実に疲れる。

彼女はそんな事をまったく感じさせないと言って良かった。

アキラはニットの帽子を探していた。

優子もアキラが感じたのと同じ感覚で買い物につき合った。他人の物を選ぶ事の楽しさを久しぶりに味わっている。

『グーツ』アキラの腹部が大きな音で鳴いた。

「お腹空いたね」

優子はアキラの腹の虫の鳴き声が聞こえてきた周辺をなでた。

「なにか美味しい物を食べよう」

デックス東京ビーチの西側の外れに、以前から気になっている店がある。

アキラはそこを思い浮かべた。

「ユウちゃんに食べさせたい物がある」

「なに、楽しみ」

「もし、嫌いならハッキリ言ってね」

少し歩いてお目当ての店を目指した。

ウィンドウにディスプレイしてある、サンプルのパスタの中の一つを指差した。

「あれ」

優子にはっこり微笑んだ。

「おいしそう」

何人が友達を誘ってはみたのだが、すべてに断られた。

アキラはいつかだれかと食べたいと思っていた。

好みの合う誰かと。

この店の特徴で売りに一つである、大皿に3人前くらいの量で出される。

一人では到底無理であった。

「わたし、こういうの大好きよ」

「入ってみる」

「うん」

優子は即答だった。

店内はさほど凝った造りではないが、シンプルで清潔感があり好感がもてる。

モスグリーンの黒板に手書きでお薦めのパスタやデザート絵が、色とりどりのチョークで描かれている。

それが目を引いた。

屋外のデッキ上にあるオープンテラスには一組の年配ご夫婦が、大型犬を連れ食事をしている。

よく教育されているのである。うー、ゴールデンレトリバーは、腹這いになりおとなしく待っている。

時折、ご夫婦に視線をむける。

2人の会話が理解できているのか、その都度表情を変えるようにもみえる。

Episode 10 2人の時間(6)

「食べ過ぎちゃった」

優子は美味しそうにたべる。

実に気持ちのよい食べ方をする。

「アキラくんは嫌いな食べ物あるの」

「特に無いかな」

「わたしも特に無いわ」

一緒に食事をするならこういう子がいい。

好き嫌いを言つて品を選ぶのに困る、また時間が掛かり過ぎるようでは、

楽しい食事とは言えないだろうし。

注文した物を残す子もいただけない。

一生つき合つていく欲の一つなのだから、楽しい方が良くに決まってる。

食後のデザートまでしつかり食べた。

様々な欲を満たし、通常の生活へ向かつて車を走らせる。

行きの車中とは明らかに違った。

アキラと優子はお互いの手の温もりを感じながら過ごす。

車中の広さがこんなにも不自由だと感じたのは初めてだった。

2m近い車幅のカーゴヴァンの運転席と助手席の間にある、

ウォークスルー部分が2人の距離をとても大きなものだと思わせた。

学童から帰ってくる2人の子より先に帰り着きたい優子ではあったが、

残り少ない時間を惜しむように、

アキラの右腕に自分の利き腕の左側を絡め脈を感じ取っていた。

2人の心音が重なり合い、エンジンの振動と同化する。

優子はこんなに心地いいドライブを知らない。

子供達に遅れること無く家にたどり着いた。

後部座席のスライドドアを開け、荷物を取り出す。

「部屋まで運ぼうか」

「本当、助かるわ」

然程量が多いわけではないが、駐車場で別れるを言うのは淋しすぎる。

オートロックのボードに鍵を差し、スライドドアを開く。

706のドアを引き、アキラが先に玄関に入った。

框の部分に荷物を置く。

優子が後ろ手に扉を閉めた。

同時にうす暗くなった玄関でアキラは優子を引き寄せた。

優子はアキラの胸に顔を埋め、大きく息を吸い込む。

アキラの匂いを肺一杯に満たした。

上を見上げた優子の唇にアキラは唇を重ねる。

2りの我慢が限界を超え、激しく舌を求め合った。

再び優子は厚い胸に顔を埋め、アキラのTシャツをうれし涙で濡らした。

18歳、進路を決めなければならぬ時期がきた。将来について、具体的な考えがまとまらず。

何処へ進めば良いのか解らないでいた。

高校生活はかなりのヤンチャをして過ごした。

他校の生徒とけんかをする日々。

生傷が絶える事が無い程に。

その頃渡瀬と出会が色々ときアキラを救うこととなる。

学校のカリキュラムでは学べない事を教わった。

とても普通ではない生活レベルでの環境も味わえた。

温泉付きの別荘、高級車でのドライブ、贅沢な食事。

すべては借り物やお呼ばれではあったのだが。

渡瀬と取引のある顧客のほとんどが、何処かはこの役員様だった。

渡瀬と美保子との、キュービット役も果たす。

2人はアキラと家族の一員のように接してくれた。

その関係は今でも変わりなく続いている。

さすがに3年生になる頃には周りも落ち着きだし、

アキラ本人も少しずつではあるが、

未来の自分像を考えだした。

そんなアキラの迷いを消し去る決め手となる言葉がある。

それは現在でもアキラの人生においてのポリシーとでも言うべきも

のなのかもしれない。

「メザシの頭、クジラのしっぽ」

母さんが言った一言。

男が仕事に関わる方法として、大きく分けると2通りの考えがある。メザシとクジラは会社の大きさを表す。

クジラの様な大きな会社のシツポで終わるか。
メザシのように小さいけど会社の先頭で頭を張るか。
もちろん、クジラの頭になれば一番良いのだが。
アキラにそんな甲斐性はおそくなさそうだった。
だったら、小さくてもいい父の様な頭を目指せと。
その言葉で覚悟は決まった。
父さんと同じ道を選ぶ事を選んだのだ。

美容師の技術を勉強する事は毎回新鮮な驚と楽しさで満ちていた。
鋏の入れ方、カットの仕方、髪の手まり方、流れ方が変わった。
パーマをかけるため、ロッドを巻くワインディングやカラーリング
については特別、興味を覚えた。

特にワインディングは、短い時間でしかもキレイに巻く。
それを別の生徒達と競った。

反復練習で、タイムがどんどん短縮する。
スポーツのように楽しめた。

生徒の年齢も様々、出身地も色々。
そんな人達と一緒に授業を受けることや交流を持つ事は、日々とて
も興味深い。

時に4年の歳の差は、まだ様々な人生経験の少ない年下の子に対し、
”教える”ということの難しさ、大変さも体験できた。

特に女性と接することの多い職種だけに、
女生徒の多い教室は、その後の人間関係の対応に貴重な資料となっ
た。

Episode 11 アキラ(2)

83

アキラの1日は風呂掃除から始まる。

20歳になって初めて親元を離れ、住み込みで働き始めた。ここ逗子を選んだのは、海が近く、仕事の前に波乗りができるから。そんな考えが甘いという事は、すぐに思い知らされた。

6:00起床。

風呂の掃除が終わると、

前日、閉店時に洗濯機に入れ洗い終わったタオルを3階のテラスに干す。

洗い物を取り出し空になった、コインランドリーに置いてある様な大きなドラム式の洗濯機に、

脱衣場に置いてあるカゴの中から先輩従業員達の洗濯物、

洗剤、柔軟剤を入れスイッチを押す。

その洗濯に一つ、悩みがあった。

「ブラとパンティーは洗濯ネットをお願いね」

そんな事を言うオーナーの妻、高野 幸子の下着も洗わなければいけないことだった。

若いアキラである。

多感な時期でもあり、よからぬ妄想をしてしまうのも致し方ない。

店に置いてある店販用のスタイリング剤、シャンプー、コンディショナーのボトルを拭く。

店内がよく見える大きなウィンドウガラスを水で濡らし、ゴムベラで水気を取り乾拭きぞうきんを使い仕上げる。

8:00には朝食の出来上がりを見計らい、男性の先輩達を起こしに部屋へ行く。

その頃には、女性の先輩達も食卓につき始める。

先輩とは言っても、15歳でこの業界に見習いとして入り3年経験で18歳の、

アキラより2歳年下が3名、17歳が4名、16歳が6名。本店の福店長は20歳で同い年の女性が務める。

それに本店の店長が23歳の女性、支店の店長が24歳の男性、副店長が23歳の女性、計17名が働く。

9:00開店。

開店30分前、同期の16歳、館向 愛も朝のノルマを終え、支店から自転車を飛ばし本店までやって来る。

30分足らずで、食事を済ませ、再び支店まで戻らなければならぬ。

彼女の条件の方が、アキラより大変そうだ。

福島県出身の愛は、同じく美容師の6歳離れた姉がいる。

愛は150cm程と、あまり身長は大きくはないが、その根性は見上げたものだ。

可愛らしく素直な彼女は、たちまち男性の先輩達の心をつかむ。

そんな彼女は当然、女性の先輩のやつかみを買う。

かなり陰湿な嫌がらせを受ける事さえあった。

愛は持ち前の明るさと忍耐強さでそれらを凌いだ。

姉の館向 舞が美容学校の学費のすべてを負担し、

卒業まで一緒に暮らし生活の面倒もみた。

そんな姉に報いる為にも負けるわけにはいかない。

大好きで素敵な姉みたいな美容師になる事が目標だった。

愛の頑張りには、アキラにとって最高の刺激となっていた。

Episode 11 アキラ(3)

アキラにも当然だが、嫌がらせはあった。しかし、彼はそれを力でねじ伏せようとした。

近くの河原で乱闘騒ぎを起こし、先輩スタッフの1人を川に放り込んだ。

何かとトラブルを起こす主犯格、山田 良。

彼の母親はかなりのやり手で、多くの支店を持ち、美容業界でも少しは名が通っているようだった。

彼が金槌で泳げない事は前から知っていた。

乱闘の場に河原を選んだ理由もそこにあっただ。

水深は大人の腰の高さほど。

危険のない程度に溺れさせておいた。

「たいした深さじゃない、助けてやれよ」

その光景を見ていた別のスタッフ、山田の取り巻きの様な3人が川に入り、

パニックを起こしている彼を押さえつけ、河から引きずりだした。事件以来アキラに対して、直接的な嫌がらせはなくなった。

午後の暇な時間に乾いた洗濯物を取り込み、たたんだりアイロンがけをしたりしていた。

オーナーの妻、幸子が部屋の入り口に立っている。

品の良い香水の香が部屋を満たす。

「力で抑えても何の解決にはならないわよ、いつまでも下着洗っていないで、技術で見返してごらんなさい」

それだけ言い残すと、部屋を出た。

おっしゃる通りである、返す言葉も無い。

タオルをたたみながら、一番手っ取り早く見返す方法、幸子を納得させる方法は何かを考えた。

間もなく閉店時間をむかえる。

先輩スタッフは、食事をし各自部屋へと消える。

アキラは閉店後の後片付けを始めた。

耳にインナーヘッドフォンを付け、MDの再生ボタンを押す。

ホール・アンド・オーツを聴きながら鏡を拭く。

シャンプールボールを洗い、椅子に着いた毛を払い落とし、椅子を拭く。

使用済みのタオルを洗濯機に入れまわす。

床に掃除機を掛けて終了となる。

それらを終えた後夕食をとる。

「ごちそうさま」

食器を流しの置き、水に浸す。

「アキラくんは、いつも残さずキレイに食べてくれるね」

「食べ盛りですから」

幸子の手料理はいつも美味しい。

アキラはシンクに溜まっている洗い物をしながらそう言いかけたがやめた。

22:00を過ぎた頃、アキラの一日が終わる。

その後の時間、無許可の外出をしない限り自由にしている。

アキラは閉店後の自由時間にウィッグを使いワインディングの練習をし始めた。

毎日それを繰り返した。

スタッフの誰よりも早く、キレイにロッドを巻く為に。

最近、愛がその練習に加わった。

ライバルがいると上達も早い。

Episode 11 アキラ(4)

目指すは、1年目の新米美容師が競い合うワインディングコンテスト。

しかも全国大会を目指す。

年に1度開かれる美容師の競技会の1部門だ。

63名が出場した逗子の地区予選は、

アキラも愛も他を寄せ付けないレベルの高さで通過した。

高野 進がオーナーの美容室”オアシス”からここ10年程、

全国はおろか神奈川大会でさえ上位入賞者を出していない。

久しぶりに全国でも入賞可能だと言われている2名がいる事で、

高野は鼻が高々だった。

最近、オーナーの2人に接する態度は誰がみても明らかに違った。それでもアキラは相変わらず下着を洗ってる事に変わりがないのだが。

いつものように洗濯物をたたんでいた。

幸子がアキラの横に座る。

「やるじゃない」

一緒にたたむのを手伝ってくれた。

それから毎日、幸子はやってきた。

それが日課になった。

神奈川大会が始まった。

郵便貯金ホールの床にはグリーンの養生シートが敷き詰められ、その上には簡易テーブルが並べられている。

自分のエントリールンバーが貼られている場所にクランプを取り付け、

そこにウィッグをセットし、あらかじめ巻き易いように髪をブロッッキングしておく。

開始時間が迫ってくると、

アキラは久しぶりに湧いてくる緊張感を味わった。

やはり、人間には適度な刺激を感じながら生活する事が必要なのかもしれない。

ただ何となく時間をやり過ぎしがちだ。

ゆるゆるな生活も嫌いじゃないのだが。

周りの雑音を消す為に、目を閉じU2の曲を思い浮かべた。

リングゴームを手にすると、不思議と冷静になれた。

出来上がりのイメージが創造出来てくる。

スタートの合図で競技は始まった。

指先に新規を集合させると、意外に平常心でいられる。

最後の一本に輪ゴムをかけ、リングゴームを机にそっと置いた。

神奈川大会の結果は、アキラが優勝、愛が2位。

”オアシス”の2名が1、2フィニッシュをきめた。

秋に大阪で行われる全国大会には、上位3名がすすむ。

オーナーのご機嫌は最高に良いことだろう。

アキラには頑張れる理由があった。

就職祝いに渡瀬の会社で廃車にする予定でいた、

営業車のカローラヴァンをもらった。

波乗りに行きたい為、実家に置いたままになっているその車をこちらに持つてくることと、

その使用を大会の結果次第では許可してくれると、オーナーが約束してくれたからだ。

もちろん、何の問題もなく許可してくれるだろう。

愛にもドライブに連れて行くことをねだられていた。

Episode 11 アキラ(5)

アキラにとって”オアシス”での立場はかなり優位になった。スタッフとの関係も変化がでてきた。

アキラとの間に会話が日が続つにつれ増していく。

店内のギスギスした空感がなくなった。

仕事のことでだけではなく、人生相談の様なものも多く聞かれる。

この流れは”オアシス”の業績にも良い影響を与えはじめた。

しかし、洗濯係に至っては今でも継続中だった。

後輩ができるまでは続けなくてはいけないらしい。

反面、愛の立場はいつそう厳しくなっていくたようだ。

店は異常な程忙しい。

朝、起きるのがかなり辛くなってきていた。

続けている夜の練習も「休憩」といって椅子に座ると愛共々居眠りをしてしまうありさまだ。

集中力にも欠け、イライラして愛に注意されたり、タイムが思うように伸び悩んだりもした。

昼にタオルをたたんでいる時でも、数秒記憶が飛ぶ。

ついにはうたた寝をしてしまうこともしばしば。

誰かが肩にタオルケットを掛けてくれたようだ。

ハッとして目を覚ます。

「無理しないでね」

幸子が脇でタオルをたたむのを手伝ってくれている。

「すみません、居眠りなんかして」

単純作業の繰り返しはさらに眠気を誘う。

いつしか意識が薄れ、気が付くまで幸子の桃枕で寝ていた。

夢の中では、誰かに坊主頭をなでられ、気分がとても良かった。

さらに、そこはなんともいえない大人の女性特有の香に包まれてい

た。

誰かが階段を駆け上がる足音で目が覚めた。

横に居たはずの幸子の姿は見当たらない。

今の出来事が単に夢なのかそれとも現実だったのか、アキラには定かではない。

全国大会を2週間後に控え、逗子支部の全体練習がおこなわれる。前年度、全国大会ウィンディング部門入賞者に練習をみてもうことができる。

いつもより早めに仕事からあがらせてもらい、愛を同乗させ支部長の店へ向かった。

そこには各種種目に出場を予定している選手が集まってきた。

不思議な事に女性よりも男性の方に、耳にピアスをしている者が多い。

そんな事にアキラは驚いた。

ファッションも奇抜だ。

ヘアスタイルは言うまでもなく派手である。

個性的だと言った方が良いのだろうか。

おおよそ理解の出来ない域のようにも思えたのだが。

アキラも、愛も実に地味に見える。

2人の実力は十分入賞が可能だと判断された。

規定タイムないでの出来上がりの綺麗さも申し分無い。

それぞれ3度のトライはいずれも高い次元で安定していて、

実にスムーズで美しい。

かなり良い評価を与えられた。

Episode 11 アキラ(6)

支部長の店を出る頃には23:00を過ぎていた。

「ラーメンでも食べていくか」

疲れきっていた愛もようやく笑顔を見せた。

この辺りで評判の醤油豚骨の店に行く。

こっそりしたのもたまにはいい。

深夜だというのに店内は8割がたの席が埋まっている。

食券を買う。

「麺、固めで」

珍しく愛は仕事の愚痴を色々とこぼした。

一部の先輩による嫌がらせに相当まいつているらしかった。

滅多に泣き言を言わない彼女も、余程こたえているのだろう。

「スッキリ出来るならいくらでも聞いてやるぞ」

おいしいラーメンがそんな彼女の心を少しは温める役目を果たしたのだろうか。

帰り着くまでの車内でも、彼女の愚痴はつづく。

少しだけ回り道をした。

あまり遅くなると幸子が心配するだろうから、ほとほと距離にとどめた。

愛を降ろそうと店の前に車を停めた。

疲れている愛をわざわざ駐車場から歩かせることも無いだろうと気を利かせたつもりだった。

愛は車から降りようとはしなかった。

下をうつむき大粒の涙を流した。

「かえりたくない」

先輩達のいやがらせは、頑張り屋の彼女でも堪え難いもののようにだった。

「少しだけ泣かせてください」

愛はアキラの胸に抱かれ、おもいきり泣いた。声を出して泣いた。

「ごめんなさいアキラさん、わたし先輩達には負けませんから」車を降り、しっかりと足取りで玄関に消えていった。きつと気の強い女になって行くのだろうか。

彼女の後ろ姿は、そんな事を感じさせた。

車を移動させる。

途中、自動販売機でペットボトルのお茶を買いのどの渴きを潤す。駐車場に車を止め、リクライニングさせしばらく目を閉じた。

昼間の幸子の太ももの感触が蘇る。

それを楽しみながらアキラは眠りに落ちた。

幸子が玄関の鍵を確認に降りてきた。

鍵があいていたのでロックをしチェーンをかけようとした時、通常との違いに気が付いた。

アキラの靴が見当たらない。

まだ勉強会から帰ってきていないのかとも思ったが、

一緒に行ったはずの愛の靴だけはそこにある。

気になって駐車場まで見に行った。

車内でシートにもたれたまま寝ているアキラの姿が見えた。

寝息が車の外でも伝わってくるようだ。

「風邪引かないでよ」

相当に無理をしているのだろう。

出来る事なら添い寝をして暖めてやりたかった。

起こすかとも思ったが、しばらく彼を見ていて考えを変えた。

このままそっとしておこうと。

Episode 11 アキラ(7)

全国大会が始まった。

大阪へやって来るのは初めてのことだった。

アキラは競技のテールに着く。

今までやってきたことを繰り返すだけでよかった。

何も特別なことは必要ない。

愛はアキラのことをひどく気にしている。

集中しないといけない時間なのに、どうしてもできない。

「手抜きするなよ」

大会会場に入る前、アキラに言われた。

結果は愛が健闘して3位。

しかし、表彰式では最後まで笑顔を見せることはなかった。

応援に来ていた従業員達も同様に複雑な表情をしている。

オーナーの高野だけは違っていた。

今にも踊りだしそうな位にテンションが高かった。

アキラに至っては最悪な結果だった。

この程度の出来では逗子の予選も通らない。

入賞はおろか、規定時間内に巻き終わる事さえできなかった。

大会まで5日、仕事が終わり練習をする為に1階の店に降りてきた。

なんだかいつもと感じが違うような気がした。

「愛、いるのか？」

店の入り口からは死角の部分辺りから物音が聞こえた。

「愛、いないのか？」

アキラは店に入り音がした方向に歩いていった。

愛と1年先輩の岡本 静江がそこにいた。

2人の状況は普通ではない。

変な緊張感がただよっていた。

日頃、静江は愛に対して異常な程辛くあたる。

昨夜の愛が流した涙は彼女が原因だったのかもしれない。

状況は思ったより緊迫した状態であった。

静江が愛に向かつて伸ばした右手に鉄が握られている。

「なにやってんだ」

アキラの声に冷静さを失った静江は、持っている鉄を恐怖で身動きのとれない愛に向かつて振りかざす。

それを止めようと2人の間にアキラは体を入れた。

静江は自分の腕に何かの抵抗を感じた。

アキラは右腕に違和感を覚えた。

指先を伝った血のしずくがポタポタと落ち始め、床を赤黒く染めていく。

静江はその場に座り込み、つい先程まで興奮で赤みを帯びていた体から血の気が引き、

今は顔面が蒼白で放心状態だ。

アキラは壁に作り付けた棚の扉を開けタオルを取り出すと、

傷口より心臓に近い部位にそれを巻き止血をする。

「だれか来て、だれか」

叫んでいる愛にタオルを固く締めるように頼む。

「大丈夫だ、たいしたことないから」

「奥さん、オーナー、だれかかないの」

オーナーは会合で外出中だ。

愛は顔を涙でぐちゃぐちゃにして叫んだ。

「だれかー」

彼女の震えが、傷口を押さえる手からタオルを介し伝わってくる。キッチンで明日の仕込みをしていた幸子が異変に気づいた。

「アキラくん、大丈夫」

床に座り血だらけのアキラに、

幸子は裸足のまま駆け寄り思わず後ろから抱きしめた。

Episode 11 アキラ(8)

「たいしたことないです、これくらいじゃ死なないですから」
従業員達も騒ぎを聞き集まってきた。

「救急車、店長救急車呼んで」

救急外来で大学病院に運び込まれる。

緊急オペがおこなわれた。

幸い指はすべて動くし、神経も損傷が認められない。

付き添いの幸子が、1週間後に大会が有ることを執刀するドクターに説明している。

「なんとかありませんか」

ドクターは事務的に答える。

「時間が無さ過ぎる、無理ではないでしょうか」

「そこを何とか」

解ってはいてもそう言わずにはいられなかった。

ドクターの腕にすぎり、念を押すように幸子は言う。

「お願いです何とかありませんか」

今までの頑張りを知っている。

この程度の事が、彼女にできる精一杯のことだった。

「残念ですが、本人には諦めるよう伝えてください」

術後、経過を聞かされたアキラだが、理解は出来る。

だが、やはりやりきれない。

不注意な行動だったことを後悔した。

誰もいなくなった病室で一人涙した。

ゴミ箱を蹴っ飛ばし、物に八つ当たりする。

「消灯の時間ですよ」

当直の看護師が見回りにきた。

泣いているところなど見知らぬ看護師に見られたくなくて、
ベッドに頭まで潜り込む。

鎮痛剤が効いてきたのかそのまま朝を迎えた。

翌日営業時間前、愛に電話を入れる。

ウィッグ、ロッド、霧吹き、リングゴーム、輪ゴム、ペーパー、ス
トップウォッチ。

それにMDプレイヤーを持ってきてくれるように頼んだ。

病室のベッドのパイプ部分にクランプをくくり付け、練習を再開
する。

傷口が痛んで右手に思う様な力が入らない。

ロッドが指から落ちる。

何度繰り返しても結果は同じだった。

ロッドをぶちまけたい感情にかられる、ケースに手をかけた。

同時に入り口の扉がノックされ、看護師が入ってきた。

白衣の女性が視界に入り、ケースから手を離れた。

「病室担当の大山です、検温にきました」

インナーヘッドフォンから流れる音楽に消され、大山の声はアキラ
に届いていない。

大山 真奈美はアキラの左耳からヘッドフォンを抜き取った。

「検温です」

アキラはベッドの隅に、急に力が抜けたように腰を降ろし、

体温計を受け取り、脇に挟み込む。

「美容師なんだって」

真奈美は何やらファイルに記入しながら、視線はペンの先に置きな
がら話す。

「3月に学校卒業したばかりさ」

まだ国家試験を受ける資格もない。

正確には美容師と呼べない状態である。

Episode 11 アキラ(9)

4日後には大会があること、その為の練習をしていることを話した。

「指に思うように力が入れられないんだ」

真奈美も大筋でドクターから話は聞いている。

傷を治すには諦めてもらうしかなかった。

幸子からもドクターに再三大会に出場できないか、出場できるようにならないか、

申し出があつたと聞いている。

「怪我を治すのが先決ですよ」

そんなことは当然承知している。

アキラにはどうしても出場しなければならぬ理由があつた。

「オレが出ないと、この仕事を続ける限りずっと負い目を感じ続ける事になるだろう奴がいる」

そうはさせたくなかった。

「手加減しただろう、愛」

アキラに遠慮して手を抜いたように感じた。

今日の全体のレベルに比べたら、愛が本来持っている実力で十分優勝が狙えたはずだ。

「わたしはそんなに甘くないですよ、アキラさんに遠慮する程」

目一杯強がってはみたが、正直かなり動揺していたのは事実だ。

やっぱり責任は感じてしまう。

自分のもめ事が招いた結果でもあるのだから。

今回の事件が無ければ、間違いなく優勝はアキラの物だったに違いない。

アキラとまともに戦えない時に優勝してもけして満足するわけもなかった。

無理をしたアキラの腕の具合は良くなかった。

傷口が開いて血がにじみ始めている。

病院に逆戻りだ。

そんなアキラだったが、悪い事ばかりではなかった。

入院は無理をしていた体にとって何よりの休養となった。

それともう一つ、人生を変える大きな出来事も起こりつつあった。

腕意外は健康そのもののアキラは、時間を持って余していた。

忙しくて買ったまま目も通さず置いたままになっている波乗りの雑誌や、

読みかけの小説を楽しむ時間も十分にあつた。

もちろん内蔵はすこぶる元気だ。

病院で出される食事では当然不十分であることは言うまでもない。

味に関してはお世辞にも満足いく物とは言えなかった。

その点は幸子の差し入れが胃袋を満たしてくれる。

余計に美味しく感じてしまう。

実際文句の付けようが無いのだが。

おかげで多少体が重く感じることも。

「波乗りするんだ」

つまみ食いしているところを看護士の大山 真奈美にみられた。

彼女とはそれ以来サーフィンの話題で盛り上がった。

海にもよくでかけた。

病院のベッドで2人の関係は深まった。

その後家庭を築き2人の子供を授かる事になる。

結果はそう、関係が永遠に続く事は無かったのだが。

それなりに幸せを感じていた頃は確かに存在していた。

少しずつではあるが店を続けていける自信と希望が持てるようになってきた。

リピーターも徐々に増え、インスタントラーメンが主食の生活からは脱出出来そうである。

パーマの第2液をつけ終えた時、店の電話が鳴る。

「アンダーグラウンド」です」

「Dゾーンの斉藤です」

「おー、グッドタイミングだけし、電話入れようと思ってたところだ」

「今日の午後伺います、何か必要な材料はないですか」

カラー材の番号、いつも使用するパーマ液とそれぞれの数量を伝える。

「助かるよ、タケシ」

薬液処理をする技術が増えている昨今、

薬の質にはとことんこだわっている。

もちろん仕上がりの質感も大切だ。

「順調そうですね」

斉藤は、「アンダーグラウンド」の発注数が右肩上がりに増えているのをうれしく思った。

以前から、アキラの材料に対する評価は的確で、

他店に対し、製品の説明をする時などにアキラの感想、意見はとも参考になる。

新製品が出た時などは必ずと言って良い程サンプリングをし、結果を聞いた。

「アキラさん、レポート1件お願い出来ますか」

「何社製」

「Bright社です」

Bright社へのレポートはいつも辛口だった。けして嫌いなわけではなかった。

者が悪い訳でもなかった。

むしろその逆である。

Bright社は決して大きな規模の会社ではないのだが、レポートに対して誠実に回答があり、

また、それに対してしっかりと対応してくる。

会社の利益ばかりを最優先するわけではなく、

企業理念がしっかりしていて、それが伝わってくる数少ない会社のうちの1つである。

「タケシへの協力は惜しまないつもりだ」

「ありがとうございます」

大きな体の上半身を深々と下げる。

「アキラさん、次回の講習はどうします」

申込書を兼ねた、案内をプリントした物を差し出した。

最近造ったゴム印で店名、住所、電話番号を書類に押す。

「おっ、シヤレたゴム印造りましたね」

マンホールの蓋が開いた穴から”underground”の文字が飛び出し描かれている。

アキラ自身、自慢のデザインである。

優子も褒めてくれ、出来上がりにも満足できる物であった。

つい、何処にでも押ししてしまいたい衝動に駆られると同時に、

誰かに見てもらいたかった。

Episode 12 予約(2)

「いつらしゃませ」

斉藤は入り口に立っている美しい女性に声を掛けた。

「アキラさん、私は社に戻ります」

来客だと思い店を出て行くこととする斉藤を引き止めた。

「タケシ、こちら優子さん」

良い機会だと思い斉藤に優子を紹介した。

優子は笑顔をむける。

「いつもアキラさんから話は聞いてます、あなたがタケシさんね」

少し照れながら斉藤は挨拶を交わす。

「彼女はエステティシャンなんだ」

「どつりで」

斉藤には優子の美しさの理由が理解出来た。

「帰り際に美しい女性にお会い出来、光栄です」

「あら、お上手ね、話しに聞く通りの優秀な営業マンだわ」

そう言っつて優子は頭をさげた。

優子は両手で何かを持っている。

「では失礼します」

斉藤は店を出て、階段を昇り地上に消えた。

2人はその姿を耐火煉瓦の敷き詰められたエントランスに出て見送った。

「感じの良い方ね、斉藤さんて」

弟のように可愛がった話しを聞かされた事がある。

男同士のそう言う関係ってうらやましいものだと感じた。

「何か持ってきたの？」

アキラは優子の両手に持っている物を指差した。

「アキラくん、ガスレンジはある」

「ああ、あるよ」

「お昼ご飯、まだでしょ」

優子は、持っているレジ袋の様な物を目線の高さまで持ち上げた。

「カレー作ってきたんだ、良かったら一緒に食べない」

「おっ、助かる、それならエントランスのテーブルでたべようか」

店内のら旋階段をのぼり、1階のそれほど広くはないキッチンへ優子を案内する。

アイボリーの2、5cm角のタイルが貼られたキッチンは、

アキラがD・E・Yでリフォームしたものだ。

ガスコンロは、渡瀬の現場から持ってきた業務用の4口コンロを取り付けた。

コンベックが付いたタイプだ。

男独りには大きすぎると思ったが、役に立ち時がきた。

少々古いがクリーム色した本体が、タイルとよくマッチした。

冷蔵庫もG・Eの古いタイプの物を渡瀬に探してもらった。

「アキラくん、ルーが鍋に焦げ付かないように弱火でかき回しててくれる」

優子はレタスを1枚1枚はがし洗い、カゴに入れて水気を切り、サラダを作り始めた。

レタスを敷き、春菊とパプリカ、紫色のたまねぎ、トマト、それに豆腐とアボカド。

「本当はご飯は炊きたてだといいいんだけど、今日はレンジで”チン”で許してね」

アキラは何かの懸賞で当たった圧力鍋がある事を思い出した。

結構簡単に料理が出来ると思った。

いつか料理にも挑戦しようと、とっておいたのだが、なかなか実現に至っていない。

「圧力鍋があるなら簡単にご飯もたけるよ」

「そうなんだ」

「次回は炊き方教えてあげるね」

Episode 12 予約(3)

圧力鍋は確かに美味しく炊けると言う話はきいている。
TVでも観た事がある。

少しずつではあるが自炊を始めてみようと思っていたので、
思い切って挑戦してみようと思う。

電子レンジが温め終わった事を告げるチャイムが鳴る。

熱々のご飯を取り出した優子は、大きさも形も違う2つの皿に盛り
つけた。

「食器とかも探しにいこうね」

「うん、いこう」

次回のショッピングの目的の1つが決まった。

「チョツと待ってて、すぐ戻るから」

近所の商店まで、福神漬けと蕨を買いにビーチクルーザーを走らせ
る。

ついでに氷も一袋。

買い物済ませ店に着く頃には既に配膳が済んでいた。

グリーンとオフホワイトのチェックの布が、テーブルクロスとして
敷いてある。

「素敵なクロスだね、すごく気に入ったよ」

なんだかとっても高価な印象を与えた。

ここを観た時、このテーブルクロスが優子の目に浮かんだ。

「ありがとう」

些細な事でも素直に喜んでくれるアキラの気持ちに優子にはうれし
く思える。

「簡単の物でごめんね」

手作りの昼ご飯が食べられるなんて、こんなに幸せな事は無い。

しかも最近は一瞬スタント物が多かったし、良くてほか弁だ。

アキラが席着こうと椅子を引いた。

「来週の月曜日、予約入れられるかな」

福神漬けを器に移している優子が訪ねた。

「待って」

アキラはレジが置いてある台の引き出しから、予約表が挟んである
バインダーを取り出した。

それと、2個のグラスに氷を入れ、ミネラルウォーターを注いでテ
ーブルまで持ってきた。

「あ、ごめんね、食事済んでからでもよかったね」

「午後2時以降ならOKだよ」

「よかった」

「どうしよう」

「カラーとカットお願い出来る」

予約表に優子の名を書き込んだ。

その日は閉店まで予約は入れないよう、鉛筆で薄く塗りつぶした。

「この日は1泊で子供達は学童のお泊まりキャンプがあるの」
優子は独りになる。

「夕食、一緒に作らないか」

アキラの提案に優子は賛成した。

「本当、うれしい、楽しみ」

この日の夜から、まだ片付けの終わってない部屋の整理に取りかかった。

まずはリサイクル屋でみつけた古いオーディオの配線を済ませてしまおう。

何をするのにも音楽は欠かせないから。

テレビとビデオデッキの接続もついでに終わらせる。

部屋の隅に無造作に積み上げてある段ボール箱の中から、

側面に”服”の文字が書いてある物を探し出す。

ガムテープの部分にカッターを入れ、

中からTシャツやら、下着やらを取り出す。

チエストの場所を決め、引き出ししまっていく。

冬物のトップス、厚手の物、コート類等は、当初部屋として使おうと考えていた1、5坪の部屋を、

今は材料のストック庫、兼クローゼットとして使用している所にしまおう。

2人の子供、長女の葵、長男の禅の写真は、封筒に入れドレクセルの古い机の引き出しの奥にしまっておくことにする。

感傷的になりしばらく作業の手が止まった。

変わりなく元気で過ごしているのだろうか。

母から時折、2人の話しは聞いている。

きつと背も伸びたことだろう。

ニキビ面にな悩んでいたりするのだろうか。

捨てられずにとってある雑誌を本棚に並べる。

美容の情報誌も、ファッション雑誌も同様に並べる。

CDを並べてる時に、ふと大切な事にきがつく。

もしもの時の為、天気の良い日に布団を干し、日光を沢山浴びせ紫外線消毒をし、

涎にまみれた枕カバーが変な匂いを発しないよう、
しっかり洗濯もしておかなくてはいけない。

薬局へ行つて1、避妊する用具も買い求める必要がある。

男としての責任と、エチケツトは最低限心得ていなければならない。
深夜一人にやけた顔をしながら、暴走する勝手な想像を打ち消しハ
ンディーモップで埃をとりはじめる。

そんな事をあれこれと考えながら、夜は更けていった。

日曜から月曜に日付が変わりしばらくした頃、本日のFMラジオが
放送を終了する事が告げられた。

お客様との会話がちぐはぐで噛み合わない。

今日は朝から気持ちが悪くて落ちて着きが無い。

コームを何度か落とすし、コーヒーマーカーに豆を入れ忘れたまま
スイッチを押し、

入れた水が、ただお湯に変わっただけだったり。

それをカップに入れた時、コーヒー色の液体が注がれるはずが、無
色のままで間違えに気づく。

「香がしない訳だ」

苦笑いするしか方法が見つからない。

タイマーをセットし忘れたり。

「なんだかいつもより熱くない？」

遠赤外線促進器の温度設定の間違えをお客様に指摘されたり。

最低の日だった。

そう。優子が来るまでは。

Episode 12 予約(5)

似合うスタイルをずっと考えていた。

いくつか選択した物の中からは、スタイルブックを見せながら具体的にイメージを伝えた。

数ページめくりはしたが、優子の希望は決まっていたようで、あまり本の中のスタイルには興味を示さなかった。

「お任せで」

そうだけ言って鏡越しに笑ってみせる。

「やっと思いが叶うわ」

悪戯っぽく言う。

それはアキラにも同じ事が言えた。

優子はヘアスタイルを変える事がけして嫌いな訳ではない。単に美容室に出かけていく事が苦手なだけだった。

忙しさも確かにあるのだが、何ヶ月も美容室に行っていない。前回はいつ頃行ったのか思い出せない位に日が経っている。

「お客様、シャンプーいたします」

首にタオルとシャンプークロスを巻く。

タオルと首の間に人差し指を差し込み、首に沿って円を描くように指を移動させ、

クロスの締め付けがキツ過ぎないかをチェックする。

「少し倒します」

頸部から後頭部にかけて、手を添え支えながら背もたれを倒す。シャンプーボールに首が触れ、苦しくないところで止める。

「首は痛くない？」

「はい」

優子は頭を軽く左右に動かし、位置を決め目を閉じる。

アキラはシャワーヘッドに手をかけ手前に引き、

ノブをまわし水を出す。

お湯の温度はサーモスタットを經由し調節しているので、一定以上の温度に上がる事は無い。

適温になるまで、しばらく捨て水をする。

優子は自身の額の右側部分にシャワーが当たる事が苦手だった。

耳の内部がなんだかくすぐつたく、背筋がゾクゾクする。

シャンプーを担当するのが男性スタッフだったりすると、

その我慢は時として苦痛だったりする程だ。

それもまた、美容室が苦手な理由の1つだったりする。

アキラは、シャワーのお湯を額の生え際に沿って移動させる。

耳に入らないよう注意を払い、側頭部を濡らす。

ネープ部分を経由して、後頭部へ移る。

シャンプーを適量掌にとり、髪に付け泡立てる。

指腹部分を使い、指の軌道が頭皮にそって離れないよう円を描く要領で、

10本の指を使い丁寧にマッサージをする。

指へ加える力は少し強めなくらいでもいい感じだ。

ゆっくり丁寧に泡をすすいでいく。

お湯の温度と、シャワーの刺激が何ともいえない。

優子はシャンプーがこんなにも気持ちの良いものだという事を初めて知る。

Episode 12 予約(6)

それどころが嫌いであつたはずのシャワーも、アキラにされると全く違う感覚を覚えた。

そんな自分に対し、驚きを感じた。

「気持ちいい」

人の感覚とは、相手によつても変わるのだと改めて思う。

タオルを頭に巻き、背もたれを起こす。

カットに必要な余計な水分を拭き取る。

ダツカールで6等分にブロッキングしていく。

首のタオルを巻き直し、カットクロスを掛け準備は整つた。

ネープ部分から少しずつ毛束をとりスライドカットをしていく。

鋏が耳元で開閉される音がリズムミカルで爽快だ。

ワルツの3拍子を奏でるように。

アキラの目つきが普段とは明らかに違う。

今は話しかけるのを遠慮した方が良いだろうか。

それほどいつもの彼とは違っている。

長さはあまり変えず、全体にラフな仕上がりにする。

特に前髪は作らず、サイドと自然なつながりが欲しい。

カットされていく毛が、フローリングの床に雪を散らしたように落ちていく。

こうしてスタイルが出来上がっていく。

カラーは優子にきつと似合うであろうオレンジベージュを選択した。

明るさのトーンはレベル9。

それを6%のオキシと1:1の割合で混合する。

もちろん言うまでもなく、スケールを使いキッチリ計量する。

マドラーを使い、丁寧に混ぜ合わせていく。

8分割したブロッキングの一山をくずし作業する。

頭皮に近い部分程、色が退色し易いため、塗布には細心の注意が必要だ。

ラップをして自然放置で30分。

タイマーをセットする。

優子の髪は特に太い方では無い。

色も比較的退色し易いと予想され、特に加温の必要は無い。

自然放置を選択するのは、髪のダメージを最小限に抑えたい理由もある。

「コーヒー入れるね」

間もなく店内に香ばしい香が広がる。

「雑誌でも持ってこようか」

優子は首を横に振った。

一連の動きをずっと目で追っていた優子は、アキラの丁寧な作業に感心した。

個々の好みがあるから何とも言えないが、こんな美容師に巡り会えたら幸せかもしれない。

出来上がりが楽しみだ。

「ねえ、アキラくん、どんな女性に対してもこんなに丁寧に髪弄るの？」

アキラは優子の変な質問に無言でいた。

その答えの代わりに、入れたてのコーヒーを差し出す。

良い香を放つのと同時に、舌に残る美味しいコーヒーが五感の一部を満たすと、

なんとなく、質問の答をごまかされてしまう。

アキラにはいつもその術中にはめられ、はぐらかされてしまっ
るように感じる。

「まあいいか」

タイマーが、所要時間の満了を告げる。

ラップを取り除き、事後処理を済ませすぎをする。

アフターシャンプーをトリートメントが終了したら仕上げに移る。タオルドライをしっかりとした後、スカルプマッサージと肩ものサージスをする。

「こんな気持ちいい事まで、他の女にもするんだ？」

無言のアキラは黙々とマッサージを続ける。

ドライヤーをセットし、

フィンガーブローのみでふんわりと乾かし終了となる。

ただそれだけで、いい感じに収まった。

カットの技術は完璧、カラーも明る過ぎず、かといって暗過ぎず綺麗に発色している。

照明が当たる部分がほんのりオレンジ色に光る。

髪を触ってビックリした。

サラサラ、ツヤツヤで質感がたまらなく心地いい。

「とっても満足です」

椅子から立ち上がった優子をアキラはそっと抱き寄せた。

優子の体温をしばらく感じていたかった。

「きれいだよ」

アキラは優子の額に唇をつけた。

「ねえ、髪を弄り終わるところして皆を抱きしめるの？」

アキラは答えの代わりに、もう一度額にキスをした。

「2人で買い出しに行こうか」

「うん」

暗くなつた遊歩道を街灯が照らしている。

近所のスーパーまで向かって歩く。

光に吸い寄せられた2匹の虫が電球の周りを飛び回っている。

「ねえ、なぜアキラくんは美容師なの？」

「なぜ？、うーん、やっぱり美容師らしくないかなオレって」

「……………」

学生時代野球や水泳と、運動馬鹿、筋肉馬鹿。

体を鍛える事が好きだった。

細身の華奢な体系の美容師が多い中で、アキラは異色の存在だ。

仕事をしていない時の彼をみて、職業を当てられる者はかなり少ないであろう。

母さんにされた、クジラとメザシの話しをしながら歩く。

しばらくすると、優子がアキラの袖をつかんだ。

「あ、ごめん、歩くの早いね」

優子の手を握り、再び歩き始める。

ゆっくりと。

「すごいねアキラくん、その道を迷わず進んだんだね」

アキラは首を横に振った。

「迷ってばかりだったさ」

「でも、お母さんて素敵な人だね」

優子は見えないでいる手に少し力を入れた。

カートを押すのはアキラが引き受ける。

メニューは、トマト味ベースの Pasta とサラダに決まった。

入り口から見て右側の列、野菜のコーナーから順に進んでいく。

ニンニク、エリンギ、しめじ、マッシュルーム、舞茸。

どうやら沢山のキノコが入った Pasta のようだ。

ホールトマト、イタリアンパセリ、太目のロング Pasta。

それにタコとセロリ。

最後に赤ワインを手に取った。

レジ袋を持たない側の手をつないで帰り道を歩く。

その道のりはアキラにとつて、そして優子にとつてもこれから何度となく往復する事になるルートだった。

途中ケーキ屋に寄り、評判のレアチーズケーキを2個、パン屋で翌朝の為にはるゆたかの食パンを買う。

道を照らす街灯の明かりの周りには、やはり虫達が戯れながら旋回を繰り返している。

片道15分程の距離は、1人だと少し長いが2人で歩くとちょうど良い。

食前の軽い運動になったのか、胃も食料を欲している。

早速料理に取りかかることにする。

今夜は長い夜になりそうだ。

そうは広くないキッチンではあるが、

渡瀬の現場から持って帰ったウッドデッキ材で造ったテーブルが置いてある。

オイルステンでマホガニー色に塗装してある。

少々重量はあるが、かなり丈夫な造りをしている。

同じ素材で2人がけのベンチも造った。

優子は自分で持参したエプロンを着け、戦闘態勢に入る。

アキラは2本のビールを冷蔵庫から出した。

「飲む？」

ビールを指差しながら優子に訪ねる。

「とつても欲しいわ」

栓を開けたコロナを1本差し出した。

ビールが乾いた喉と空っぽな胃を刺激する。

フライパンにオリーブオイルを敷き、ニンニクを潰したものと赤唐辛子をいれる。

熱がとおり香がしてきたら、それらを取り出す。

食欲をそそる、良い香がしてきた。

そこに、エリンギを4等分、シメジは小さい房に小分けして、マッシュルームは5mm厚に切り、

舞茸は食べ易い大きさに千切った物、それぞれを入れ炒める。

ホールトマト、ハーブの入ったシーズニング、それにワインを入れ数分間煮る。

「アキラくん、味見して」

ソースを木べらですくい、アキラの口に近づける。

「熱！」

トマトの酸味とキノコ特有の香が口一杯に広がる。

「うまい」

アキラは親指を立ててみせる。

サラダに使うセロリの葉の部分を別にとっておく。

筋を取って5cm位に切り縦に薄切りにする。

タコの足を茹で薄切りにする」。

「アキラくん、ドレッシング作って」

言われる通り、ボールに塩、粒こしょう、レモンの絞り汁、オリーブオイルを混ぜる。

それをタコとセロリに合える。

ロングパスタを茹で、ソースと絡め出来上がり。

完成したパスタとサラダをそれぞれ大皿に盛り、

パスタには乾燥バジルをちらし、サラダには別に取っておいたセロリの葉をのせる。

ベンチに2人並んで腰をおろし、それぞれを小皿に取り分けた。

少し冷めた方がトマトの酸味が程よく感じられ、キノコの香が贅
沢な気分させる。

あまり高価な物ではないが、甲州産の赤ワインをグラスに注ぐ。
どんなに高級なイタリアンより、超有名なワインよりも2人共にす
ると美味しく感じられる。

優子は自ら過去を話し始める。

「アキラくんにはすべてを知っていて欲しい」

学生時代のこと、結婚から離婚に至るまでのこと。

優子はあまり自分を語りたがらない。

他人の世話を焼くのはあまり好きではない、世話を焼かれるのも好
きではなかった。

しかし、アキラには話してみたくなった。

共有していて欲しかったのかもしれない。

アキラも自分の過去を話した。

多額の負債があることも洗いざらい正直に話した。

ビジネスの才があるのだと、自身高をくくっていた。

若くして一戸建てを注文建築で建て、従業員7名の美容室を経営し、
輸入車を取り回す。

もちろん遊びも色々経験した。

どこか高飛車に振る舞う態度は、世の中をナメ、物事を軽く考え、
すべてにおいて思うように事が運ぶと大きな勘違いをした。

足下をすくわれるのも、ある意味当然の成り行きだったのかもしれ
ない。

目を覚ますには、大きな足枷を与えるしか方法が無かったかのよう
だ。

色々学ぶには本当に良い時間を与えてもらったと今は思える。

優子はそんな自分へのご褒美なのか。

そんな都合の良い事を考えるのは、気持ちに余裕が持ててきたからなのか。

単なる現実逃避がしたいだけなのか。

その答えをもらえた夜だった。

「アキラくん、話してくれてありがとう、聞いてくれてありがとう」

「ユウちゃんこそ、色々ありがとう」

優子の涙をアキラはきつと忘れないだろう。

多少の酒も入り、ほろ酔い気分でお互いの価値観などを話し合った。普段あまり自分の事を話さない2人だったが、こんなにスラスラ話せてしまった事に不思議な何かを感じた。

そして、それに何の後悔も無い事を確信する。

優子がトイレに立った。

アキラは開いた皿をシンクに運んだ。

洗い物を始めようとスポンジをお湯で湿らせ、洗剤を付け泡立てた。

アキラの背中に、優子はそつと頬を寄せた。

アルコールで血行の良くなった火照った体温が伝わる。

アキラは洗い物の手を途中で止め、振り返り濡れたままの手で優子の両頬に触れ、上を向かせた。

目を閉じた優子の唇に自身の唇を重ねる。

舌と舌が何度も絡み合う。

優子の手を取り、電気の点いていない薄暗い部屋に引き入れる。

2人は共にベッドに倒れ込んだ。

正座をして30分以上が経過している。

確かに学生時代は悪さをし、学校の廊下でしばしば正座をさせられはしたが、いつになっても慣れない。

大山 真奈美の千葉の実家に挨拶にきた。

両親を目の前にして、こうして挨拶を交わしてから無言で向き合っている。

「アキラさんと言いましたっけ？足を崩して楽にしてください」
ホツとし、母喜代美のお言葉に甘えようとした。

「なんだ、真奈美の話し程根性は無いんだな」
義父、登の冷ややかな視線とあきれた声が聞こえた。

崩しかけた足を、途中でやめ組み直しもう一度正座をし直した。

「もう、アキラくんなに無理してるの？」
真奈美はつまらない意地を張り合ってる男共には、つき合っていないと言いたげな顔をした。

しばらく沈黙が続くと、突然アキラは立ち上がり部屋の隅まで後ずさり、

もう一度正座をし直し、土下座をした。

「お儀父さん、お儀母さん、どうか真奈美さんのおつき合いをお許してください」

尚も沈黙が続く。

「酒だ、酒だ、祝いだ、酒もってこい」
突然諦めたかのように義父は叫ぶ。

それからというものの、それくらい飲んでいたのか覚えていないが、どうやら交際はお許しが出たらしかった。

登は人が変わったようにアキラに優しくなった。

何かと理由をつけては呼び出した。

真奈美が仕事で都合がつかなく一緒に帰れない時でも、

アキラひとりを実家にこさせた。

ある日の事、酒を飲んで気分が良かったのか、とんでもない事を言い出した。

パンフレットをテーブルの上に置いた。

「アキラくん、私たちは君たちの近くに引っ越そうと思うがどうだろうか」

そう言つてマンションの1室の間取り図を指差した。

「そうですか、いいですね」

どうせ酔つた勢いで冗談だと思い、アキラは話しを合わせその場をやり過ごした。

数週間が過ぎ、休みの日に真奈美の住むアパートでレンタルビデオを観ながらソファで寛いでいると、玄関のチャイムが鳴った。

アキラはリモコンを手に取り、ビデオデッキに向けてボタンを押す。ブラウン管に映る”バッドボーイズ”を一時停止にする。

注文していた宅配ピザが届いたのかと思い、アキラは財布を持って応対に立った。

「随分早いな」

たいてい遅れて届く事が多いので、不審に思いながらチェーンを外しロックを回し、

ドアを開く。

アキラは固まった。

「あー、なっ何してるんですこんなところで
真奈美のご両親がそこに立っていた。

「引っ越しの挨拶じゃ」

義父、登が菓子折りを差し出し、大きな声を出しうれしそうに笑った。

「アキラくん、どうしたの？お金足りなかった？」

真奈美の足音がこちらに向かってくるのが聞こえた。

Episode 13 義理母(2)

「お父さん、お母さんまで、何してるの？」

真奈美の驚き様を見ると、どうやら何も知らされてないらしい。受け取った引越しの挨拶周りの菓子折りをみせても、反応がないのも当然の事かもしれない。

「引越しの挨拶じゃ」

そう繰り返す義父の後ろで、困った顔をした義母が時々咳はするが、黙って立っている。

きつと、この義父は言い出したら何を言っても無駄なのだろう。他の人が言う事など、何も聞きはしないのではないだろうか。

「風邪でもひいた？」

義母はたびたび咳をした。

「うーん、薬が切れたのかも」

何か薬を飲んでいるなんてことは、初めて真奈美は聞かされた。仕事柄心配になった。

「寄ってけば」

「何も荷物に手をつけてない、やる事が多いから帰る」

帰りかけた義父は、足を止め振り返り言った。

「これからはいつでも寄ってくれていいんだぞ、アキラくん」

真奈美だけが引越しの事を知らなかったような状況になり、アキラはどのような態度をとったら良いのか困った。

「アキラくん、もしかして知ってたの？」

「……」

自分だけ除け者にされたように感じた真奈美は、急に不機嫌になった。

「酒の席での冗談かと思って」

言い訳をしたが、何を言っても無駄のようだ。

そう言うところはきつと父親譲りなのだろう。

2人仲良くビデオなど鑑賞していられる雰囲気ではなくなった。こんな時の彼女は放っておくに限る。

アキラは読みかけの小説を出し、その世界に入っていく。部屋はとても静か。

しばらくすると、拗ねてる事に飽きたのが、真奈美はちょっかいを出してきた。

そうやら構って欲しいらしい。

そんな真奈美をうつ伏せに寝かせると、アキラはマッサージを始めた。

こうすると体も心もほぐれていく。

「ねえ、どうするの近くに引越してきちゃって」

「いいじゃないか、遠くまで帰る必要がなくなるし」

馬乗りになりながらアキラは答えた。

義母さんの料理は食べれるし、1人呼び出されても近くて世話が無い。

「妊娠したり、出産したり、真奈美自身も楽じゃないのか」

「え、じゃあ子供つくってもいいの？」

真奈美は無理な体勢で振り向いた。

マッサージの手に力を入れる。

「何か問題ある？」

真奈美は仰向けになり、真顔になった。

「アキラくん、それって結婚してもいいってこと？」

「それも何か問題ある？」

そう答えを聞いた真奈美の機嫌はすこぶる良くなった。マッサージの手は、いつしか別の部分を刺激していた。

じっくり時間を掛け、甘美の世界へ連れて行く。

外はまだ日が高かった。

Episode 13 義理母(3)

クアラルンプールを経由するシンガポール発、成田行きのマレーシア航空505便は、

定刻通り20:10に到着すると機内アナウンスがあった。

成田上空の天候は晴れ。

楽しかった4泊の新婚旅行はもう間もなく終わる。

明日から通常の生活に戻っていく。

アキラは異例の早さで店長までたどり着いた。

5日間、店を留守にするという事店にとってはかなりに痛手であった。

しかし、そうたびたびある事でもない、日頃の頑張りもありオーナーは快く旅行へと送り出してくれた。

ご祝儀も弾んでくれ、道中なにか嫌な事でも起こるのでは。

などと思える程、破格の金額をいただいた。

その分、お土産を選ぶことが大変な作業になったことは、皮肉な事ではあるが。

真奈美も慢性的な看護師不足に喘いでいる業界にあって、長期休暇はシフトを組む側にとっても、

もちろん現場にとっても、ありがたい事ではない。

そうはいつでも希望をだされた有休を認めないわけにはいかない。

休暇明けの出勤は、なんだか気分的に良いものではない。

とりたて、悪い事をしている訳ではない。

当然の権利を行使しているに過ぎないのだが。

女性の多い職場である、問題も多い。

事が新婚旅行などという場合はなおさらだ。

その為、アキラとは異なった意味でお土産の選択、また数量の決定を難しいものとした。

帰国後の2人に新婚生活を楽しんでる余裕などないと言って良

かった。

帰宅時間の遅いアキラと、日勤、夜勤と変則的な勤務形態の真奈美とでは、

すれ違いの生活が日常化していた。

喧嘩する暇もない程に。

急激に2人の中の熱は冷めていく。

というより、熱くなる時間が無かったと言った方が正しかったのかもしれない。

危機を乗り越えるため2人が選択した事は、子供をもうけることだった。

産休に入ると少しは時間が持てるようになり、最悪の事態は避けられた。

しかし、真奈美は家庭に収まることを望まなかった。

「専業主婦はむいてない」

産後間もなく仕事に復帰した。

それからというものの、パートで働く義母がしばしば家事から子供の面倒をみてくれるようになった。

2人目を産んだ後も同様であった。

色々と気を使ってくれるのはありがたい事ではあるのだが、体調の方が心配であった。

電話から懐かしい声が聞こえてきた。

「アキラくんか、うちの奴が入院した」

離婚してもなお、わざわざ電話をくれたのにはそれなりに訳があるに違いない。

「病院に来てくれないか」

今更、どんな顔をして義母さんに会えば良いというのか。

普段からあまり虫の知らせやら、直感やらといった類いの第6感、そういう部類には鈍感だった。

今回ばかりは嫌な予感がする。

どうすべきか迷った。

気になって仕事に集中しずらく、この状態を続けることは得策でない。

次の休みの日に病院へ行ってみることにする。

因果なものだ、別れた妻と出会ったこの大学病院で、今度はその元妻の母と会う事になるとは。

真奈美は他の病院に移ってはいいるのだが。

出会いから10年以上が経過をしてはいるが、モダンな設計の本館は今でも古さを感じさせない。

当然、経年劣化があるものの、メンテナンスは行き届き、病院の運営は順調のようだった。

敷地面積は10数年前に比べると、かなり増している。

駐車場などはアウトレットモールを思わせる立体構造に建て替えられていた。

多くの人々が入り出している事を象徴している。

増員された警備員の数をみてもそれを感じさせた。

病院が繁盛するのはけして喜ばしい事ではないのだけれど。

季節は秋から冬へと確実に近づいている。

樹々の葉は色付きを増し、日々の寒暖の差が紅葉へとむかう葉達の道しるべになる。

院内のイチヨウ並木を本棟に向かって歩いてみると、少しずつではあるが、

所々、歩道を落ち葉が覆い始めている。

銀杏が落ち始める頃は、この歩道も大変な事になるのだろうか。余計な心配をしながら歩いた。

新しく建てられた別館にある花屋で適当に見繕ってもらった花束をもち、

空調を考えての事なのか、2度自動ドアを通過し1階正面ロビーへ行く。

総合受付の方へ歩いていると、義父の姿が視界に入る。

向こうも気が付いたようで、こちら寄ってきた。

初めて会ったときの義父は、まるで熊のように髭だらけの容姿に、体格も良く力強い威圧感を感じさせる男であった。

酒の飲み過ぎがたたり、肝臓を壊し糖尿病まで併発し、今ではすっかりスリムになられた。

以前の殺気立ったものも皆無である。

真奈美が出て行ってから義父に会うのは初めてのことだった。

「一緒にきてくれんか」

それだけ言うと義父は振り返りエレベーターがある方へ向かい歩き出した。

Episode 13 義理母(5)

廊下に置いてある長椅子に腰掛け待つようにいわれた。

初めて会ったときの事を思い出す様な長い沈黙が続く。

しかし、明らかにあの時とは違う重苦しい感じがする。

「コーヒー買ってきます」

アキラは席を立とうと腰を浮かせた。

「ガンなんだ」

予感はしていたこととはいえ、それが今この場で現実に聞かされる
と、

どのように振る舞うべきか考えもつかない。

中腰のままの体制を、ただただ力なく腰掛けに戻すしか今は方法が
無い。

「もしかして肺ですか」

義父は視点の定まらない状態で頷いた。

やはりそうであったのか。

以前から咳が気にはなっていた。

しつこいようだったが、病院に行く事を繰り返し勧めた。

「電子部品のハンダ付けの仕事を何年もの間やってきた、その煙で
気管支に炎症を起こしているだけ」

そう言つて義母は笑うだけだった。

「もうお終いにしたから大丈夫」

仕事を辞め、随分時間が経つたが咳は一向に静まる気配を見せず、
むしろ症状はひどくなるばかりに思えた。

担当のドクターに呼ばれ、2人は指示される部屋に入る。

示された丸椅子に腰掛けると、シャウカステンのスイッチが入れら
れ、

そこに挟んである画像を裏から照明が照らしだした。

素人には見ても何も解らないものばかりがいくつも浮かび上がって

いた。

ドクターは事務的に淡々と画像の説明をしていく。

アキラはノートに、専門用語が多すぎて理解しがたい言葉を、出来る限りメモをとる。

画像の白くなっている部分を示し、病状の進行具合を解りづらい言葉を並べ説明は進んでいく。

「先生、あとどれくらい生きられる」

義父はドクターの話しを遮るようにつつむきながらいった。

アキラはペンを奔らせる手を止め、義父の方に目をやった。

今度はドクターに視線を移しハッキリとした口調で繰り返した。

「あと、どれくらい・・・」

ドクターの語るニュアンスから想像するに、あまり良いとはいえない診断結果を連想させる。

誰もがこのような場面は避けて通りたいにきまっていた。

「ハッキリ言ってくれないか先生」

「腫瘍の大きさ、転移の状況を考えるとそう長くは望めません」

ドラマ等では何度となく目にした光景ではあるが、

まさか目の前でおこるとは全くの予想外であった。

「3ヶ月、それ以下の場合もあり得ます」

覚悟をしなければいけないことだった。

最悪な結果が気持ちを重くした。

アキラはなぜここへ来たのか、今になって後悔し始めた。

Episode 13 義理母(6)

もう他人である、知らん顔をしようと思えば出来ない事はない。

「顔をみていつてくれないか」

その気にはとうていなれそうになかった。

「今日は失礼します」

とにかく今は院外にでたかった。

「アキラくん、うちの奴ここ何日も風呂に入れてヤツってない、髪だけでも洗ってやりたいんだが」

アキラの足が止まる。

「なにか言っておく事もあるのではないか」

「.....」

「次に会える保証はないかもしれん」

義父はそれ以上は何も言わず病室のある棟へと消えた。

建物には光がまんべんなく注ぎ込み、館内はとても明るい。

白衣を着た看護師数名とすれ違う。

窓から差し込む光が白衣を照らし、目には眩しく感じる。

アキラにはそんな事を感じる余裕はない。

まるで迷路の様に入り組む廊下を案内の数字に従い病室までたどりつく。

入り口右横の壁に部屋番号の書いてあるプラスチック製の枠に、

山本 喜美子と書いてある札が差してある。

スライドさせるドアは小さな子供でも開けられる程軽く動く。

アキラは感情が表情に素直に出してしまうタイプであった。

自然な態度が出来るであろうか。

なんと言って声を掛ければ良いのだろうか。

涙を流さずにいられるのだろうか。

それらの答えが出ないまま、扉の前に立っていると、

スルスルっと自動ドアのように開いて扉の向こうから看護師がでた

きた。

予期せぬ出来事に、瞬きもせず花束を持ち立ち尽くす。

「アキラくんじゃないの」

ふくよかだった義母が、義父以上にやせている姿を想像した。

沢山の管が体に繋がれ、苦しそうに息をする姿も想像した。

それとは全く違う義母を見て驚いた。

「こっちおいで」

入り口付近に立ったままのアキラに向かって手招きをする。

「ご無沙汰しています」

にっこりと義母は微笑みを返す。

「元気にしてた、すっかり食べてるの？」

この期に及んで他人の心配をする。

「相変わらず元気だけが取り柄ですから」

アキラは坊主頭を掻いた。

「私は少し痩せたでしょ、どう、きれいになったかしら」

「.....」

相も変わらず可愛い事言う

「かあさん、アキラくんがシャンプーしてくれらしいぞ」

それを聞いて本当につれしそうな顔をする。

「休みの日に仕事させて申し訳ないね、それに汚い体だし」

Episode 13 義理母(7)

「シャワー室の様子、みてきます」

ここから出る理由が欲しかった。

それはどんな理由でもよかった。

義母の前で取り乱す訳にはいかなかったし、笑った顔も長くは続けられない。

アキラは走って病室を出た。

院内を走るなんて許される事ではない。

解つてはいるが、今はとにかく少しでも病室から遠ざかりたい。

それしか頭には浮かばなかった。

上を向いても涙があふれてくる。

拭いても拭いても涙が落ちてくる。

男子トイレの大用に駆け込み扉を閉め、その扉に寄りかかり声を出して泣いた。

5分だけ、それだけ泣いたらもう泣くのはやめようと、そう心に決めた。

浴室使用の許可をもらった。

義母をお姫様抱っこし、ベッドから車いすに乗せる。

こんなにも体が軽いとは思ひもしなかった。

これが命の重さなのか。

不謹慎にもそのような事を思ってしまう。

車いすを押す距離が、一步一步次の世界への道のりを近づける事になるのだろうか。

設備の整った浴室には、体にハンデをかかえてる方を入浴させる際に使用する介助器具があり、

出張でカットや顔剃りを行うための理、美容師が使用する椅子、鏡、シャンプー台と、

どれをとってもアキラの店よりも最新の物が備え付けてあった。

室内はベージュで統一され、無機質な感じを与える。

そのシンプルさがかえって落ち着きを無くす。

常備してあるクロス類は消毒薬の匂いがきつく感じられ、自分の店ではないという事を改めて認識させられた。

ゆっくり義母を義父の手を借り、シャンプー台の椅子に腰掛けさせ横にする。

指を髪の間に入れ、お湯を少しずつ掛け全体を湿らせただけで、多くの髪が抜け落ちる。

よく耳にする抗がん剤の影響なのだろうか。

それを自身の身で実際に体験すると、相当な衝撃を覚えた。

目の当りにすると、自然にマッサージをする指の力が弱まってしま

う。

力を緩めただけでは、抜ける毛の数が減る訳でもないのに。

「汚れてるでしょ」
1度シャンプーをつけただけでは泡立たない髪に、アキラの涙が数滴落ちた。

「しょうがないよ、いつもの生活と違うのだから」

2度洗いとするとようやくうっすらと泡が立つ。

3度目に良く泡を立て、摩擦を減らしても抜け毛はまだ指に絡み付いてくる。

排水が詰まらぬよう、毛を集め汚物入れに捨てた。

気づかれないようにしたつもりだが、伝わってしまったのかもしれない。

風邪を引かれては困るので、しっかり乾かす。

真奈美の事で詫びを入れるつもりだったが、何も言葉にならない。

「あー、さっぱりした」

肩を揉んであげよと肩に両手を置いた。

以前よりほっそりした感じが10本の指を通して伝わってくる。

骨にも数力所転移が見られると聞いた。

薬が切れてくるとかなりの苦しさを伴うとも聞いている。

「髪、洗いずらかったでしょ」

アキラは力の入らない肩揉みを続けながら、下を向きただ首を横に振るしか出来なかった。

車いすに乗せ体を抱えようとした。

「また洗ってもらえるまで、元気でいられるかな」

義母は消え入りそうな声でポツリとつぶやいた。

「何をいつてるのかな、またすぐ来るよ、いつだってくるよ」

義父を呼び、車いすを病室まで押していつてもらった。

このままでは平常心を保てそうにない。

アキラの足出口へと向かっていた。

駐車場へ向かう銀杏並木は銀杏が生らない物だと聞いた。

余計な心配だった事を思う。

意味の無い事を考えて気持ちを変えないと普通ではいられない。

指先に絡み付く髪の毛の感触が今でも残ってるからだ。

優子は不安を感じた。

「電波の届かないところにあるか、電源が入っていないためかかりません」

アキラの携帯電話はそれを繰り返す。

店に電話を入れるが、コール音が鳴るだけだ。

休みに電話が繋がらないなんて今までに一度もなかったことだった。特別何かがあるとは聞いていない。

院内は携帯の使用を禁止しているのは当たり前前の事である。アキラも当然駐車場で車から降りた時に電源をオフにしている。その携帯電話を取り出し、電源を入れ直し通話が出来る状態にした。イグニッションにキーを差しはしたが、しばらく走りだせそうになり。

しばらく過去の事が思い出されたが、今はどうする事もできない。

優子の声がなんだかとおもっても聞きたくなかった。

まだ仕事中的なだろう、帰ってから頃合いをみて電話をしてみよう。キーをまわし、エンジンをかけ駐車場のゲートを出た時に携帯電話が鳴った。

車を左によせ通話ボタンを押した。

「やっと繋がった」

聞きたいと願った彼女の声だった。

「何かあった？」

病院に来ている事、そこでの出来事を話して聞かせた。

「そうだったの」

なんだかいつもと違う優子のトーンが気になった。

「まだ何か関係があるの？」

予想外の質問にアキラは戸惑った。

「ごめんね、仕事中的なの」

そう言うと電話は一方的に切れた。

家に帰っては来たものの、何をしたら良いのか頭が回らない。ベッドによこになり、色々と考えを巡らせながら目を閉じた。かすかに残る優子の香を感じながら今日の出来事を思う。

「まだ、関係があるの？」

先程優子が言った言葉が気になった。

確かに真奈美との関係は随分前に終わっている。

だが、彼女の両親はアキラとその2人の子供には、ことの外良くしてくれた。

家事よりも仕事を優先した真奈美より、当時の我が家の事を理解し面倒を見てきてくれたのは他ならぬ

義母だった。

パートが終わると我が家に来ては、掃除、洗濯はもちろん、孫達を鍵っ子にしては可哀想だと言って、2人が学校から帰ってくる頃には、

高価なものでは無かったがおやつを用意し、迎えてくれたものだ。アキラは店から帰宅後夕食を採るが、そのほとんどを作ってくれていたのも義母だった。

そうなるであろう事を予期していたのか、結婚式前日に言われた事を時に思い出す事があった。

「こんなに強情で意地っ張りな娘をもらってくれてありがとう。不出来な娘ですがどうか幸せにしてやってください」
そう言って深々と頭を下げられた。

その約束を守れなかった事を一言謝りたかったただけだった。確かにアキラが顔を出したからって病状が良くなる訳でもない。痛みが和らぐ訳でもない。

ましてや真奈美との関係を修復する気持ちなど毛頭ない。

翌日営業時間が終わり、後片付けをした後優子に電話をいれた。

「なに？」

と、随分と素っ気ない応対であった。

「昨日の病院の件なんだけど」

「.....」

「何か怒ってるみたいだったから」

一応説明をしておきたかった。

「まだ怒ってるよ」

素直に返事が返ってくるとは思いもしなかった。

「やっぱり怒ってるのか」

「当然です」

アキラは病院での出来事を言い訳がましく再び話して聞かすのだった。

「なぜ私が怒るのか解ってる？」

優子はアキラが解ってないと思った。

「もう関係のない義母のところへいったから」

「もちろんそれもある」

優子は他にも原因があると言いたげだ。

「何年も生きてきたのだから色々あってあたりまえだ。ただ、黙って何も言わずに行った事がとても残念だわ」

確かにそれは一理ある。

優子自身、なぜこんなにもイライラするのかわからなかった。

焼きもちをやくタイプでもなかったのに。

どうやらどうにかなくなってしまったようだ。

「昨日は何度アキラくんに電話をしたか知らないでしょ？」

「.....」

「アキラくんからは何も聞かされてないうえに、何度電話しても電源は切れたままだし、

店の電話にも出ない。それだけで不安になるわなるほど。」

アキラが休みの日に電話に出なかった事など今までに一度もなかった。

「もう、一人きりになるのはいやなの」

それもわかる。

アキラも同じ事を思っている。

「わかった、オレが悪かった」

見えない優子に何度か頭を下げた。

その時だった、店の電話が鳴った。

今は音楽もFMの放送も流れていない店内には、呼び鈴がけたたましく響く。

「少しこのまま待って」

携帯電話を置いて、古いダイヤルタイプの電話の受話器をあげた。

「はい”アンダーグラウンド”です」

電話をかけてきたのは義父だった。

こんな時になんてタイミングの悪いことなんだ。

そんな風にあキラは感じた。

しかし、どこかいつもの義父の声とは違っていた。

どうせ淋しさのあまり、やりきれなくてやけ酒でも飲んだのだろう。

そう思える程、力の無い聞き取りづらい声であった。

「かあさんが逝ってしまった」

その言葉の意味をすぐには理解出来なかった。

「いった？どこへいったというんだ？」

声に出した時、その意味を理解した。

「えっ、だってあんなに元気だったじゃない」

こんな展開は一番予想外であってほしくないことだった。

「容態が急変してな」

「・・・・・・・・」

突然すぎて言葉が後に続かない。

「かあさん喜んでた。アキラくんにシャンプーしてもらって、きれいな体で逝けるってな」

「・・・・・・・・」

アキラには何もする事が出来ないあっけない最後だった。

その一部始終を優子は携帯電話を通じて聞き、そして状況を理解した。

「アキラくん、アキラくん……、聞こえる？」

携帯電話から呼びかける優子の声がかすかに漏れた。

Episode 14 小旅行(1)

小旅行

99

つき合い始めた2人にとってそれぞれの人間性を知るには、何日間か生活を共にしてみるのが一番手っ取り早い。

特に旅行などをすると、様々な発見ができるとても貴重な時間が過ごせる。

道中、ハプニングが起こったりすると尚の事良い。

お互いの技量や、器の大きさや行動力、判断力等が試せる。

もちろん癖や、生活感や、価値観など新たな発見も期待出来る。

渡瀬の会社が所有する、別荘が富士見高原にある。

アキラも施工の一部に協力した事で、使用が許されていた。

会社に行き、使用されていないか空きを確認し、使用者名簿に必要な

事項を記入したら、事務員から鍵を受け取る。

離婚をする前、まだ夫婦仲が良かった頃は比較的よく利用させてい

ただいた。

最後に行ったのはいつ頃だったのだろう、思い出すのも大変な程昔の事のように思う。

現場を担当する工事部の事務所に顔を出してから帰ろうと思いい倉庫に入ると、

渡瀬の愛犬アフガンハウンドのケリーがアキラの方を見ている。

アキラはケリーの存在は解っていたが、気づいていないふりをし無視をした。

ケリーから死角の場所を探し、身を隠し様子を見る。

アキラが近寄ってきて以前のようになでてくれる事を期待したケリーは、

いつもとは違う行動に淋しさを感じたのか、姿の見えないアキラの方へ視線を向け立ち止まったままでいる。

アキラが死角から顔をチラツと出すと、垂れ下がっていたシッポを振りだした。

体全体を死角から出すと、ケリーがアキラの方に寄ってきては甘えた鳴き声を出す。

その姿が何とも愛らしい。

「ごめんねケリー、今日はお前を散歩に連れて行く時間が無いんだ」
また来るからと言って喉の辺りを撫でた。

工事部の部長に挨拶だけをし会社をでる。

やはりケリーの体が少しばかり痩せたような気がした。

義母のあつけない死後、生命についてあれこれ考えさせられ、少々神経質になり過ぎているのかもしれない。

いつまでも引きずっていても何も得るものはない。

アキラは新しい人生を始めている、2度と戻る事の無い過去を振り返るのではなく、

これからの未来へ向けて気持ちを切り替えていかなければいけない。

旅行を計画したのは、そのようなことも理由の1つであった。

渋滞が好きではないアキラは、早朝や深夜に車を走らせる事を好んだ。

GMCのカーゴヴァンの後部をフラットにし、子供用の布団を積み込んで、

莉子と新をパジャマのまま乗せ、寝かせた状態で移動をする。

2人の子供が目覚ます頃には目的地に到着しているという具合だ

Episode 14 小旅行(2)

早朝に出かけるといふ事は、長時間の移動で飽きてしまい愚図るというようなこともなく、

皆にとって利点が多い手段である。

色々支度をしなければならぬ優子にしてみたら大変な事ではあるが、

その辺りを差し引いてもきつと楽しい思いができるはずである。

日が昇る前の気温が下がり始める4月の5:00AM、交通量もまばらな国道を中央道に向かって車を走らせる。

莉子と新は気持ち良さそうに後部で寝息をたてている。

2人の眠りを妨げないよう、アクセル、ブレーキ、ステアリングはソフトな操作を心がける。

もちろんオーディオから流れる音楽のヴォリュームはかなり控えめに設定してある。

前日も仕事だったアキラと優子は疲れが無いと言ったら嘘になる。

しかし、気持ちは高騰しその影響もあり、今は眠気を感じない。

いい歳をして、なぜだか2人はべたべたしたくなる。

人目に触れづらい車内だとなおさらだ。

特にここのところ2人の予定が合わず、久しく会うことができなかつたことも、その思いを強くする。

ルームミラーに映り込む景色が暗闇からつつすらと明るさを取り戻す頃、

西へと向かう中央道は、北西へと進路を軌道修正する。

辺りの風景が太陽の明るい光を浴びると、山肌には所々溶けずに残る雪が冬の名残を感じさせる。

風が冷たさを伴うのは、山から吹く風がそうさせているのかもしれない。

双葉のS・A・でトイレ休憩を採る事にした。

車外に出るには、1枚余計に羽織らないと少々キツイ。

トイレまでの距離がたとえわずかでも油断は禁物だ。

子供達が寝ているので交代でトイレの用を済ます事にした。

最近清潔に保たれている公衆トイレにアキラは感心する。

戻ってきた優子にその話しをすると、女性のトイレに限ってはそうでも無いらしい事を初めて知る。

特に休日の混雑するトイレでは、汚物入れが無惨な状態になっている事も決して珍しい事ではないのだという。

「男性の目の届かない部分は見せられたものではないわ」

女子校出身の優子は、女性だけの空間、女性達のみのある行動の話しをしてくれた。

男性の存在が無い時の女性達は、時に思いもしない行動をとる者もいるという。

もちろんいうまでもないがすべての女性がそうであるという事ではないらしい。

とても興味深い話題ではあった。

Episode 14 小旅行(3)

「お腹空いてない？」

昨夜からまともに食べていないアキラはかなりの空腹感を覚えていた。

「おにぎり作ってきたけど食べる？」

「うん」

家族旅行におにぎり、ありふれた光景だが、今のアキラにとっては幸せの象徴のように映る。

煮出して作ってきたルイボスティーも美味しいし、口の中に広がる香もいい。

この様なシュチュエーションに男は結構弱い。

おにぎりの握り方、形、サイズ、そして中に入れる具。

この辺りに女性の性格が出たりする。

統計をとったら面白い結果が出るかもしれない。

それにしてもいったい誰が考えたのかは解らないが、”おにぎり”

という文化は本当に素晴らしい。

コンビニで売られているおにぎりで、のりが別になっている物が存在するが、アキラは賛成しかねた。

それをまねて作ってきた女性が過去にはいたように記憶している。

長いおつき合いには至らなかった。

のりが米の余分な水分を吸収し、しっとりとして米と一体にならないとおにぎりとしての良さが半減する。

それが口の中で噛む程に磯の香が広がり、そして喉の通りも良くなるのである。

すっかり日が昇り青い空が広がり、それをバックに澄んだ空気の中に山々のシルエツトが美しく映える。

青い海を連想させる口の中の磯の香とは対称的ではあるが、自然を体で感じる瞬間だ。

富士見パノラマリゾートが見え、左下方に中央本線のレールが現れ、

小淵沢の駅から八ヶ岳高原線へと分岐する。

そろそろ中央道から降りる準備が必要だ。

料金所を出て突き当たりの交差点を右折する為、赤信号で停車する。

「ママ、おはよう」

「莉子ちゃんおはよう」

アキラは後部座席の方に振り返る。

「あーっ、アキラくんだ」

急に車内がにぎやかになる。

11号線を北上すると道の駅こぶちざわを過ぎる頃から長い上り坂になる。

「ママ、おしっこ」

道の駅でトイレ休憩をとる。

「アキラくん、莉子と一緒にいこう」

後部座席からウォークスルーを通って運転席に来る。

「ごめんね、アキラくんは男の子だから莉子ちゃんの女の子のトイレには入れないな」

莉子はアキラの腕にもたれ離れないでいる。

「行ってきたら」

そんな事を簡単に言う優子の顔を見た。

「男性のトイレでいいじゃん」

なるほど、莉子は小学生だし、たいした問題ではない。

「じゃあ、一緒にいこうか、上着もっておいで」

ダウンを着せ、ドアを開け運転席のシートに莉子を座らせ靴を履かせ抱っこをする。

Episode 14 小旅行(4)

外の空気はまだまだ冷たく感じた。

アキラは莉子を抱いたまま小走りでトイレに向かう。

「ねえ、アキラくんはママと結婚するの?」

突然の質問に戸惑う。

子供はいつでもどこでもとんでもなくドッキリすることを言い出す。

「うーん、どうかな」

答えに困った。

正直何も先の事はわからない。

「なぜ?」

アキラは逆に莉子に聞いてみる。

「うーん、なんでもない」

車に戻ると予想通り優子の機嫌がいまいちよろしくない感じがした。

「あらた、おはよう」

新も起きていた。

助手席にいる優子のももに横向きに腰掛け、おにぎりを頬張っていた。

「あらた、トイレは大丈夫か」

新は優子の顔を見上げた。

「おしっこいく」

「アキラくんといっってきて」

新はアキラの方を一瞬見たのだが、すぐに下を向く。

再び照れながらアキラを見た。

「おいで」

アキラは両腕を誠の方へ延ばしそして誘う仕草をした。

照れて下を向きモジモジする。

「ママでいいや」

優子は不満そうな表情をする。

「ママでいいや？しょうがないからママでいいというならお断りだわ」

「うーん、ちがうちがう、ママがいいの」
「いずれにしても世話のやける親子だ。」

「もうすぐ目的地だ、早く済ませておいで」

きれいに区画された別荘地には個性的な建築物が多く立ち並ぶ。

「すごいね、素敵だね」

そろそろ皆のテンションも上がってきた。

子供達はしつかり寝て起きた事もあり、かなりののはしゃぎ様だ。

F区画の一番奥に一般住宅ではあまり観る事のない、半円球体のドームハウスが姿を現す。

直径で30ft程はあると思われる。

全体を濃いグレーをしたアスファルトシングルで覆われ、一見すると宇宙人が造った秘密基地のよう。

「まこと、もしかしたらスカイウォーカーが住んでるかもよ」

「本当？」

スターウォーズにはまっている新は、その一言で俄然興奮が高まり瞳がキラキラ輝き出す。

「ライトセーバー持ってきたか」

「忘れた、どうしようママ」

車内で飛び跳ねていたはしゃいでいた新は、急に静かになり表情が曇り始めた。

余計な事を言ったアキラは、ホローが大変になり、自ら墓穴を掘った。

助手席で優子は笑顔でその光景を見ていた。

Episode 14 小旅行(5)

渡瀬の会社で保養所として使う別荘の話が出た時に、アルバイトで現地の草刈りをした。

その際、別荘を建てるならドームハウスが良いのではないかと強く薦めた。

いつか住んでみたかったのだが、到底手の届かない夢で終わりそうだった。

自分の物ではないが、使わせてもらえるなら望みが叶うかもしれないと感じた。

当初ハンドカットのログハウスが候補に挙がっていたのだが、渡瀬にパンフレッタをみせ、展示場にも案内をし、実物を観てもらったところ、

一瞬で気に入ってくれた。

キットのみでも購入出来、施工は自分たちで可能だという点も決めた。手の1つになった。

間取りも自由に設定出来、図面をひきながら楽しめるといふ非常に面白い物件であった。

中に入ると外見から想像するより広く感じられる。

我々が選択した間取りは球体の頂点をまでを、半分が吹き抜けになっている、

球体の特徴である壁と天井の境が無い建物の構造上、一般の住居にはない不思議な空間と開放感が得られる。

音の広がりも気持ち良く、会社の会長さんの趣味でもある高級オーディオも、

その持っているスペックを勿体ぶらすに發揮出来てご満足の様子だ。薪ストーブの暖も効率よく室内全体に行き渡る。

頭上で緩やかに回る2機のシーリングファンが空気の流れを手助けしている。

もちろん真夏の日中でも、窓とトップライトを解放してあげれば、冷房の装置などは不必要だ。

日が落ちると、窓は閉めないと肌寒い位である。

ここへ来たら、まずはしなければいけない事がある。

今の時期は夜になるとまだまだ冷える事もあり、ストーブに焼べる薪割りが必要だ。

「あらた、ちよつと降りてこい」

2人に与えたロフト部分のベッドルームに向かってアキラを声をかけた。

ベッドルームからは出てきたが、降りてはこない。

アキラは、吐き出しの引き戸のロックを解除し、リビングからウッドデッキに置いてあるサンダルを履き外へ出た。

ウッドデッキ中央左寄りに穴があけられ、大きな樅の木が植えられている。

冬になるとイルミネーションが施され、雪が降ると何とも言えない雰囲気醸し出す。

ウッドデッキは玄関の前まで続き、エントランスを兼ねている。

5段の階段を降りると、枕木が駐車スペースまでの通路に敷かれている。

3台程置ける駐車スペースには褐色のインターロッキングが敷き詰められている。

数年前の真夏の暑い日にアキラと渡瀬が丸々3日を費やし仕上げた物だ。

Episode 14 小旅行(6)

緩やかな傾斜地を利用して建てている事もあり、建物の周辺は裏に向かつてスロープになっている。

そこは青々とした芝生が植えられていた。建物の下は半地下構造の物置になっている。

薪に使用する木と、メンテナンスをする機器やガーデニングの道具が置かれている。

芝生が大分伸びているので刈り込む事にした。

小型の芝刈り機に混合ガソリンを入れ、物置から外へと出す。

燃料コックをONの位置へ動かし、チョークレバーを引き、スターターのロープを勢い良く3度引く。

少し間を置き4度目を引いた。

エンジンがかかるか不安に感じたが、心配を他所に勢いよく回りは始めた。

エンジンの音に驚いた鳥達が周囲を囲む過ぎの樹々から四方へ飛び立っていく。

驚いたのは鳥達だけではなかったようだ。

2人の子供が窓から顔を出しこちらを見ていた。

優子も同様だった。

莉子の顔が窓から見えなくなり、間もなく芝刈り機の進行方向前方に立っているのが見えた。

エンジンの音と芝を刈るバリバリという音に少々恐怖を感じているようだ。

アキラは、莉子に向かって機械を迂回してこちらに来るよう手招きする。

恐る恐る近づいてくると芝刈り機を押しているアキラにしがみつく。

上からその様子を伺っている新は、きれいに刈り取られていく部分とそうでない部分のコントラストが、

美しく感じた。

アキラは上を見上げると叫んだ。

「あらた、やってみろよ！」

新はじつとしていられなくなり、アキラの所に走ってやってくる。機械を押ししてみるよう薦めた。

独特の音と振動が初体験の好奇心を刺激する。

扱いにもなれると、不安な表情は消え、楽しそうな笑顔に変わる。

男の子はやはり基本的に機械物が好きなものである。

息子の禅の事が思い出され、新たな姿とだぶり複雑な気持ちになる。彼は今頃何をしているのだろ。

刈り取った芝を熊手を使い一カ所にまとめていく。

莉子は刈り取った芝を真つ青な空に向け、両手で放り投げる。

風に舞う様子を無邪気に楽しんでいる。

空の青さと芝の緑がいい感じで混じり合う。

刈り取ったばかりの芝の若々しい香が、そよぐ風に乗りに漂う。それを隅から新が熊手で集めて回る。

集めても、集めても、莉子によってまき散らされる芝を、新は声を出し叫びながら駆け回る。

コンクリートとアスファルトの街中では、なかなか体験出来ないコマだ。

優子はアキラが持ってきた、N i k o n、F Mのフィルム一眼レフのファインダーに、その一部を納めた。

アキラもその光景に夢中になり、本来済ましてしまわないといけな仕事、薪割りを忘れてしまうところだった。

Episode 14 小旅行(7)

半地下の物置から蒔き用の木を十数本運び出し、大きな切り株に木を乗せ、斧を使い割り始めた。乾いた心地いい音が辺りに響く。

当然新は薪割りにも興味を示し、アキラの近くに寄ってきた。子供用の小さな斧を物置から持ってきて新たに挑戦させようとしたが、斧の重量が重すぎて無理があったようだ。

莉子は割れた薪を拾い集め、ラジオフィヤーに載せる役を買って出た。

優子が新たな代わりに熊手を使い芝を集め、丈夫なガラ袋に押し込んでいる。

薪は今夜使われると予想される分だけ、室内に持ち込む。ストーブの付近は煉瓦が敷かれている。

そこに薪を積み上げる。

新がきつちりきれいに積んでいく。

こんなところにも性格が出るものなんだと思わせる。

明日の夜はビーフシチューに挑戦する予定だ。

その為に、ストーブでジックリ煮込むので、きつと多めの薪が必要になるかもしれない。

午後の日差しが辺りの空気を熱し始め、気温が少しずつ上昇していく。

トレッキングには最高のコンディションになってきた。

アキラはデイパックにフリースの足掛け、小型のカメラと新聞紙、ミネラルウォーターそしてジップロック。

優子はバードウォッチング用のスコープと鳥の図鑑、道の駅で買った皆の分のサンドイッチを持参。

莉子はスケッチブックと柔らかめの鉛筆、クレパス。

そして植物図鑑と昆虫図鑑を肩掛けバックにいれる。
新はおやつと水筒を持つ。

準備を整え裏山へと探検に出かける。

比較的天候も安定していると予報がでている。
ならば迷わず決行である。

今夜の夕食でもある山菜と茸をターゲットにする。
うど、たららの芽、せりなどを天ぷらにする予定だ。

右の下方から川の流れる音が聞こえる。

人が行き来する事で出来上がった川沿いの道を、往復2時間強の予定でゆっくり歩いていく。

途中の丸太の階段は別荘地を管理する業者が手を入れたものだ。

山の奥へ一歩一歩進むごとに、樹々の葉や花が放つ自然な香が増していく。

街中の生活感が薄れていくことに鳥の声や虫の行動、季節の香等、5感が段々と研ぎすまされ、

便利な日常から距離を採る程に、本来の動物としての本能が働き出す。

新は道草を食っては、木の実を試食していく。

「あらた、やたらに何かを口に行っているけど大丈夫かな」

優子は覗いているスコープを目から離した。

「あの子、学校帰りにも色々口に行っているみたいだったよ。最近あまりやらないみたいだけど」

ご近所の味見は一通り終わったという事か。

都会的な顔立ちや、照れ屋な見た目に反し、結構野性的な面があるのは少々意外だった。

Episode 14 小旅行(8)

渡瀬に教わった山菜の在処を目指し、少々脇道にそれる。

莉子はアキラの手をずっと離さないでいた。

もう一方の手には植物図鑑を持っている。

どうやらお目当ての山野草を探しているようだが、まだ見つからないようだ。

新はというと、相変わらず木の実が気になるらしい。

立ち止まった莉子は、肩掛けバックをおろすとしゃがみ込み、スケッチブックとペンケースを取り出した。

莉子の目線の先にあるヤマシヤクヤクの白い花びらが、ウィングラスの様に丸みを帯び可愛らしい。

その葉に小さなカタツムリが乗っている。

莉子が真っ白な画用紙に4Bの柔らかめの鉛筆でスケッチを描き始めた。

アキラはレジャーシートを1m四方程度に折りたたみ敷く。

「りこちゃん、ここに座るといい」

腰掛ける莉子にフリースの膝掛けをかけてやる。

「アキラくん、ありがとう」

アキラはしばらく見ていたが、カメラを取り出し莉子のスナップを撮る。

森の緑と莉子の黄色いウィンドブレイカー、そして真っ白な画用紙のコントラストがいい。

背の高い樹々の間から差し込む柔らかかな光が最高の照明の役割を果たす。

モノクロフィルムは光が重要な要素をしめる。

画用紙がレフ版の役目をし、幼い莉子の顔を照らしていた。染み一つない綺麗な肌が透き通ってみえた。

しばらくここを動く事はなさそうだ。

今夜の天ぷらに必要な分の山菜の収穫を始めることにした。

スコープを覗き込み、バードウォッチングに夢中になっている優子に手伝いをお願いする。

「今夜の食料を調達するよ」

逆光の中で振り向いた彼女のシルエットに体の線が浮かび上がる。

鳥の姿を追い、上の方はかりを気にしていた優子は、足下の豊富な食材に気が付かなかったようである。

「こんなに沢山自生しているんだね」

「ああ」

隣に来て、腰を屈めアキラの手元をみる。

しゃがんでいたアキラが、優子に向けていた視界から彼女のシルエットが消え、差し込む光に目を細める。

「採りたて、新鮮だね」

「うん」

優子は、山の養分ときれいな水を沢山蓄えた贅沢な自然の恵みに感謝した。

アキラは新聞紙にミネラルウォーターを湿らせ、ジップロックに入れていく。

量も豊富にある。

今年はどうやら当たり年のようだ。

「オレもとる」

新も収穫に参戦してきた。

木の実コレクターの彼は、山菜の味にどのような反応を示すのだろうか。

当然この光景もフィルムに残す事は忘れてはいない。

Episode 14 小旅行(9)

折り返し地点は見晴らしの良い展望台である。

高台から街を見下ろすと、人間は自然に抱かれ生かされているのだという事を改めて思わされる。

以前優子が、自然の大きさに励まされて頑張ったという話しをしてくれた事をアキラは思い出していた。

「アキラくん、サンドイッチ食べる」

「ああ」

空気がきれいだと、食べる物も美味しい。

下りはのぼりよりも辛い。

ぐずる事もせず、頑張って歩いてきた莉子と新は、下りではどうなのだろうか。

そろそろ疲れが出る頃だ。

3枚のスケッチをした莉子は、展望台のテーブルで、クレパスを使い細かいところの仕上げをしている。

スケッチの隅の方に一言言葉が添えてある。

”アキラくんと、ママと、新と私。4人で初めて歩いた高原”

素敵な絵が出来上がった。

「さて、キノコを採ったら帰るぞ」

「おーっ」

新は思っている以上に元気である。

キノコは知識のある物意外は採らない事にする。

子供達の元気な姿につられるように、帰り道を歩く。

トレッキングコースが終わり、街に出るとある一軒に寄る。

手打ち蕎麦を買い、今夜の食料はすべてそろった。

ビールを飲むのもいうまでもない。

「さあ、風呂に入るぞ」

一生懸命歩いた子供らはきつとすぐに眠くなるはずである。空腹が満たされたとしたのなら、なおさらだろう。いつ眠気が襲ってきてもいいよう、泥汚れと汗は洗い流しておくといい。

2人を順にシャンプーをし、体を洗い家より遥かに広い湯船に浸かる。

「アキラくん、僕の髪も切ってくれる？」

新が予想外の言葉を口にしたので、アキラは驚いた。

「どんな髪型にしようか」

新はいつものように照れて下を向く。

しばらく考えた彼は、思い切った言葉を口にする。

「アキラくんと同じがいい」

男の子にしては長い部類に入るその髪を坊主にするというのだ。

聞くと、今までは髪を切らせるのが大変な苦労だったらしい。

彼なりの何か拘りのようなものがあるらしかった。

それがどういふ心境の変化なのだろう。

「いいぞ、とつてもいいぞ、男らしくなる」

「僕、似合うかな」

「ああ、カツコイイと思うぞ、オレは賛成だ」

「やったー」

アキラは新の気持ち嬉しかった。

「あらた、アキラくんと同じ髪になるの」

「うん、そうだよ」

莉子もうれしそうだ。

「あらた、帰ったらさっそく髪を切ろう」

「うん」

照れもあるのか、湯船から飛び出すと勢いよく浴室を出て行った。天ぷらを揚げるいいにおいがしてきた。

「あーあ、お腹減った」

「うーん、お腹減ったね」

アキラと莉子は、湯に浸かりながら天ぷらの出来上がり想像した。

Episode 14 小旅行(10)

外の温度は日の入りと共に下がってきた。

湯冷めをしないよう、アキラはストーブに薪を焼べる。

新は予想通り、疲れと空腹が満たされた事で、ダイニングに置かれたテーブルで、食事の途中で座ったまま寝てしまった。

子供の体は不思議な程柔軟だ。

大人には考えられない体制で寝ることができる。

首をうなだれた状態では確実に寝違えしまうのだろう。

子供達が使った寝室に運ぼうと、アキラが椅子を引くと、新はビックリして目を覚ます。

しかし、数秒で再び夢の世界へ戻っていった。

新を抱きかかえベッドに寝かせた。

「ありがとう」

階段を降りてくるアキラに優子は頭を下げた。

顔をほんのりピンク色に染めた今夜の彼女のビールを飲むペースは少々早いように見える。

「りこはまだ眠くないの」

これからは大人の時間だ、莉子には早めに遠慮してもらいたい。

優子はそんなチョットだけ意地悪な事を思うのだった。

今日の出来事を興奮気味に話す莉子には、まだまだその気配を感じさせない。

アキラは空いた食器をシンクで洗い始める。

その横に莉子がやってきては話しを続けた。

つまみになりそうな物を何品か残し、テーブルの上を片付ける。

「りこちゃん、歯を磨いて続きはベッドの中で話そうか」

「アキラくん、一緒に寝てくれるの」

「うん」

「やったー」

莉子は脱衣場に行き、さつさと歯磨きを終えダイニングに戻ってきた。

「りこも抱っこして」

優子の方へ視線を向けると、顔が先程より更にピンク色を増して火照ってみえる。

それはアルコールの影響なのか、それとも莉子に嫉妬してのものなのか。

おそらくは後者の可能性が強いのではなからうか。

ベッドに入り、続きの話しをしていると莉子は途中で中断した。

「ねえ、アキラくんはママと結婚するの」

今朝も聞いてきた質問を再度した。

「うーん、そうだろう。そうなれるといいなーって思ってる」

「じゃあ、りこのパパになるの」

「うん、その時はそうなるね」

「そうになったら、りこはうれしいな」

「そうになったら、アキラくんもうれしいよ」

腕枕されている莉子はニッコリ微笑む。

「おやすみなさい、アキラくん」

莉子はアキラの胸に顔を埋め目を閉じた。

アキラはそんな莉子が愛おしく思え、頭を撫でる。

しばらくすると頭を上げアキラの方を見た。

「もしママが結婚してくれなかったら、りこがアキラくんのお嫁さんになってあげる」

そう言って莉子は眠りに落ちた。

Episode 14 小旅行(11)

リビングダイニングをロフト部分から見下ろすと、優子はアイランドキッチンのシンクで洗い物をしているのが見える。

アキラはそつと背後から近づき、腰に腕を回し抱きしめ髪にキスをする。

優子は無視をした。

まるでアキラの存在が無いかのように振る舞う。

「ユウちゃん」

アキラは耳元で囁いた。

優子は無視を続け洗い物をする。

「ユウコ」

そう呼ばれた時、優子が反応し一瞬手がとまった。

「アキラくんも、やっぱり若い女がいいのね」

すねる優子を抱きしめる腕に力を込めた。

「ユウコはまだシャワーも浴びてません。汚れているから触らないで」

洗い物をする手に余計な力が入り、洗剤まみれのグラスが手から滑り落ちる。

「もう一度呼んで」

落ちたグラスを見つめながら優子はつぶやいた。

「ユウコ」

優子は振り向き、アキラの唇を求めた。

洗剤まみれの手をアキラの両頬に添える。

アキラも気持ちを含め、優子の激しい気持ちに応えた。

「シャワー浴びてくる」

優子はこのまま抱かれたい気持ちを抑え、浴室へと消えた。

アキラは薪を追加した。

ストーブの柔らかな炎がメインの間接照明になるよう、ドームの天

井付近から室内を照らしているダウンライトの光を落とすため、壁にあるスライドタイプの調光スイッチを操作する。

ダイニングテーブルの中央に、ロースのアロマキャンドルにジッポのオイルライターで火を着け置く。

嫌みの無いほのかな香が、ゆらゆらと揺れる炎に溶かされ気化していくロウと共に広がる。

アキラは着ている物をすべて脱ぎ、再び浴室へ向かう。

高い位置のフックに掛けたシャワーヘッドから出る熱めのお湯を頭から浴びる優子の体を、

たちのぼる湯気がかすかにぼやけさせる。

2人の子供を産んでいるとは思えないボディラインが、アキラの下部への神経伝達の回路を確実に刺激する。

シャワーヘッドから放たれた水分が、優子の体の凹凸が作り出す滝のような流れを、密着させたアキラの体が遮断する。

アキラの体温がたちまちシャワーで熱せられた優子の体温と同化する。

「アキラくん、ユウコの体も洗ってくれる」

優子はアキラの方を向く。

子供のようにねだる彼女がとても愛おしい。

アキラは自分の店から持ってきた、いつも使っているシャンプーを掌に採り、向かい合った優子の髪につける。

きめ細やかなホイップクリームのような白い泡が髪全体を覆った。

10本の指で地肌を適度な力で刺激する。

「きもちいい」

満足そうな顔をする優子にキスをした。

Episode 14 小旅行(12)

ストーブの前に敷いてあるラグに2人は横になる。

アキラはクツションに頭を寄せ優子を引き寄せた。

優子は胸に顔を寄せ、アキラの鼓動を聞いている。

リズムカルに聞こえる音が生命の存在を伝えていた。

ただ1枚のブランケットだけが2人を包み込んでいる。

その中で身を寄せ合い、薪が発する熱で暖をとる。

柔らかな光が2人の顔を照らし出す。

「ユウコのことを、随分前から知っているような感じがする」

知り合って数年のはずなのに、小さい頃からずっと一緒に生きてきたような錯覚をすることがある。

それよりも、優子の体自体が別物の個体であることに違和感さえ感じました。

それはまるで自分の体の一部のように感じる事さえある。

アキラに特別な力がある訳ではない。

どちらかというと、人の気持ちに対しては鈍感な部類に入るのかもしれない。

優子の考えてる事が解るといふこととも違う。

何とも言い表せない一体感というものを感じることがある。

ただ、今がいい時期であり、何もかもが良く感じられる時であるだけなのか。

優子はアキラに出会ってから、色々な喜びを知った。

身も心も満たされるといふ感覚も覚えた。

安心感も得られた。

共感というものも感じ取れた。

優子もまた、不思議な一体感を感じた。

このままの状態が永遠に続くなんてことはないと思っている。

この先、意見の食い違いもあるだろうし、喧嘩だってするだろう。

理解のできないことが出てくるだろう。

それでも、こうして解り合える時間がいつの日にも訪れたら幸せなのだろう。

そう思っていた。

「アキラくん、これからもユウコってよんでね」

「ああ」

アキラの指が優子の体の出っ張った部分をとらえる。

お湯の熱でも、ストーブの熱でも、アルコールの影響でもない、火照った体は敏感に反応した。

優子の一番敏感なところをアキラが柔らかな刺激をする。

ブランケットがはだける。

アキラは1階の寝室に優子を誘う。

ベッドに優子を横にならせ、アキラはダイニングテーブルに置いてあるアロマキャンドルを持って寝室に戻ってきた。

キャンドルの光に照らされ壁に作り出された2人の影が重なり合う。暗い室内に優子のせつないともいえる甘味な声が響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4147k/>

残り香

2011年10月6日23時00分発行